
カリスミアの婿探し

露露

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カリスミリアの婿探し

【Nコード】

N6415E

【作者名】

露露

【あらすじ】

泣き虫でとことん悲観的なカリスミリアはある日、とつとつ【婚約者探し】という最大の難関に立ち向かわなければならなくなる。早速色々と行動に移してみるが、結果はさんざん。そんな中、ある嵐の夜に、カリスミリアはとんでもないものを見つけるが……。恋愛×ファンタジー。 2011.5.23 - 章タイトル一部変更しました 2011.8.8 - 完結しました

？ ・ 告げられた憂鬱 1

それは単なる伝説か、あるいは空想好きの戯言か。

【フェアリーランド】 と呼ばれる妖精だけが暮らす平和な場所が、

この世界のどこかにあると言われている。

どんな場所で、どれほど妖精がいるかなどの詳細を知る者はない。だが、【フェアリーランド】 を人間は皆信じていた。

子どもの頃に必ず聞く物語でもあった。

人間によって語り継がれるその場所では、争い事は無く、悩みも悲しみも持たない妖精たちが自由気ままに暮らしている。そんな

【フェアリーランド】 は人間にとつて天国に匹敵する。

そして誰もが一度は行ってみたいと憧れる。

…… 本当に、そんな世界が存在するのならば。

* * *

「パーラン姉さん！ 来て下さったの、婚約おめでとう！」

「ありがとう」

ある天気の良い昼下がりに。

庭で陽光を浴びていたカリスマミアは、突然の訪問者に顔を綻ばせた。

同じく笑みを湛えるカリスの姉、パーランミアは一人でやって来たようだ。

婚約者は、と問うと、少し笑顔を曇らせた。

「まだ話していないから今日は止めたわ。そのうちに、ね」
「……そう。でも、見たかったな、“あれ”」
「“あれ”？」

カリスは両手でジェスチャーをしてみせた。

ああ、あれ、と嬉しそうに笑うパーランから、幸せをひしひしと
感じ取る。

正直、羨ましくて泣き出しそうさ。

「なんて顔してるのよ、正直ねえ。お前の気持ちは察するけど、あ
んまり卑屈にならないことよ」

「分かってまあす……」

「さあ笑ってカリス！ ほら！ じめじめしない！」

パーランはそう言ってウインクを寄越す。

前向きで明るい所も自分とは正反対の姉。

そうしていつも励まされて、笑顔をくれるのは姉たちだ。

カリスには三人の姉がいる。

長女 ウエスマリアはすでに結婚しており、パーランは次女で
最近婚約したばかり。

三女 テイトナミアはカリスの一つ上で、只今婚約者 “選
択” 中。

この四姉妹の末っ子が、カリスだった。

「そうさパーラン姉さん。私新しい香水を作ったの、試してみて？」

「わあ嬉しい！ カリスの作る香水は独特でいい香りなのよね。町
でも人気があるのよ」

「えへへ……。あ、二人が帰って来たわ。パト、チャム！」

カリスの声に気付いた二人の少年が庭にやって来た。
訪問者がいると分かり、笑顔になる。

「いらつしゃってたんですねパーランさん。分かっていたら出掛け
なかったのに」

深い海の色をした髪から覗く瞳がパーランに向かう。
その瞳は髪と同色で、光の加減ではブルーにも見える。

「ありがとうチャム。でも気を遣わないで、私は身内なんだから」
「だからと言って、お客様をカリスに任せたら、色々大変なこと
になりますからね」
「何よ、チャム！」

カリスの不満げな声が飛んだ。
しかし全く意に介さない様子で言葉を続ける。

「この荷物を置いたら飲み物を淹れて来ます。パト、こつちをよる
しく」
「おっけー」

夕食の材料の調達だったらしい。
大きな魚が一匹、チャムの後ろに続く。
後姿を見送りながら頬を膨らませたカリスが、勢いよくパトを振
り返った。

「もうチャムは！ 私に任せたら何が不安だっというのかしら。ね
えパト？」

「うん、まあ……色々と？」
「えええ！ パト、あなたまでっ」

「ああああ、泣かない泣かない。冗談だよー、冗談！ ほらカリス、笑って」

瞳を潤ませるカリスを、慌てて宥めるパトの笑顔が引き攣っている。

彼女の性格を熟知しているため対応は慣れたものだが、厄介なことには違いない。

二人のやり取りを見守っていたパーランは、堪え切れずに笑い声を上げた。

「相変わらずねカリスは！ この子の世話は大変でしょう？」

「そりゃあもう大変」

「パトっ」

「な、わけないじゃないですかあ。ほら、見ての通り、毎日がたのしいなっ、と」

不自然な笑顔で返された答えに、うふふ、と笑うパーランは、全とお見通しのようなのである。

まあいいわ、と話を切り、それ以上の追求はしなかった。

「そうだパーランさん、聞きましたよ、婚約のこと。おめでとございます。

相手の方は【土の一族】 だとか。

たくさん申し込まれていたのに、今の方を選んだ理由って何だったのでしょうか？」

パーランはまず、パトの祝福に礼を述べ、少し首を傾げて質問の答えを探す。

「そうねえ……やっぱり、私のこと大切にしてくれそうな人だと思

つたからじゃないかしら。

お見合いだもの、ほとんど直感よ」

「へえ〜。直感ってなんかすごいな。それにしても、幸運な方ですねえ、相手の方は」

「うふふ、ありがとう、帕特」

「いえいえ」

元来波長の合う二人が、そんな和やかな会話をしている間、ずっと沈黙していたカリスの態度は決して故意などではない。

どちらかと言えば、話題についていけなかった いや、入り込む勇気がなかったのだ。

それにはきちんと理由わけがある。

？ ・告げられた憂鬱 2

「飲み物をどうぞ」

いつの間にか庭へ戻って来ていたチャムが、三人の囲む木製のテーブルへ二つカップを置いた。

「パーランはその独特な香りに首を傾げる。」

「これは何かしら？ 紅茶？」

「ハーブティの一種らしいです。そうでしたよね、カリス？」

「あら、これもカリスが？」

「うん。色々組み合わせしてみたの。美味しいのよ」

「カリスは何でも混ぜちゃうんだよね。混ぜるの大好きなんだよね？」

そう言っつてパトが笑った。

褒められたと思ったのか、満更でもないカリスに、チャムは大きく嘆息した。

「その癖がいつも禍を引き起こすんです。笑ってないで反省して下さい」

「だつてえ。もしかしたらっつて思ったら、勝手に手が動いてるのよ。ほら、失敗は成功の元つて言うでしょう？」

「何事もやっつて見なければ分からないじゃない？」

「こんな時だけ前向きになるのはやめて下さい。」

「失敗して命を落としたらそれまでつてこと、分かっています？」

「命つて……そんなに？」

単なる癖の話から、どうして命の話になるのか腑に落ちない様子

で、パーランはほんの少し眉根を寄せる。
そういえば、と、今にも噴出しそうになりながら、パトが話題に
被さった。

「この間も、火にかけてた油に水を入れてバチバチなっちゃって、
キヤーって叫んだまま、持ってた鍋を火の上にひっくり返してさ、
ぼんっ！」

「！……だ、大丈夫だったの？」

「……なる前に、危機一髪。チャムが消火したってわけです。
熱した油に水を入れたらどうなるかぐらい分かってる筈なのに、
何で混ぜたのって聞いたら、カリス、何て答えたと思います？」

持って回った問いはパーランに向けられた。

隣では、不服そうにしながらも反論の機会を窺っているのか、テ
ーブルに載せられた手は二つとも握られている。
それを目端に映して、パーランは首を振った。

「あの時、“調味料と間違えて！”って。

……僕とチャム、一瞬ぼかんとしましたよ！
大量の油に調味料も加えないでしょう、ふっつー！」

笑い転げるパトをカリスが睨んだ。

パーランもつられて笑い出し、カリスはますます極まり悪い顔に
なる。

疲れたように溜息を吐くチャムは、すでに呆れ顔だ。

「言い訳も下手過ぎるんです。要は、
単純にいけないと言われているもの同士を混ぜてみたくなった、
そうでしょう？」

「だって、もしかしたら、新しい発見が……」

「聞き飽きましたからそれ」

「そんな怖い顔しなくてもいいじゃないのっ。うっっ」

「あゝあ、チャムが泣かした」

「私そんなに悪い事したの？ だってだって、このっ、この、私の手が勝手に動くんですもの！ ちょっと魔がさしたただけなのに、」

「チャムがこんなに怒るなんて私、私、どうしたらいいの〜〜〜」

「あーっ！」

「……………」

正直、こうなってしまったときの彼女は非常に面倒くさい。自分を落ち着けつつ、チャムは引き攣る笑顔をカリスに向ける。

「カリス、そんなに怒っていませんよ。あなたが心配だから言っているんです。」

「言葉が悪かったのなら謝りますから」

「うっっ、でも、チャムの、目が怖い〜〜〜！」

「怖くない怖くない」

「目が笑ってないもの、あーっ！」

「ほおら笑ってる笑ってる」

「いやホントに怖いよチャム。その仮面みたいなニヤつき」

「……………」

「……………」

彼らの間に、一瞬微妙な沈黙が降りた。

「まあまあ、落ち着きなさいカリス。泣かないで」

「わあーっ！ パーラン姉さん、チャムが私のこと苛めるの！」

「苛めてません」
「もうやめなよチャム」

パトがチャムを諫めた。これもまた慣れたものである。
カリスとチャムの言い合いも今に始まったことではない。
テーブルに伏せているカリスを、優しく宥めていたパーランは溜息を吐く。

どうしたものかしら、と、ぼつり呟いた。

「……姉さん？」

微妙な雰囲気の変化を察したのか、カリスがきょとんと顔を上げた。
た。

視線ががちりと合い、そのまま暫く時間が流れていく。
風が沈黙の中を通り過ぎて行った時、その少し重たげな口が開かれた。

「カリス、実は私今日はね、父様と母様に頼まれてここに来たの。
あなたの【婚約】について、伝えるために……」
「……！」

思いもかけない言葉に目を見開いていたのは、当のカリスだけであつた。

彼女の後方にいたパトとチャムに表情の変化はない。

「カリスももう十六でしょう、あと三年で成人。
父様も母様もあなたが心配なのよ。」

一刻も早く婚約者を見つけなさいと、伝えて欲しいって

「……でも、姉さん、まだ三年もあるじゃない……」

「あなただからよ、カリス。分かっているでしょう？」

「……………」

俯くカリスの反応がその言葉を肯定していた。
自分自身、誰よりも分かっている。

いつか立ち向かわなければならぬ日がくることも、きちんと分かっている。

ただ、早すぎる、そう思ったのだ。

「姉さん、私、自信がないの。婚約者なんて見つかるかどうか……。
あと一年、あとでも……………」

「だめめ。そんなに消極的だと見つかるものも見つからなくなるわよ。」

早すぎて困ることは何もないのだから頑張りなさい、ね？」

「……………」

やはり気が進まない様子の末妹を見詰め、パーランはそつと溜息を吐く。

両親だけではなく、姉妹にとってもカリスの婚約は心配の種だった。

なぜなら彼女は、“普通”ではないからだ。

カリスは生まれつき、なぜか体が大きかった。

異常に大きかった。

【妖精】の標準体格をはるかに越えて大きかったのだ。

？・告げられた憂鬱3

【花の一族】 であるカリスマリアは、両親の選んだ花の蕾の中で生命を与わり、

一年間その中で育てられて生まれた。

その時はまだ “普通” だった。

変化が現れたのは生まれて一ヶ月経った頃である。

それまでも異常な育ちの早さに異変を感じつつ、不安を誤魔化していた両親も、

さすがに自分たちと同じ体格になってしまった赤ん坊を普通に育ててはいけなさと悟ったらしい。

理由は分からなかった。

きっと突然変異か何かの一種だろうと考え、とにかく他の妖精に見つからないよう、

町から遠く離れた誰も足を踏み入れない森の奥へと赤ん坊を隠した。そこでこっそりと育てていったのである。

町を家族全員で離れるわけにはいかなかったので、順繰りに面倒を見た。

こんな異常な子が見つければ消滅はされなくとも笑いものになるに違いない、

もしくは気味悪がられて可哀相な境遇になるだろう、そう考えて取った方法であったが、

町との行き来も楽ではないため、家族は心身ともに疲れ果てていった。

そんな時、見かねた事情を知る両親の友人二人があることを提案する。

それぞれ自分たちの息子を一人ずつ、

【大地の契約】 によってカリスの世話役として付けよう、というのだ。

始めこそ承諾しなかったカリスの両親も、友人の熱意に負けそれを受け入れる。

その息子というのがパトとチャムだった。

妖精は皆、【大地の契約】 によって生きている。

その内最も重要なのが【婚約】 で、男女とも十九歳のその年に【婚約】 し、

神との契約を更新して成人しなければならない。

それが出来なかった者は契約切れで物言わぬ精霊になり、

世界のどこかへと散って行ってしまふ事になる。

逆に【婚約】 した男女はその愛によって精霊を生み出す力が与えられる。

精霊は生きる力。

自然界の生命そのもの。

それを生み出すところが【婚約】 の最大意義であり、妖精の生きている意味だ。

カリスの言った“あれ” とは、まさにこの事だった。

二人の愛が目に見える形で現れるその瞬間は、言葉に出来ないほど美しいと聞く。

町で暮らす妖精にとっては特別珍しいものでもないのだから、物心つく前から一人離れて暮らすカリスにしてみれば伝説にも等しかった。

カリスはいつの日か、自分の目でそれを見てみたいと心から思う。だから無理だと分かってはいても【婚約】 を完全に否定したくはないのだ。

精霊を生み出す瞬間を見れるチャンスは、きつと一度きり。

カリス自身が、それをする、一瞬である。

「……婚約は……それはいつかは……したい、けど」

「その気持ちがあるなら十分よ。まだ何を迷うことがあるの」

「だって……姉さん、わたし……」

いつまでも言葉を濁すカリスの消極さに、多少呆れた風に再度パ
ーランが息を吐き出した。

カリスは成長するにつれて美しい女性に育っていった。

それは見る者の目を奪うほどの美しさだった。

ただ、本人にその自覚がないのが厄介といえは厄介で、

異常な子としてのコンプレックスが邪魔をするのか、自身の良い面
には考えも及ばない、

周囲に迷惑をかけ得る筋金入りのマイナス思考者になってしまっ
ていた。

カリス自身、【婚約】の重要性は承知している。

だが、同時に拭えない懼れもある。

自分の存在が知られてしまったら一体どうなるのか。

拒絶されてしまったら？

そうして考え出すと泥沼だ。

なぜ自分は他の妖精と同じではないのか？ なぜ自分だけ？

本当は生まれてきてはいけなかったのではないか……。

悩む内に、このまま成人せず精霊になってしまおう方がいいという
考えに至ることも多々あった。

そうすれば誰も何も憂えることはなくなって、全て解決する、と
それを言つと周囲の者は必ず諫めた。

その度に、沢山の愛を貰ってここに在るということをカリスは認
識するが、

堂々巡りでいつまで経っても前向きになれないでいる。

カリスのコンプレックスは相当に深い。
だから両親も姉たちも、とても心配している。
カリスを失いたくないからこそその深遠な思いが、いつでも胸に潜
んでいる。

パーランは瞳を泳がせているカリスへ微笑みを向けた。

「本当に、あなたってば悪い方悪い方へと考えてしまうのねえ。仕
様のない妹なこと。

とりあえずやってみたらいいのよ。三年もあるからこそ少々失敗
したって怖くないでしょう。

さっきあなただって言っていたじゃない、 “何事もやってみな
ければ分からない” って」

「う……言った……」

後ろでパトとチャムが笑った。

パーランの綺麗な瞳がますます細まる。

「絶対に見つかるわよ。あなただけの王子様。がんばって！ 気楽
にね！」

「……分かったわ……」

やっと笑みを浮かべた妹を満足そうに見詰め、パーランは改めて
ハーブティを口にすると、
美味しい、と頬を緩ませた。

「父様も母様も、私がパーラン姉さんに一番弱いというのを知って
寄越したのね。

「はあ。姉さんの性格が羨ましい。どうやったらそうなれる？」

「おかしなことを言うのねえ。あなたはあなたでいいの。」

……カリスはこんなにも美しいんだから、自信さえ持てるようになれば

婚約なんてすぐに出来ちゃうわ。

きつとどの一族もあなたを奪い合うわね」

「な、何を言ってるの姉さんってば！　ありえないわっ」

「そう？」

体が大きikutあって愛し合う男女が触れ合うだけで精霊は生まれるのだし、

支障はないでしょう？」

「そうだけど……私なんて気味悪いだけだし……」

「もう、すぐそれ！　パトとチャムに聞いてもらんなさい。

私の言っていることはあり得ないかしら？」

向けられた視線の先の反応は同じ。

パトは笑顔でパーランの言葉に頷き、チャムは微かに首肯してみせる。

それを見届けたパーランは、ふわっと宙に浮き上がった。

「じゃあそろそろ行くわね。一月きしんじごとに私たちが確認に来て詳細を聞くから、

がんばって探してねカリス！　香水ありがとう！」

「えっ、ちょ、どっという意味!？」

気になる言葉を残し、パーランはすうっと空高く飛んで行った。あつと言つ間に見えなくなる。

空を見上げたまま暫く呆けていたカリスが、ゆっくりと視線を二人に向けた。

「ね、ねえ、今の、どう思う？　……詳細を聞くって、一月ごとに
つて……」

もし、失敗したら、それも全部話さなきゃいけないって、ことよね……………」

「……………まあ、そうですね」

「大丈夫だって。何とかなるよ！」

二通りの反応も耳に入らない様子で、カリスはその大きくて綺麗な瞳を潤ませていた。

「ああ、もうだめだわ！ 絶対怒られるわ！ パーラン姉さん以外、みんな厳しいんだもの！ いや〜〜〜っ！」

「……………」

前向きさとはどこまでも無縁の主人に、やはり最後は溜息を吐かざるを得ない二人であった。

？・作戦会議

「えーマイクテスマイクテス……おほん。えーお集まりの皆さま、
“第一回わたくしカリスミリア婚約しまあす！を囲む会”に
ご参加頂きまして誠に有難うございます。ぺこり」

「……………」
「はいっ！」

「はい。カリスさん、発言を」

「えーと、囲む会、で本当にいいのかしらね？」

「……………」

「それに関しましてはあまり深く追求されませんように、とのこと
ですので、申し訳ありませんが却下させて頂きます。他に質問がな
ければ本題に」

「……………」

「はいっ！」

「はい。カリスさん、発言を」

「えーと」

「おい」

「え？ あ、そうよね、きちんと立ってから発言するのが礼儀
よね。ごめんなさい」

「違う！ いいから座って下さいカリス。何やってるんですかさっ
きから……訳の分からない……どうでもいい、くだらない、時間の
無駄っ」

「チャム……。まったく、つまらない男だよぉ！」

「黙れパト」

「目が怖いなあ。冗談じゃないか」

「そーよそーよ！ 暴力反対っ！」

「どこが暴力」

「言葉の暴力っ」

「……ある意味そっちの方がそうだけど。 じゃなくて！ ああもう、うるさいっ！！」

ばんつ、とテーブルを叩いて立ち上がったチャムは、ぎろりと二人の“某囲む会参加者”を睨みつけた。

その視線だけで射殺せるのではないかというほど恐ろしい表情を向けられた二人は瞬時に閉口する。

「囲む会でも懇談会でも大作戦でもなんでもいい……とにかく議題に入ってくれ、頼むから」

息の詰まるような沈黙が降りた。

いつもは我先に場の雰囲気と和ませようとするパトであるのに、この時ばかりは口を閉じたままだった。

流石に、少し厳しく言い過ぎてしまったかとチャムは思い、弁解しようと顔を上げると。

「チャム……」

じつと視線を合わせていたらしいカリスが呟いた。
透き通る瞳にちくりと良心が痛む。

「……少し、僕も言い過ぎ」

「大・作・戦！ それいい！！」

固まったチャムを余所にパトとカリスがわいわいと盛り上がる。
チャムはもうそれ以上何も言うまいと決意し、口を固く閉ざしたのだった。

案の定、第一回会議は名前の決定のみで時が過ぎ、本題は第二回

以降へと持ち越されることとなる。

昼食後、カリスが部屋で休んでいる時間。

当番の家事を済ませたパトが庭に出ると、木陰に座るチャムが瞳に映る。

目を閉じているが眠っているのだろうか？

チャムは水の一族らしく、髪は陽に当たっても深い海の色のままである。

影にいる時よりはもっと青色に近くなるが、じっと見ているとまるで深海にいるような気分になる。

今は閉じられているが彼の眼も同じ色をしており、その深く深く吸い込まれそうな海色で睨まれた日には夢の中までうなされそうだななどとパトは思った。

「なんだパト。顔が近い。人の顔見過ぎ」

いつの間にか目覚めていたチャムと視線が合う。

「あれ、起きてたの」

「気配に起こされたんだ」

ふいと視線を逸らしてチャムが言った。

パトもその隣に座り込むとほっと息を落とす。

「今日は機嫌悪いね。何かあった？」

「気のせいだ」

「そうかなあ。でも作戦会議の時ピリピリしてた」

「あれはおまえがうだうだやるからだろ……結局なにも進んでない」

逸らした瞳はまた閉じられているようだ。

パトは眼を細めて日向を見詰めた。

そうして少しだけ黙っていたあと、咳くように言葉を零し始める。

「……カリスがね、なんかとても不安そうなんだ。一日何回も溜息吐いてること、チャムも気付いてるよね……きっとカリスなりに前向きになるうとしてるんだよ。だから笑ってるけど、本当は他の妖精と顔を合わせるのがすごく怖いんじゃないかな……。だからさ、おれ、少しでも笑って気持ちを軽くしてあげたいって思うんだよね

……」

「……」

パトの咳きは風のように心地よく、ふわりと耳を掠めていく。

ゆっくり瞳を開けたチャムは、黙ってそれを聞いていた。

続く言葉はまだ紡がれない。

静かな時が過ぎた。

(そういう奴だったな、パトは)

ふと、そんな思いが胸を過る。

根っからの楽観主義であるパトは一見何も考えていないようにみえる。

だが変化には誰よりも敏感という一面があった。

チャムも今のカリスの不安に気付いていないわけではない。

むしろ手に取るように戸惑いが伝わってくる。

(でも僕はパトとは違う)

きつと、だからこそ、パトはこうして伝えに来たのだ。

どうしたらいいのか分かっているけど、素直に出来ない自分に。

振り返るとパトが草の上に寝転がって眠っていた。
懼れなど少しも知らないかのような無垢な寝顔をしていた。

「……分かってる。それが僕たちの役目ってこと……」
「……うにゃあ……ん……」

寢言にも似つかない呟きを発し、パトが少しだけ身を擦る。

チャムは何となく吐息して、改めて背後の木に背を預けると瞼を閉じた。

* * *

夕食後、綺麗にしたテーブルを囲んで三人だけの会議が再開された。

正式名称を “ 第二回カリスミア婚約しちゃうぞ！ 大作戦 ”
と言う。

一応、これが午前中の激論の実りである。

「とりあえず背景を整理すると、カリスが三年後、つまり十九歳になるまでに婚約者を見つけることが目的。そのために今しなきゃいけないのは、まず、どうやったら成人前の妖精の男と出会えるかってことだね」

進めるのはパト。残りの二人は同時に頷き考え込む。
先に口を開いたのはチャムだった。

族がいいーとか、いろいろ」

「うーん」

今度は完全に顔を赤くしたカリスが、眉間に皺を寄せて真剣に考え出した。

チャムとパトの二人はじつと言葉を待つ。

待つて待つて、三分が経過した時。

「わ、私ね、私……」

漸く考えが浮かんだのか声を発したカリスの発言に身を乗り出していた。

「私、なんだか、そういうのよく分からないから、その、チャムとパトが連れて来てくれる人なら誰でもいいな、って……あ……そう
いうのは、駄目、かしら？」

駄目か、と聞かれて二人は顔を見合わせる。

三分も考えてそれ、とは思っても口にはしない。

二人の答えは勿論一つ。

「了解！ 条件の良さそうな男やっを連れてくるよ！ ね、チャム？」

「……ああ、うん」

相変わらずチャムはぶっきらぼうに返答をする。

それでも気持ちはカリスに伝わったらしい。

彼女もこくりと頷いた。

「ありがとう」

必死に前向きさを保つ努力をしている所為か、浮かべた笑顔はどこか泣き顔に近い。

ここに宇宙に浮くパトの横で、チャムは何となく吐息していた。長くも短くもない第二回会議は、こうして無事終了する。

?・見合い1

森の中を、高い透明度の川が一本穏やかに流れている。

山からの雪解け水を流しており、水は一年中ひんやりとして気持ち良い。

カリスの家からそれ程遠くない場所を流れているため、彼女たちの飲用水としても利用されていた。

陽帝サンと月王キングの光の下では、精霊を肉眼で見ることが出来る。

この川には多くの精霊が棲んでいることを、カリスたちはよく知っていた。

川がとてもきれいであることを証明してもいる。

「へえ、こんな場所があったなんて知らなかったなあ。

何だか【フェアリーランド】よりも自然が美しい気がするよ。

そうは思わないかい、カリスミア？」

白い歯を零して微笑む一人の妖精は、言いながらふわりと後ろを振り返った。

そして、呼んだ名の主を瞳に映して、固まる。

「ああ、あ、あああ、わ、わたし、が、かかカリス、ミア、ですっ！

きゃっ！ 恥ずかしい！」

「あの、そ、そんなにじつと見詰めで下さい……
どうしたらいいかわからないので……いやー見ないでー！」

ぼとん、と、何かが草の上に落ちる音がした。
カリスは顔を覆っていた両手をそつと開き、下を見る。
すると微笑んだ表情のまま倒れている妖精の姿が一つ。

「きゃあああ！ どうされたんですかっ！？ あなた！？ もし
もし！？ だれかああ！！」

* * *

森を流れるその川も、カリスたちの事をよく知っていた。
精霊には言葉はない。しかし、少しの感情は持ち合わせている。
川に棲む水の精霊たちは皆、カリスのことが大好きだった。
彼女の姿を見止めると必ず、彼ら独特の音を奏で、カリスを讃え
る歌を歌う。

それは小川のせせらぎにも似た、聞く者を癒すメロディーだ。

「ここは本当に気持ちのいい所だね！ この川が歌ってる。ちよつ
と町から遠いけど、たまに来るならすぐくいい場所かも。でも何で
こんな森に住んでるの？ 人間世界と近い、こんな危険な場所……
何か理由があるの、カリスミア？」

男らしさを醸し出す褐色の肌のその妖精は、同じ色をした端正な
顔を背後へ向けた。

が、何者の姿もない。

「あれ？ カリスミア？」

言いつつふわりと移動し見合い相手の姿を捜すが見当たらない。
首を傾げている所へ、近くの木の間からひよこつと何かが現れる。

「もしかして、君が」

「はい。私がカリスミリアです。どうぞよろしく」

ぺこり、と軽快な動作で頭を下げたのは、どう見ても

「人形、なんて持って何してるの？ それも等身大って」

「ええ！？ 人形とはなんのことでしょうか！？ 私がカリスミリアです！ あなたと同じ大きさの、普通の女の子です！」

「えーいやいやいやどう見ても人形でしょそれ。君面白いねー。出ておいでよ、顔が見たいな」

「……」 あ、あの、恥ずかしくて、私……」

「何言ってるの。君はすごく美人だって聞いたから、楽しみにして来たんだよ」

「ええーそんな、美人だなんてそんなふうふっ」

笑い声と同時に人形が小刻みに震えた。

そのはずみでぼとり、とひんやりした草の上に人形が落ちる。

「あっカリスミリア8号っ」

慌てて拾おうとして腕を伸ばした時、褐色の妖精と目が合った。
体半分が晒されてしまったのだ。

「」

「……あ、あー、そのー、うーんと」

悩んだ拳句、カリスは拾い上げた人形を素早く指に嵌めて前に突き出し、言った。

「はあい、私が噂のカリスミアでえす” なんって”

ぼとり、とその褐色も、静かに草の中へと沈んで行った。

* * *

精霊に愛される者は、慈愛に満ちた、優しい心の持ち主だと言われる。

自然を愛し、その恵みに感謝する姿は精霊たちを歓喜させるのだからそうだ。

カリスも川辺を訪れるたび、必ず川に向かって話しかける。

今日もきれいな、心地良い水の音ね、ここへ来ると癒されるのよ
ありがとう、おまえたちが大好きよ……
ゴッド……

そうして精霊たちは次から次へと帝王の光の下に姿を現す。

カリスミアが来た、と歓喜する。

彼女は【花の一族】である。

そんな精霊たちの愛のこもった水で育ってきたカリスだから、美しく育つのも当然なのかもしれない。

ここに棲む精霊たちにとってみれば、カリスは他の妖精と変わらない、更にその上をいく素晴らしい存在だった。

完璧な、一人の妖精なのである。

そう、ただ、その悲観的思考を除いては……。

「ほら、泣かないで。精霊たちも心配してるよ。大丈夫だから、ね、カリス？」

「うわぁーん！ だっだって……うわぁぁーん！ みんな逃げていくもの！ 私がこんなサイズだから怖くって気絶しちゃうもの！ うつつつパトおくくチャムうくく見たでしょう？ 見たでしょう？ 一人残らず気絶するのよぉお！ カリスもう生きていけなぁぁい！！ あぁぁーんっ！！」

小川のほとりで伏せって泣き叫ぶ姿に、パトもチャムも暫し言葉を失くす。

相当ショックだったのだろう、何せ、生まれてこのかた一度も【フェアリーランド】の妖精と接したことがなかったのだから。

ひっそり暮らす内にカリスの不安は募り、身体が他の妖精と違うことでこの先どうなるのかと怯えて生きてきたのも事実だ。

しかし、婚約者を探すため他の妖精と会うことに対して、カリスが前向きになろうとする心を持てたのは何も知らないからこそだ。経験がないからこそ、ほんの少しの希望だとしてもそれを持ち得た。

だが、現実には残酷である。

身体が人間と同じ大きさというのは妖精にとって恐怖の対象にしかない。

それをカリスは今、痛感している。

心の状態に敏感な精霊たちの不安定さが、傷心の度合いを如実に現してもいた。

カリスが泣いている間、パトもチャムも精霊たちまでも、ただ黙して側にいた。

そうしてしゃくりあげる声も聞こえなくなった頃、突如静かに身体を起こしたカリスは、そのきれいな白い手で川の水を掬って一口飲み、おいしい、と呟いた。

「カリス」

様子を見守っていたチャムが名を呼んだ。

カリスは腫らした目を移動させ、いつもと変わらない無表情を捉える。

「……僕たちは知ってますから。カリスのこと、ちゃんと」

真剣に、そう言われ、カリスは少し面食らった。

チャムには似合わないセリフだと思いつつも、胸が温かくなる。パトがふわりと宙を飛んで、カリスの肩に降り立った。

「フェアリーランドは広いから、色んな妖精やっぴがいるよ。まだ始まったばかりだし、もっと効果的な作戦も考えようね」

「……うん」

カリスは笑った。

瞬間、ざわつと水の精霊が沸き立つ。

いつの間にか現れていた月王キングの、その皓々とした姿が水面に映り、月光の中を飛び交う精霊を煌かせている。

パトが又ふわりと宙を飛び、引き連れた微風でカリスの長い髪を揺らした。

「二人とも……ありがとう」

交互に視線をやり、口端を上げて見せるカリスはその時、あれほど痛んだ心が、今は確かに軽くなっていることに気付く。

二人の言葉はいつまでもカリスの胸に響いていた。

？・見合い2

「で、なんでおれが、こんなかつこで、こんなふうに、こうしてなきやいけないの？」

眉をきゅつと中央に寄せ、口を尖らせるさまも中々に可愛い。
身体つきもふんわりした衣装で上手く誤魔化せている。

「すごいわパト！ もう全く男の子だなんて分からない」

「とてつもなく似合ってるぞ」

「……カリスはともかくその水妖精くん、わっるい顔してるね。
君はこんな風に楽しみを見つけるの、へー、ふーん、そう」

「事実だからしょうがない」

「チャムも試してみたら？ おれが可愛くしてあげるから。んでよ
り可愛い方を採用ってどう？」

「絶対やらない」

「不公平！」

「カリスのためだ。喜んで犠牲になれ、パト」

「犠牲って……その顔だよチャム。なんでかな、心が痛むんだよね。
むしろおれもそのつもりでいるのにチャムに言われるとテンション
下がるのなんでかな」

「それは病気だきつと」

「チャムさあ、そんなことばっかり言っているとどんどん精霊に近付
くって聞いたことない？ ほらなんかこのへんとかすでに精霊化始
まってる」

「顔がどうした」

「無表情、仏頂面、仮面顔、ぜんっぜんかわいくない」

「そりゃどうも。可愛くなくて結構。だからやっぱりお前が一番相
応しいんだよこれに」

ひらひらふわふわしたドレスのような衣装の端を軽くつまみ、故意だろう、仮面顔を瞬時に貼り付ける。

耐え切れず立ち上がってチャムに一矢報いようとしたパトだが、それはすぐに一つの声に静止された。

「もう止めて二人ともっ」

ぴたつと動きを止めた二人は、その潤んだ声に嫌な予感を感じる。カリスを振り返ると、案の定。

「……私のせいね？ そうなのね？ これを言い出したのは私だものね、私の身代わりになってお見合いして、徐々に真実を告げられていこうとんでもなくつまらない提案したのは私だものね。ああやっぱりこんなことパトにお願いするなんて間違ってたんだわっ。こんなにもパトが嫌がるなら行くべきではなかったのよーっ！ わああーっ！ ごめんなさあーっ！ 私ツ身体だけじゃなくて何もかもが無駄に思えてきたわ！ カリスツ、もう生きていけなああーっ！ うわーっ！」

完璧にいつものマイナスの谷へ落ちてしまっている。

パトは、川辺の少し湿った草の上に伏し更にその地を潤わせるカリスの姿を映しながら軽々しく本音を口にした自分を呪った。

チャムを背後に、慌てて側に飛んで行く。

「カリス、泣かないで。ごめん。おれたちが悪かったよ。カリスのせいなんかじゃないよ。どっちかって言うとな装するのが嫌なわけじゃなくて、チャムが意地悪いから怒ってたんであって、だからカリスはちつとも悪くないし、何もかもが無駄だとか、そんなに自分を責めないで、ね？ ごめんよカリス〜」

必死に慰めるパトの思いが伝わったのか、喚く事を止めたカリスのいつもよりは早めの落ち着きに、パトはほっと息を吐く。

と同時に、低く声を落としたチャムの咳きが耳に入る。

「まあでも、この案を正しく認識してくれたことは大きな進歩で

」
「チャムう！！」

ピツ、と鋭い風がチャムの側を掠めて行つた。

右手の人差し指に薄く血が滲む。

それを目にしたチャムの耳元を、今度は攻撃性のない、しかし不自然な風が通り過ぎた。

『カリスに聞こえなかったから良かったけど！　こんな時にそんなこと、冗談でも言ったら許さないから！　バカチャム！』

前方には、こちらを見ながら眉をぎゅっと顰めて舌を出すパトの姿があつた。

女装のせいかいつもよりも迫力に欠けたが、チャムから降参の科白を引き出すのにはより効果的だったようだ。

「悪かつた」

その咳きを耳にして、パトもやっと顔の緊張を解く。

気付けばカリスも完全に落ち着き、二人はなんとか事なきを得た。

それから暫く、三人は川辺でぼーっと時間を過ごした。

陽帝の位置から察するにお昼少し手前の時間になつた時だ。

突然、はっとカリスが顔を上げた。

それに合わせて二人も側に寄る。

「パト、チャム、大変よ！！ 約束の時間がすぐ目の前だわ！！
こんなことしてる場合じゃなかった！！」

酷く驚いた様子で叫ぶカリスに、まず反応を見せたのはパトである。

「わぁー、ようやく気付いてくれたー。 うん、それじゃあ準備しようカリス。 おれはオツケーだよ、一応」

一応、という言葉の後に隠された本音は、今現在こうなっている原因へと回帰する。

パトの心の準備は実質半分ほどの出来だった。

「そうね、えーとっ、私は、えーとっ」

「落ち着いて下さい。 カリスは僕と一緒に隠れて様子を見ましょう。もうすぐ相手の方が来ますから」

「そうね、うん、隠れなきゃね、じゃあ」

笑顔で手を振るカリスに、頑張って笑顔で答えたパトも片手を挙げる。

そうして同じように振ろうとした手が、次の瞬間凍りついた。

今正に身を潜めようとしていたカリスの目の前に、一人の見知らぬ妖精が現れたのだ。

「あ

「あ

それだけの呟きを残し、沈黙がその場を支配した。

「……………ええーと、見合い相手の方、ですよね？」

何とも形容のし難い微妙な表情で尋ねたチャムの、その愚問とも取れる問いに返ったのは、ひんやりとした草の上に倒れ込む聞き慣れた無情な音だけであった。

？・嵐の夜に1

その日は朝から雨が降っていた。久しぶりの大降りだった。生い茂る木々にぶつかる雨音は激しく賑やかで、目を閉じて耳を澄ますと中々に心地良い。

カリスは雨の日が好きである。

色々な面で晴れの日より不便ではあるが、その瑞々しく規則的な雨音やひたすら地に降り注ぐさまを見ていると何となく落ち着くのだ。

冬の寒さの中で余計に暖かさを感じるように、雨降りにはカリスに多くの温もりを感じさせた。

「……雨の音は気持ちいいわね。音楽みたい」

昼間でも少し肌寒く、辺りは薄暗い。

風もまた強くなったようだ。

この調子だと今夜は嵐になるのかもしれない。

じっと目を閉じていたカリスの脳裏に、ふと何者かの笑顔が掠めた。

見覚えの無い、それはまだあどけない少年の顔。

「ふふ。あなたはそんなに若くないでしょアレクサンドレ。誰の記憶？」

問い掛けたカリスに答えるかのように、大きく張った枝が軋んだ。薄く目を開け、寄り掛かっていた木の根元から体を起こし、カリスは青々とした枝葉を見上げた。

「雫が落ちてくるわ、もう、アレクさんてば」

森の中でもどうやら最古の樹のようである “アレクサンドレ”
の根元は、どんな大降りでも濡れる心配なく座っていられる。
雨の日にこうして過ごすのはカリスの楽しみの一つであった。
家からは少し離れていて半時強ほど歩かなければならないが、厭
わしく感じないのもこのアレクサンドレに会いたいからこそである。

「はあ。アレクさんの言葉が分かったらいいのになあ。私がもしも
【木の一族】 に生まれていたら、誰かの 【守護者】 でも何
でもいいからすぐに契約してる。そうして一族の能力を与えて貰っ
て、アレクさんと好きなだけ会話するのよ。 ……はあ、本当にそ
うだったら、どんなに良かったか……」

もしかしたら、身体もこんなに大きくならなかったかもしれない
のに、と連想してしまい、やはり心は重く沈んで行った。

見合いを始めてまだ一月ひしきにも満たない今現在、見合いの数は相手
妖精の気絶の数にも相当していた。

つまりは惨敗なのである。
こんな最悪の状況下で、落ち込むと言われて大人しく落ち込ま
ないでいられるカリスではない。

「……アレクサンドレ。私は カリスミアはこの世界に生まれ
てこなければ良かったのよ。生きていても何の価値もない、無駄な
妖精でしかないんだわ。私を見て気絶するって……思い出すのも嫌」

それから暫くアレクサンドレを相手に愚痴を零していたカリスだ
ったが、今日の天気は頗すばる悪いと判断し、早めに帰ることを決めた。

「……本当に嵐になりそう。アレクさんも気をつけてね。この風に

飛ばされないようにね。じゃあ私も、パトとチャムが心配してるだろっからもう行くわ」

いつの間にかびゅうびゅうと勢いを増した風雨の中を、大きな植物の葉を重ねて作った傘を差してゆつくり歩き出す。

時々突風が身体を揺らし、その度にカリスは傘をきつく握った。

「嵐……じゃなくて台風かもしれない……あ、一緒か。とにかく早く帰らなくちゃ、チャムが怖い顔で怒るぞ、っと」

取るに足らないことを呟きながら少し早足になって帰り道を急ぐ。足元しか見えない今の調子では一時間はかかるかもしれない。

それでもカリスは気楽な気持ちで歩みを進めていた。

どれくらい時間が経っただろう、いきなり強烈な突風がカリスを襲い、葉っぱ仕様の傘が吹き飛ばされた。

咄嗟に悲鳴を上げて立ち止まり、それまで俯いていて見ていなかった周囲を目にし、カリスは呆然とする。

「ハッ……ハッどっおッ!？」

ツイていない時はとことんツイていない。

風雨に晒され迷子になった彼女は今現在、結構な危機ピンチを迎えていた。

* * *

夕方の時間帯だが夜のようになつた外を見詰める。
降りの傾斜は酷くなる一方で、食事の準備をしていたチャムは一
言、台風だな、と呟いた。

「大きいね。この家もつかないかな？
んっ、まむももおうえほお
ひい」

「つまみ食いは死刑」
「酷くない！？ あたっ」

抗議しつつも更に伸ばした手を素早くはたかれパトが口を尖らせ
る。

今日の晩御飯は小魚のフライ、カリスも大好きなメニューだ。
何気に包丁が向けられ、パトは慌てて謝っておいた。

「この家が心配なら、パト、おまえが風を何とかしてこい。台風は
風が問題なんだ」

「えー。チャムでも何とかなるじゃん。何でいつつもちょっと大変
そうなの、誰もやりたくないようなのはおれに言うかな？」

つい先日の女装事件をまだ気にしているらしい。

確かにチャムもあれを嫌だと思ったのは事実だが、それとこれと
は話が別だ。

カリスサイズの厨房で、妖精には大き過ぎる道具を、水を操って
器用に操作するチャムを観察しながら、パトはそういえば、と話題
を換えた。

「カリスまだ帰ってこないね。大丈夫かなあ。アレクサンドレに会
いに行っただんでしょ？」

「あの傘だけで安全だとは考えにくいけど、どうかな。早めに帰って来てくれていれば、今ならまだ何とか、大丈夫、夫……」

二人は嫌な予感に襲われ、同時に口を閉ざしていた。カリスに限って大丈夫ということがあり得るのか？

「……チャム、おれ心配になってきた……傘なんて吹き飛ばされるかも……葉っぱだし……それで何では分からないけど、いつの間にか迷子とかになってないかな……」

「……奇遇だな。全く同じ事を考えてた」

びゅうびゅうと唸り始めた雨風の音を聞きながら、チャムは鍋を端に寄せて火を消した。

準備は半分しか整っていなかったが出来上がったものにだけ蓋をしてパトを振り返る。

「一緒に行こう。二人の方が早い」

「だね。雨じゃ二オイも分からないし」

言葉少なに二人は早速外へ飛び出した。

？・嵐の夜に2

雨の日以外なら、パトは風に乗る二オイを頼りに居場所を特定することが出来る。

水の中では二オイが分からないため、雨天だからと言ってチャムにそれは出来なかった。

二人はそれぞれ風と水を操り風雨を避けつつ、森の中心辺りに在るアレクサンドレの所へ行ってみる。

その道中もしっかり目を凝らしてカリスを探したが見当たらない。嫌な予感は的中したようである。

「どうしようチャム……やっぱり迷子になったんだよ。一体どっちに行ったのかな？　あまり中心を外れると……」

「そうだな。人間世界へ行ってしまうのは望ましくない。……パト、僕の勘に、賭けてみる気はあるか？」

すでに何かしら能力を始動させているらしいチャムの問いが、必ずしも答えを必要としていないことをパトは熟知している。

チャムは勘に頼り切った発言をしない。

「海だ。海岸の方に向かってる」

確信に満ちた声でチャムが言った。

彼が一体どんな能力を使ったのかは知る所ではないが、自分が風の中でなら自由自在でいられるのと同じことだろうとパトは理解しておく。

「南だね？　カリスきつとパニックでわけ分かんなくなってるんだ

「よ」

「とにかく急ごう。言い訳はその後、本人の口から聞けばいい」

出せる限りの速度で直進する二人は出来るだけ低空飛行を行う。

木々を避けるため相当の集中力を要したが、カリスへの念が普段の何倍もの集中力を引き出しているらしい。

妖精の肉眼でも捉えられない速さだった。

「怒っちゃだめだよチャム？ カリスも悪気はないんだ。無事だったらそれでいいんだから」

「何の話だ。どこからそういう発言になる？」

「前科と先入観。と、さっきのチャムの発言」

「それは完全に僻見へきけんというやつだな」

「だって、違うの？」

「違うないけど」

「チャムって頑固モノ。そんなんだとね、つるつと禿はげちゃうよ？」

「……………」

妙な沈黙で会話が途切れた。

その時、タイミング良く二人の視界が開ける。

断崖絶壁。

そしてその先は海。

「大荒れ……………まさかカリス、海に向かってないとは思っけど」

今度は少し上空に上がり海岸全体を見下ろす。

そうして視線を移動させていた二人の視界に何者かの姿が映った。

「チャム！ いた！ あそこ！ 海に向かってるーっ！」

「何を考えて　！」
「あ、待って！」

二人一気に下降して風雨の中を歩くカリスへ接近した。近付いてみてもう一つ、別の影があることに気付く。森への入り口で力尽きたように倒れ付す、それは人間だった。カリスはそこへ向かっていた。

「カリスっ！　探したよ！」

「え　あ　パト、と、チャムも　」

「おれの側を離れないで。台風だって分かっている？　飛ばされちゃうよ」

「でも　あそこに、何かが　呼んでるの、私を　」

「　人間だ。きつとこの荒れで遭難したんだろう」

「人間　助けなきや。あのままだったら、死んでしまうわ」

それは至極当然と言ったようにカリスの口を突いて出た。

しかしそれは妖精なら絶対にありえない、禁忌の発言。

今はパトのコントロールする風の中心にいて風雨の影響を受けていないカリスだったが、その表情は嵐の中に置かれている時と変わらないほど切迫したものだ。　

ひとときもあの人影から瞳を逸らさない。

「助けなきや　早く　あのヒトを」

「　カリス」

少し、諫めるようなトーンで言ったのはチャムだった。

「お願い。行かせて」

「カリス　」

「チャム!!」

大きく見開かれた目がチャムを真直ぐ見詰めていた。
責めるように、今にも切り裂かんばかりに、睨みつけられていた。
チャムもまたその眼差しから逃げない。
どうあっても阻止するべき十分な理由がチャムにはある。

「人間は恐ろしい生き物です。あなたが思っているほど単純ではない。残忍で、狡猾で、卑劣。我々フェアリーランドの妖精とは違わんです」

「違っつて……そんなの、私だって何もかもが違っじゃない。違ったらだめ？　じゃあチャムは私のこともそうやって見るの!？」

「カリス、論点がずれてますよ。僕が言っているのは種族という視点から見た違いです。あなたはれっきとした妖精だ。人間ではない人間と妖精は違う。あなたもそれくらいは分かるでしょう」

「そんなの分からない!!」

全てを拒否してカリスは言い返した。

何も分かりたくない子どものがままのようにも聞こえた。

しかしそれはいつものカリスではあり得ないことだ。

ここまで頑なになれるほどの意思の強さはないはずだった。

いったい何がそうさせるのか。

それこそチャムには分からない。

「……気持ちに察します。けれど、これもあの人間の運命です。どうあっても僕たちが関わるべきではない」

「……私は　私たちは、全能の帝王^{ヘクシ}じゃないわ。出来ることがあるのに運命だと決め付けるなんてあまりに傲慢よ」

「カリスは人間を知らなすぎる。では訊きますが、あの人間が助かったあと、あなたに刃を向けないとどうして分かります？　あの

人間が助かったあと、他の人間を連れてこの森、もしくはフェアリーランドを襲わないとどうして保障できますか？ 人間と関わるべきでないと言い伝えられるのは我々先祖が経験してきた戒めだからです。妖精全体を恐怖に陥れる行為を僕は許しません。あなたに仕え、護る者として」

断固とした物言いにカリスはとうとう押し黙る。

チャムの言葉のどこにも破綻を見つけられなかった。

それ以上のもっともな意見などあるとは思えない。

このとんでもなく伶俐な妖精を説き伏せる術を、自分のどこにも持ち合わせていないことも痛いほどに承知している。

それでも、なぜか、カリスは探し続けているのだ。

どうしたらあの人間を助けられるのか、その術を。

(あの人間を助けなくちゃ)

あの人間を。

人間を、自分は。

「……可能性に、賭けてみたいの。人間がどういう生き物なのか、この目で確かめたい。私たちと同じ空の下で生きる人間が、本当にそんなに恐ろしいなんて、私にはとても、思えない……！」

突然、カリスが嵐の中へ飛び出した。

すぐさま強風に煽あおられ砂の上に転がる。

「カリスっ！！」

叫んだのはパトだった。

「止めないでっ！」

間髪入れずカリスが言った。

「私は助けるの　二人には迷惑かけないから、フェアリーランドのことも絶対に言わない　家にも帰らない！　だから安心して
！」

また身体を起こし、今度は這うようにして人間のいる場所を目指す。

雨と砂とでどろどろになった主人の姿を瞳にし、それまで意見を挟まないでいたパトがチャムを振り返った。

真剣さ極った時のパトは、とても冷やかな表情になる。

「おれ、チャムの言ってることは正しいと思う。カリスをとにかく危険から遠ざけるのはいちばん正しい選択だとも思う。けど、あんなカリスの姿見たらじつとなんてしてられない。カリスの様子は確かにおかしい。でもそれは後できつと分かる。おれたちは仕える者として、護る者として、少なくとも今回はカリスを信じるべきだ」

風のように涼やかな瞳がじつとチャムを見据えた。

こうなった時のパトがチャムにも為す術がないほど頑固なことを、チャムは誰よりもよく知っていた。

邪気のない視線から逃れるように、相変わらずの無表情がそつぽを向く。

「とりあえずカリスの身の安全が先決だ。あの人間は僕が運ぶ。カリスの言い訳も、人間のことも、落ち着いてからじっくり、根こそぎ洗いざらい訊き出すからな　」

言い終わらない内に人間目指して飛んだチャムの後姿を見送り、
パトは笑顔になってカリスの保護に向かう。

本当に不器用なんだよなあ、という呟きは、勿論チャムには届か
なかった。

？・危険な二オイ1

目覚めた時、僕は何も覚えていなかった。

見慣れない天井、見慣れない家具、見慣れない外の景色。

何もかもが違った。僕はこれらを全く知らない。

(違う？ ……何と比べて？)

考えようとすると酷く頭が痛んだ。

まるでその行為自体を拒絶するかのようになり、激しい吐き気を伴って。

僕はどうしてここにいるのか、いつからこうしているのか、全てが闇の中である。

手がかりになるものが一つもない。あるいはここはもう地上の世界ではないのかもしれない。

僕は、死んだ？

死んだら人はみな記憶を取り上げられる事にでもなっているのだろうか。

もしも……もしも本当にそうであるなら……

ここはきつと、天国に違いない。

自然と共にある、平和な。

* * *

その時、君は無言だった。

僕には何が起こったのかわからなかった。

失えない。

受け入れられない。

他に何もいらぬ。

だから。

「ごめんなさい」

引き込まれる。

荒れ狂う波飛沫に。

轟音がそれら全てを。

漆黒の、永遠の中へ。

*
*
*

「正直なところ、死んでいてくれればいい、と思った」

さらりと、何も臆するところなくチャムが言った。

「……ほんつとケイベツしようかな、おれ。チャムこそじつは妖精じゃないんじゃないの。サイズが違うだけでさ」

呆れた表情でパトが返す。

幸いなことに、正直過ぎるこの男の言葉に過剰反応ぎみのカリスは今、ここにはいない。

だからというわけではないが、パトも一応同意を示した。

「あの荒波で生きてることの方が奇跡だからね。おれだって、すでに死んでるっていう可能性は考えたよ。でもあの人間かなり生命力がある。与えられた運命つてやつが大きいのかも？」

「さあどうだろうな。僕には興味のない話だ。恢復したらさっさと出て行って欲しい。一つたりとも痕跡を残さずきれいさっぱり跡形なく」

朝食後の少しまったりした時間。

カリスお手製の苦い飲み物を二人向かい合って啜る。

その穏やかな雰囲気には似合わない話題を持ち出してきたのは、いつにも増して無表情のチャムだった。

無も極れば有となる。

その道理は真実だ、とパトは確信せざるを得ない。

今日のチャムの表情は、何かへの怒りが存分にそこへ表れていた。

「チャムさあ、この頃なにかと機嫌悪いよね？ 何かあったの？」

「別に」

「ほら、すぐそうやって目逸らすの嘔吐してる証拠。訊いたって答

えてくれないことは分かってるけど、溜め込むと身体によくないよ」「溜め込んでない。そんな暇ない。時間の無駄」「はいはい。分かりましたよ。もうおれは何も言いませんー」

パトは残りを一気に飲み干すと、お先つ、とチャムに笑みを向け席を立った。

まだ半分以上カップを満たす黒い液体を、チャムは何となく見やり、黙す。

(分かっている)

パトに言われなくとも、焦燥に満ちた不安定な心の状態なら。原因は二つ。

人間という最悪の厄介者がこの家に居座っていること。そのせいでカリスを危険に晒してしまっていること。

(人間なんて……ただでさえカリスの)

イライラ揺れ始める感情にきつく眉を顰めた。
どんな時も冷静でいられるはずの自分に似つかわしくない
き
つとこれは軽視してはならない危険レベル。

(なんとかしなければ)

(人間とカリスを、近付けてはいけない)

なぜなら、チャムは知っているのだ。

この目ではつきりと目撃した。

人間のどす黒い感情というやつを。

どうしようもなく愚かで悲しい人間の末路を。

(カリスだけは絶対に)

カップに添えられていた両手に力が込められる。
窓からは柔らかい陽光が差し込み、チャムの深海のような青を反
射させていた。

* * *

怪我と発熱で五日間眠っていた男が目を覚ました。
重たげに持ち上げられた脛から覗く瞳はカリスと同じ薄いブラウ
ン。

男は視点が定まらず暫く宙に瞳を彷徨わせていたが、ふと、目の
端に何か揺れ、少しだけ頭を動かした。

赤い、何かが、ひらひらと風に揺れているのだ。

強烈に飛び込んできたその色彩に目を凝らす。

長いリボン。

と、亜麻色の、ゆるくカールした、長い髪の毛。

「オ……」

眩きが零れた次の瞬間、人影が振り向く。

驚いたような大きな瞳と、男の細められた目とがかちり、合う。

「 お、おお、おおお、お」

「 ……才……?」

「 おお、起きた……っ！ あ、あ、ああああ、ああ」

「 ……ア……?」

「 ああ、あ、あなたは……っ！」

「 ……?」

「だ、だめだわ！ やっぱり私ひとりじゃ何かもう全然ダメって感じっ えーと、パト、チャム ああっ！ だめよ呼んじゃ！

約束、約束 えっと、どうしよう ああっ！ こっち見てるうー！」

パニックに陥ったカリスはかなり挙動不審になっていた。

男は気だるそうに身体を起こし、ベッドの端に凭れて座り直す。

ふっと息を吐いて目を閉じた。

三十秒ほど黙ってそうしていただろうか。

改めて切れ長の綺麗な瞳がゆっくりと開けられる。

そしてまたカリスを振り返った。

「 ……これはどうやら、夢じゃないみたいだ。現実かな……? それとも」

細くも太くもない、心地の良い声だとカリスは思う。

躊躇^{ためら}いの無い視線はきつと何者をも絡め取ってしまうに違いない。

それは甘美で純粋な、罨の様だ。

「 それとも……ここは天国……?」

「 」

一言も発せなかった。

男の一挙一動が、それこそ僅かな瞬きさえ、カリスの呼吸を止めてしまいそうだった。

胸が締め付けられる。

息苦しい。

「僕は怪我をしているのか……ああ、君が、ずっと看病をしてくれていたんだな。何となくだけど、覚えてる。ありがとう。えっと

」

「……っつ……っか、か、カリス、ミア……っ」

「カリスミア……。綺麗な名前。まるで花のようだ」

「っそ、そう、だって、わ、私 あ、うっんっ！ 何でもなっ

」

い、と言おうとして、突然カリスの呼吸運動が停止した。

男の微笑みが、あまりに、綺麗で。

呼吸を完全に忘れてしまっていた。

体中の脈が限界まで跳ね上がる音をずっと感じていた。ずっと、ずっと。

「 あっ……とと」

酸欠で、立ち眩みを起こすまで。ずっと。

「大丈夫？」

「だ、だ、だいじょー……ぶ……はあ、びっくりしたあ……」

床にへたり込んだカリスは大きく息を継いだ。

まだ少し目の前が揺れ、そのままぼーっとするが、カリスは果たして酸欠に驚いたのか、男の笑顔に驚いたのか、もしくはそんな自

分に驚いたのかは自分でもよく分かっていない。

もしかしたら、目の前に起きている全てに、かもしれない。
が、そんなごちゃごちゃした思考は再度、男の動きによって掻き消される。

ゆっくりとした動作でベッドを降り、確かめるように立って、何度も地に足を押し付ける。

歩ける事が分かると、その足は真直ぐカリスを目指した。
長くしなやかな肢体はとても優雅に動き、あつと言う間にカリスの目前までやって来る。

無駄のない動きで伸ばされた左腕を呆けた顔で見つめた。
その指先から追って見上げた所にあつたのは、気が遠くなるほどのそれは “美貌” だった。

「 カリスミリア？ わっ、しっかり！ どうした!？」
「 …… もあ …… げんかあ …… いい ……」

とつとつ、カリスは目を回して気絶してしまっていた。

？・危険なニオイ2

.....

むかし、むかし。

妖精の国の、おはなし。

いろいろな種族が、それぞれの特徴を活かし、ともに仲良く、暮らしています。

国ではなく、家族があります。

上下はなく、年齢があります。

法律はなく、法則があります。

争いはなく、協力があります。

妖精の国は、笑顔であふれています。

.....

* * *

ふと意識が開けた。

青い顔で名前を呼んでいるのはあの人間の男。

「……あれ……？ ……私……」

「気がついた、良かった。急に気を失うからびっくりしたよ」

間近で男が笑^えんだ。

触れている腕の感触で、男に抱き起こされているのだと気付く。

「ご、ごめんなさい……あなたの傷に障るわ、だから……」

「僕は大丈夫。感覚で分かる。ほら、こんなことも」

ふわり、とカリスの身体が宙に浮いた。

驚いて咄嗟に男の首に腕を回す。

「つな、な、な、な、な、な」

「ナ？」

「……なに、するの……」

本当は、もつと強く厳しい口調で叱るように言いたかった。

しかし出てきた言葉は意思に反して棒読みになる。

至近距離の笑顔がカリスのすべてを不自由にしているかのようだ。

「到着です、姫」

「……ベッド……」

「僕なら本当に大丈夫だから、ここで少し休んだらいい。きっと看病疲れたよ……こんなになるまでありがとう、カリスミリア」

「……あ、は、はい……」

男の謝辞に曖昧に笑って返した。

間違っつては、いない。

カリスは男の側を離れず、昼夜の別なく看病し続けたのだ。

疲労を確かに感じてはいるが、しかしまさか男の美貌に目を回しましたなど口が裂けても言えない。

そんなカリスの心の葛藤を知るべくもなく、男は近くにあった窓に歩み寄り外を眺めた。

先ほどカリスが立っていた場所だ。

「……大きいなあ……森なんて、もうどれくらい見ていないんだろう……どれくらい？」

「あの」

自問した呟きを残し、男はカリスを振り返る。

カリスの視線は男が振り向くのと同時にベッドの端へと逃れていた。

「あの、あなたの名前を、私、まだ、聞いてなくて」
「名前」

束の間の沈黙が降りる。

男は少し考える素振りを見せたが、カリスに返ってきたのは苦笑だけであった。

視線が外れた隙に男を観察していたカリスは、視線が戻るのとは同時にまた瞳を逸らす。

「あの、じゃあ、何て呼んだら」

「何でもいい。カリスミアの好きなように。ジョン、マイク、アンナ、リッツェ、ボーン、ムサシ・コジロー」

「コジロ？」

「うん。どこか遠い国の剣豪の名だ」

「コジロ……いい響き」

「気に入った？ じゃあ僕は今日からコジロ」

「コジロ」

「ハイ。何でしょう、姫」

持ち上げたカリスの視線と、コジロの視線がぶつかった。

コジロの持つ優しい雰囲気、不思議と安堵を覚えた。

少しずつ、心が警戒を解き始める。

同時に、長らくカリスの心を縛り付けていたあの厄介で苦しい劣等感プレックスさえ消えていくような気がした。

「コジロ、あなたはいい人ね！ 元気になってほんとうに良かった」

カリスは心から笑った。清清しく、純粹に、笑った。

はじめて家族とあの二人以外に向けた、人懐っこい笑顔だった。

「……君のおかげだよ、全部」

「そんなことないわ。あなたは生命力が強いつてパ とあっ！！」

「パ、とあ？」

「ぱ、ぱ、ぱ、ぱー……っ」

「パ、パ？」

「っパパ！！ そう、私のパパがねっ、珍しく訪ねて来てねっ、

“おお、この人間は生命力が漲っておる！ だいじょうぶだあ〜”

” ってね、あはははっ”

「この “人間” ……」

「ツツツ！！」

失言の数々にカリスはとうとう閉口した。

訝しげに細められる瞳がまるで突き刺さる矢の如く、痛い。

『バカ』

ひらりと髪が二、三本揺れ、どこからともなくそんな罵声がかリ
スの耳に届く。

はっとして辺りを見回すが、聞き間違うはずのないその声の主の
姿はどこにも見当たらなかった。

しかし、覗かれてはいる。確実に。

一体いつから？

問題はそこだ。コジロの美貌に気絶したところは見られていませ
んようにと必死に祈った。

すると、突然、目の前のコジロが噴出した。

可笑しそうに笑っている。

「え、えーと、どうしたの……？」

「いや。カリスミリアを見ていたらこころ表情が変わって、面白
いなあと思ったから」

「……そ、そうかしら……喜んでもらえたなら、それはそれで……
よかった……」

引き攣る笑みを浮かべつつも、やはり、そうして笑うコジロも魅
力的だなあと思ってしまうカリスであった。

* * *

どうやら彼女は気付いたようだ。

扉のほんの微かな隙間から、パトの能力を使って、全ての会話を拾っている 【守護者】 二人の存在に。

「うわー、おれが言ったって勘違いしてないよね？ もうチャム、ちゃんと名前も言うべきだよ人に能力使わせて罵るときはさあ」

カリスの様子から窺うに、場所の特定はまだ出来ていないようだ。驚いた顔できよるきよる視線を動かしている。

「そんなまぬけな罵りがあるか。声で分かる、カリスなら」

「……それもそうか？ あ、コジロ笑ってるよ〜。あはは、なかなかすごい人だ。カリスがあんなこと言ったのになんにも気がついてない」

「……………」

「カリスも打ち解けたみたいだし、こうして見るとすっごくお似合いだよね。カリスと並んでひけをとらないのもすごいし。これでコジロが人間じゃなかったら……残念だよねえ、そう思わない？ チャム」

「全く思わないな。あいつは人間だ。それだけだ」

「でも、あのカリスの顔見てよ。あれはもう手遅れだと思っけどなあ。急に倒れたのも案外コジロに見惚れてだったりして」

そもそも二人は、コジロの声を聞いて慌てて様子を窺いに来たのである。

カリスに何かあったのだと察知したからだだった。

状況によっては妖精の存在を晒すことも覚悟していたが、幸いカ

リスはすぐに目を開けた。

倒れた理由としてはコジロの言った看病疲れというのが有力だが、相手はあのカリスである。

パトの見方も一概に否定出来ない。
いやむしろ、その方がしっくりくる。

「かなり楽観的だなパト。その発言を僕はどう捉えたらいい？」
「分かってるよ、ごめん。たぶんおれもチャムと同じ考えだと思うよ。まずはコジロの調査から？」

他愛のない会話が続く室内から視線を外し、二人は顔を見合わせた。

「カリスからあいつの情報を読み出して、追いつく方法を考える。
手遅れになる前に、だ」

「はあ。かわいそうだけどしょうがないよね。おれたちは妖精だもん。人間とは違う」

そう言ってパトが溜息を吐いた。

室内から二人の楽しそうな笑い声が耳に届く。

あんなに生き生きとしたカリスを望んでいたのは他の誰でもない、チャムとパトなのだ。

どんな形でもいい、どんな妖精でもいい、カリスが笑っていてくれるなら。

そう願ってきたのに、その相手が事もあるうに人間などと認められるはずがない。

許せるはずがない。

(だって人間は恐ろしい)

……すべては、カリスのために。

? 作戦会議 Part 3

虫たちが賑やかに音楽を奏で始める時間、

カリスはコジロに夜の挨拶をして部屋を出た。

家の中は狭く、余っている部屋がないため、

暫定的にコジロはカリスの部屋を、カリスはチャムとパトの部屋を使用していた。

チャムとパトは二人で二つの部屋を共有しているが、正確にはきちんとプライベートルームがある。

家は基本的にカリスサイズで作られているので当然二人には大き過ぎた。

そこで、部屋の中に適度な大きさの部屋をそれぞれ作り自室としている。

カリスから見れば正にミニチュアである。

余った空間には大きいベッドとテーブルが置かれ、

普段は二人の共同スペースとなっていたが、

これが今回本来の役目通りカリスのベッドとして活用されていた。

「とんとん。入ってもいいですか? どーぞお」

かちや、とドアを開けてカリスが部屋に進入する。

すぐに部屋の主であるチャムとパトが、

中央のテーブルに座っているのが目に入った。

「何してるの? お茶会?」

「……どこにお茶が?」

チャムの現実的な一言が返り、カリスは思わず苦笑する。

「言ってみただけよ。怒らなくてもいいでしょう。るるるん」

「何かカリスるるるんしてるね？ いいことあった？

ところでずっと気になってたんだけど、

何で最近部屋入る時一人で会話してるの？

すごく面白いよあれ」

「ああ、あれは、だって、コジロに二人のこと内緒にしてるからかと言って自分の部屋でもないし、ノックして、

どーぞって言うしかないなあと思って……念には念を、よ」

「うーん納得、と言いたい所だけど。

コジロから見れば自分の部屋をノックして入ること自体ヘンなのに、

一人で会話って余計あやしい気がするんだよねえ」

「そう？」

首を傾げたカリスにチャムが言う。

「ノックしなければいいんですよ。

僕たちにとつてここは共有スペースですし」

「まあ……そうだけど」

少しだけつまらなそうな表情を浮かべるが、

とりあえずチャムの意見に同意する。

そして促されるままテーブルの椅子に座った。

「それで二人はここで何してたの？

お茶会じゃないんだとしたら……単なる暇つぶし？」

「カリスを待ってたんだよ。

今からコジロについての作戦会議だからね」

「コジロの？ なんの会議？ 作戦？」

もっともな質問だった。

人間を追い出そうなどと考えていないカリスには意味のないものである。

慌てて弁解しようとするパトをチャムの落ち着き払った声が遮る。

「あの人間の事、僕たちも知っておく必要があります。

どんな人間なのか分かれればその後の処置にも役に立ちますから。存在を晒せない僕とパトにとって情報源はあなたしかいない。

あの人間とどういう会話をしたのか話してもらえますか」

元々あまり嘘の吐けない性格が何かしら意図を含んだ言い回しにさせた。

少しばかり敏感な者なら簡単に裏の意図を読んだのだろうが、カリスは当然、それが出来ない。

あるいは今のカリスだから　つまり少々浮かれているから　いつもより言葉が婉曲であるということにさえ気がつかなかったのかもしれない。

チャムが意図的か否かはまた別の話になる。

「話した内容……あまり、覚えていないわ。

何を話したんだっけ？」

「じゃあ質問に答えて下さい。あの人間の名前はなんと？」

「名前はねえ、コジロよ。可愛いでしょう、コジロ」

「それはカリスが適当に付けただけでしょう。

僕が訊いているのは本名です」

「だって、訊いたけど答えてくれなかったんだもの。

言いたくないのよきつと。だからね、コジロにしたのよ、

可愛いでしょう？　響きがなんだかね、こつ」

「コジロはもういいです。」

……どうやら、問題はそこですね」

「……どこ？」

カリスが真剣に首を傾げた。

パトも頷くが、カリスに同意したのではない。

二人は深海のような青い瞳を真直ぐ見返した。

? ・作戦会議 Part 3

「なぜ本名を言いたくなかったのか、ではなく、
言いたくても言えなかつたんです。

自分の名前を覚えていながつたから

「
チャムが言つた。

その確信的な言葉に再度首肯して、パトが続ける。

「あんな嵐の中で生き延びただけでも奇跡だもん、
記憶が飛んじやつてもおかしくないね」

「……記憶、喪失……？ まさか。
だつてそんなこと一言も」

「理由は分かりません。でも、もし名を知られたくないのだとしたら、
怪しまれないように偽名を使う方が自然です。

他になにか記憶がないと思われる言動や行動はありませんでした
か？」

「そんなのあつたかな……」

斜め上の空中に視線を移し、カリスは暫く考え込む。

どんな会話をしたのだったか、
記憶を辿るもあいまいにぼやけてはつきりしない。

あの魅惑的な笑顔ばかりが鮮明に蘇る。

……日に焼けたようなブラウンの髪。

鍛えてある身体は思った以上にしなやかでとても優雅に動く。

そして何よりもあの長身がカリスに今までにない感覚を与えてい

た。

自分が相手を見上げるといふ、経験のない行為。
胸のどこかで感じている安堵感の半分はそれが原因のような気が
した。

(それから窓の外を見詰める横顔とか

私を抱き上げてくれた時の表情とか

というかそういうのも初めてだったし

あ、声も素敵。耳に心地よくて、

いつまでも聞いていたいなんて、

口には出せないけどそんな風にも思ってしまうのよね……

ああ、コジロ。私のこの気持ちは何？

あなたは一体誰なの？ ……)

「カーリースー。ちゃんと考えてますか？」

「はっ。え、えーと」

「全っ然違うこと想像してましたね今？」

「そ、そんなこと、ないわよ？」

「ちゃんと思い出そうとしてたんだから……っ」

「いまカリス “はっ” って言ったよね？」

「顔にやけてたし」

パトが笑いながらつつこんだ。

目を限界まで細めたチャムが、

かなり疑わしそうな表情でカリスを凝視する。

大量の汗を噴出しつつカリスは、それでも違う違うと否定した。

「えーとっ、でも、本当にそんな素振り

記憶がないという感じは、なかったわ。

やっぱりチャムの考えすぎなんじゃないかしら」

「じゃあさ、コジロについて分かったことを教えてよ。

どこから来たとか、どの種族かとか、

これまでの生活はどんな風だった、とか」

「それは勿論、たくさん話したわ。

どこから来た、とか、どの種族、とか、

これまでの生活の話だって全部」

そこまで言って、笑顔のままカリスは言葉を切った。
チャムとパトが同時に首を傾げる。

「カリス？」

「あれ……？ おかしいな……そういう話、

していないかもしれない。思い出せない……」

「質問はしましたか？」

「した、と思うの。でも……

ああ、そっか……

いつも曖昧に微笑んで、困ったような表情かおして、

何も言わなくなるから私も慌てて話題を逸らしてたんだっけ……

でもそれって、嫌なことに触れられたくないからだって思ってた。

違うのかしら……？」

カリスの瞳がチャムとパトを映す。

明らかな戸惑いがそこにあつた。

「カリスが感じたこと、間違っではないないと僕は思いますよ。

記憶は意思によっていくらでも捻じ曲げられます。

自己防衛するんです。

もしも嫌な過去があつてそれを消し去ってしまいたいと思つてい
たなら、

遭難事故の衝撃に便乗して本当に記憶を排除してしまったという

「ことも考えられます」

「うん、おれもそんな気がする。」

“人間” には忘れたいことの二つや三つや四つありそ
うだもん」

「そうかもしれない……けど……そうだとしても、

それが何か差し支えるかしら？

「ここにいるなら無理に思い出さなくてもいいんじゃない？」

いくぶん冷静さを取り戻したカリスが言った。

もつともそうに聞こえるその言葉は、

しかしチャムによって完全に否定される。

「十分差し支えます。記憶は存在の証ですよ。」

自分は何者か、それを失くしてしまうことがどれだけ苦痛なのか、
もつと想像してみてください。ここは即刻、何としても、

何が何でも記憶を取り戻してもらわなければならない。

そして同じ種族の元へ帰ってもらわなければならない。

「チャ、チャム……ッ」

思わず本音に乗ってしまった発言をパトが諫める。

ここまでできてバれてしまったのは元も子もない。

しかし、当のカリスは気がついていないのかいないのか、
複雑な表情を浮かべて黙り込んでいる。

何かを考えている様子だった。

チャムは続けて念を押す。

「これはあの人間のためなんです。」

やはり人間は人間と暮らすべきなんです。

「分かりますよね？」

「……分かってる。」

でも、無理に思い出させるようなことはしたくないの。
だから、せめて自然に思い出すまで、待ってもいいでしょう……
」？

つまりは、帰したくない、と。

言葉に出さなくとも秘める想いは十分に伝わってきた。

『手遅れだと思っけどなあ』 とは、パトが言ったのだった。

(手遅れ?)

これまで見たことのない表情で笑っていたカリス。

(ほんとうに、手遅れ?)

(今日一日話しただけの “人間” 相手に?)

ぞっと、嫌なものがチャムの背筋を通り抜けた。

恐怖にも、怒りにも、悲しみにさえも似つかない。

表現のしがたい、悪質な衝動。

チャムは両手をきつく握り締めた。

「……そうやって、引き伸ばしていても意味のないことくらい、
カリスだって分かっているはずですよ。
とにかくあの人間のためを思うなら、
一日も早く記憶を取り戻させることに全力を注ぐべきだ……
カリス、あなた自身のためにも」

「……………」

誰も何も答えなかった。

それ以上の “最善” はあり得ないような気がした。

会議は早々に終了し、三人はそれぞれ眠りにつく。

しかしカリスの瞳だけはいつまでも暗闇を映してばかりいた。

？・交錯1

作戦会議の翌日から、積極的な試みが始まった。

「え、うわっ、わああ！」

「ちッ」

がたたつと音がした方向に視線を向けたカリスは、階段の途中でそれはそれは器用に身体を捻り落下を免れたコジロを発見する。

少し顔が青褪めてもいる。すぐさま駆け寄り「大丈夫!？」

と声をかけながら、どんな態勢でもやっぱり美しいものは美しいのね、などとカリスは考えていた。

「びつくりした……なんだったんだ今のは……しかも舌打ちのようなものが聞こえたような、聞こえなかったような」

「何かいたの？」

「うん。こんな大きい蛇が急に僕の足元に落ちてきたんだ」

両手でジェスチャーしてみせるコジロの態勢はすでに普通のものに戻っている。

ちなみにその蛇とやらももうどこにも見当たらない。

首を傾げつつ、コジロは残りの段を降りて来て朝食の席についた。

「こんな森の奥だし、よく出るの？ 蛇」

「ううん、普段は全くよ」

実は、よく出没する。

日々蛇に限らずさまざま大自然の危険と隣合わせなのだが、カリスはただそれを知らないだけだった。

更にそれらを排除しているのが誰なのかも。

一旦厨房に姿を消していたカリスは朝食を持って戻って来る。食欲をそそる香りと湯気が辺りにたちこめた。

「どうぞ、召し上げね」

テーブルいっぱいには並べられた食事は豪華とは言わないまでも、普段より種類が増えていたりする。

カリス自身も席に着き、コジロが食べるのをじつと見詰めた。

木製のナイフとフォークを手馴れた様子で扱い料理を口に含む。暫くして瞳を上げ、笑顔を作った。

「すごくおいしい。カリスミアは料理が上手いんだな」

「えっ。えーと、そのー、うふ、うふふふふっ」

返事を避け曖昧に笑ってみせたカリスの意識は、今も厨房にいるはずの、そして百パーセントの確率でここの様子を窺っているであろうチャムとパトへと向けられていた。

間違っても家事方面での贅辞に領いてはならない。

自覚していることでもあるし、本当の職人^{プロ}たちと顔を合わせる時を思うと贅辞を受ける気さえ消え失せる。

カリスとコジロは他愛のない会話をしながら朝食の時間を楽しんだ。

天気の話や、森の話など、どれも取るに足らない話題だったが、コジロにとってはどれも新鮮に映っているようである。

時々窓の外に視線をやってはその青々とした景色に目を細めた。

逆に、カリスの心は迷いに揺れる。

一晩中考えたがやはり気が進まない。

コジロの記憶が戻ってしまったら、コジロはここからいなくなっ

てしまうのだ。

そう思うと得体の知れない痛みがちくちくと胸に広がり息苦しくなる。

それでも、やはりコジロを思うなら、記憶の奪還に全力を注ぐべきなのだろう。

それが正しいのだということは、きちんと分かっている。分かっている

「ん？ なんだろうあの小鳥は……すぐきれいな色をしてるってうわっ!!」

「きゃあ!!」

ものすごい勢いでコジロ目掛けて鳥が飛んできた。

あわやその鋭い嘴がコジロの頭に直撃、という所で鳥はガンツと派手な音を立てて閉められた窓にぶつかる。

コジロの咄嗟の判断だった。

「わお」

「？ カリスミア何か言った？」

「え？ 何も……あ、 “きゃ” とは言ったけれど」

コジロは少し首を傾げたが、意識はすぐに窓の外へと向かう。もう一度窓を開け、ぶつかった鳥を見ようと窓の下を覗いた。しかしあれだけ全力でぶつかった鳥の姿はすでにそこには無かった。

地面に散っているのは色とりどりの花びらである。

「おかしいな。見間違いではないと思うんだけど……。でも、あの鳥、生きてて良かった」

微笑むコジロの横で、カリスも同じように窓の下を見詰めた。

「花びら……？ あ」

カリスは以前にも同じようにして遊んだ事を思い出し、それが誰の仕業なのかをすぐに悟った。

風を操れる者はここには一人しかいない。

階段での蛇もきつとチャムかパトの仕業なのだ。

例の記憶を取り戻す作戦はすでに始まっているらしい。

(でもちよつとやり過ぎじゃないかしら！？ 記憶を呼び起こすというより暗殺みたい)

とは言え、二人が本気でコジロの命を狙っているとはカリスも思わない。

ただもう少し手段を選んで欲しいものだと内心怒りを覚えた。

「私飲み物を淹れてくるわね！ ちよつとだけ、待ってね」

「うん。ありがとう」

そそくさと厨房に消えたカリスは、すぐさまチャムとパトを見つめ詰めた。

？・交錯2

悪戯が発覚した子どものように極まり悪く笑うパトとは反対に、
チャムはあくまでしれっとした態度を崩さない。

「いつものでしょう？ 準備してありますよ」

丁寧に掌を上向けて示された方向には白い湯気の立つ二つのカッ
プが置いてあった。

しかも持ち運びしやすい様、すでにトレーの中へ収められている。
いつもなら感心さえするその周到さが今ばかりは憎らしい。

飲み物など単なる口実である。言いたいのはそれではない。二人
だつて気付いているはずだ。

カリスの想像が決して行き過ぎたものでないということはパトの
表情を見れば分かる。

しかし何を考えているのかが分からない。どうしてそんな荒々し
い真似をするのか。

湧き上がる感情が爆発してしまわないように、カリスは必死で奥
歯を噛んだ。

壁の向こうにはコジロがいる。

「記憶」

突然、ぽつんと水が滴るようにチャムが言った。

眉を顰め、口を閉ざしたまま立ち尽くすカリスから視線を外す。

「記憶は、脳なんですよ。だから頭に衝撃を与えないと、きっと意
味がない」

「そうそう。常套手段だと思って」

「だからって限度があるわよッ」

声を潜めつつも可能な限り叫んでみる。

「彼を傷付けない方法だつてあるでしょう!?　せつかく元気になったのにこれじゃあ意味がないわ!　私はこんなやり方絶対許さないんだからッ」

「でも、まあいいじゃないですか」

「何がいいの!?　全然よくないッ」

適当な返事を寄越したチャムにカリスが眉を吊り上げた。

チャムの横で人差し指を口に当ててパトは、瞳を潤ませ始めたカリスの音量にストップをかける。

そろそろコジロにも怪しまれると暗黙の内に判断した三人はそれまでで言い争うのを止めた。

気まずい顔でその周到に用意されたトレーを持ち、カリスは厨房を出て行く。

その背に赤いリボンがひらと揺れた。

カップの乗ったトレーを手に戻って来たカリスにコジロは微笑みかけた。

カリスからそれを受け取ると、小さく歓声を上げる。

「いい香りだ。珈琲があるとは思わなかった」

「こーひー?」

「珈琲」

首を傾げるカリスにカップを示して見せるが手応えが無い。

急速に頼りない顔つきになって、コジロは一口、それを飲み込む。

「ん、やっぱり珈琲だ。しかもとても美味しい。カリスミアはこれをなんと呼んでるの？」

「あれ？」

「え？」

コジロは目の前のカリスが呟いたのだと思い、短く聞き返した。しかしカリスは同じようにきょとんとした後、

「名前は特にならないの。珈琲って言うのね。じゃあ今日からそう呼ぶことにするわ」

と言って屈託なく笑う。

先程の呟きは空耳だろうと判断し、コジロはまた一口珈琲を含んだ。

因みにこの珈琲はカリスが作ったものである。

近くに野生のコーヒノキが生えているのを見つけて、とてもそれが何の木であるかカリスは知らないが、その実を持ち帰り食用になるかどうか色々研究を重ねた。

失敗は数知れず。だが偶然も重なりとうとう現在の飲み物として進化を遂げていた。

チャムもパトも気に入っており、カリスも含め毎食後欠かさず飲んでる。

「あつまさかッ！」

「どうした？ カリスミア？ 珈琲、飲まないの？」

「あ、ううん、頂きまあす……」

実はこっさりコジロに見惚れていたカリスは少し顔を赤くして力ツプを持ち上げた。

液体がカリスの口に流れ込むのと、カリスにだけ届いた叫びとは

同時だった。

『それ飲んじゃだめえ!!』

「つつ!!!!」

「ごくん、としっかり飲み込んでから、カリスは弾けるように立ち上がる。」

『ぎゃーっ!! カリスうっ』

「つきゃー!! からあああああ!!」

「わっカリスミリア!! 大丈夫かっ!？」

床に倒れそうになった身体を間髪コジロが支えた。

「一体どうしたんだと聞くと、カリスは落涙しながら尚なんでもないと首を振る。」

「何でもないはずが」

「ほ、ほんほに、らいひょーふうっ……」

顔を真っ赤にして、とても大丈夫そうではない姿でカリスはそう頑なに言い張る。

「なぜなら、あの二人のしでかしたことだと分かっていたからだ。」

「本当はコジロを狙っていたのだ。」

「カリスミリア、しっかり!」

「ほひろおお……」

しっかりとコジロの腕に抱き留められているこのおいしいシチュエーションがなければ、確実にあの二人とは絶交でもしていただろうと、薄れゆく意識の中カリスは思っていた。

？・交錯3

「ああもうおれやだよー。これ以上カリスに嫌われたくない。しばらくほっておいて、チャム一人でやって」

晴れ渡る空に雲一つなく、少し日差し強い午後になっていた。微風に揺れる背丈のある草の向こう、木陰に並んで座るコジロとカリスの位置を確認したチャムは、草の上にな垂れぶつぶつ零しているパトを面倒臭そうに振り返る。

「自業自得だ。カップが入れ替わる可能性を想定していなかったという言い訳なら、僕は聞きたくない」

「すっごい痛い、ぐさあつてきた。そうやって分かってんなら傷口に塩を塗るようなこと言わないでくれる？」

「味覚を通して脳に刺激を与えようというその発想は、悪くない。ただ……………」

長い間があいた。

じいっと向けられる視線の意味を察したパトがさらにな垂れる。

「おれの頭が悪かったって言いたいんでしょ。分かってるよ、そうですよ、全部おれがバカだからですよ。はあ……………ほんと、カリスをあんな目に遭わせるなんて、どうかしちやってるよ」
「まったくだ」

言いつつチャムは、無造作に目の前の草をむしりパトへ投げて寄越す。

虚ろな目で地に散ったそれを眺めやり、パトは嘆息した。

「草までおれに投げつけて非難するんだね。石が飛んでくるよりましだけど……嗚呼、それでも耐えてみせるさいかなる罰もお仕置きもー」

「その覚悟があるなら良かった。それで草人形作るぞ」
「……ほえ？ くさにんぎょー？」

すでに両手を動かしているチャムの手握られているのも同じすつと伸びた草だった。

草人形、とは読んで字の如く草で作る人形を言う。そんなものを作ってどうしようというのか。

まさか二人でお人形さんごっこをするわけでもないだろう。

首を傾けつつ、その様子を少しだけ想像してしまったパトは、すぐに頭の中の映像を掻き消す。

何がそんなにといったら、チャムが絵にならなさすぎるのだ。
人形片手にかわいく微笑むチャムなど

「なんだ？」

パトの視線に自らの視線をぶつけてチャムが言う。

「早く手を動かせ。お前の方が意外に器用だろ」

「あの、ねえ、その前に訊いてもいいかな。これを作って、一体何に使うつもり？」

ぴた、とチャムの手が止まった。

黙ったまま答えを待つパトから、掌のまだ不完全である草人形へいったん視線を落とし、口を開く。

「勿論、この草人形で僕が楽しく愉快にお人形さんごっこをして遊ぶ」

「うわあー！ 想像だけでもキツいのにな、本気でそんなこと言われてもおれはぜつたい付き合わないよ！？ カリスにあんなことした罰だとか言って強制しようとしても無駄だからねっ！ 個人の趣味にとやかく言いたくはないけど、ごめん、ちよつとおれには受けいれがたいかなあ！？」

「と、思うか？ 僕にはそんな趣味も興味も時間もない。次の攻撃に使うんだよ。分かったか馬鹿パト」

「ああうわあうおいいかえせないいい。ていうか、それなら最初っからそう答えてくれればいいじゃん！ ほんといまおれ冗談に付き合えるヨユーないんだって」

「口じゃなくて手動かせ」

「まだ質問終わってない。コジロに攻撃って、そんなことしたらまたカリスを怒らせるよ。さっきも言ったけど、おれこれ以上カリスに嫌われたくないんだ。ほとぼり冷めるまで遠くから見てるから」

「あ、安心して！ 基本的におれはチャムの意見に賛成してるよ！ 確かにコジロ、早く記憶を取り戻した方がいいとおれも思うし」

「^{ブイ}Vサインなどしてみせてパトが言う。

カリスのことになるといつもの楽観主義も百八十度進む方向が変わってしまうようだ。

馬鹿だ馬鹿だと連発している意味を何も分かっていない。

言っつてやる方も疲れるんだとチャムは内心毒吐く。

「まったく、だからお前は馬鹿だというんだ」

「もういいよー。バカなのはよおっく分かったから」

「お前は全然分かってない。学習しろということだ。頭を使えということだ。こいつで堂々と正面きってあの人間と勝負する。それなら狡くもなんともないだろう？」

草人形を持ち上げチャムが言った。

ところどころ草がはみ出していて不恰好な人形だった。

パトはしばらくそれを眺めていたが、ふと、意識の戻ったような顔で呟く。

「ああ……そつか。もともとカリスとは意見が食い違ってるんだ。

真つ向勝負……？」

「そういうこと」

チャムは一つ息を吐いた。

「カリスに嫌われないことを考えるより、何がカリスにとって一番いいかを考えるだろう、いつものお前なら。へこんでる暇なんてないぞ」

「……………うわあ」

パトはまん丸に瞳を開いた。

目から鱗が、とはまさに今のパトを形容する言葉だろうか。

「チャムすごいや、おれかなりそんけーした今」

「だったらいい加減作ってくれ。あの二人がいつまでもあの場所にいるとは限らない」

「了解！ ふふふ、チャムもだよ。きつと、誰よりもね」

言って笑うパトを、顔を歪めたチャムが見詰める。さすがに唐突過ぎて、言葉の意味を把握し切れなかったようだ。

何がカリスにとって一番いいのか、それを誰よりも優先して考えるのはチャムだということ。

不器用なせいで誤解を招きがちではあるが言葉の端々に彼なりの優しさが見え隠れしているのをパトはきちんと知っている。

(素直じゃないんだよなあ、やっぱり)

また一人、楽しそうにパトは笑う。

「おれ好きだなっ、そういうチャムのこと!」

「……………お前は、馬鹿か？」

「だから分かったって言うてんじゃない。学習して、頭使って、そんで導き出した答えだよっ」

暢気な笑顔を湛えてパトは断言する。

「やっぱり馬鹿だ、というチャムの呟きは口から出る前に辛うじて飲み込まれた。」

？・交錯3（後書き）

更新が不定期になっています。この回も久々のアップになってしまいました。万が一（笑）コレを読んで下さっている方がおられましたら、本当にすみません。でも絶対ラストまで書きます！

と、言うことを、一応宣言しておきますです^^；

読んで下さっている方、本当にどうもありがとうございます。

完全にいつもの調子を取り戻し、せつせと人形作りに励むパトから顔を背け、見た目は悪いがなんとか人形ひとがたになった自分の作品を手
に辺りを見回した。

家の側に非常用に溜めてある雨水があるのを見つけ、能力で操り
ひと塊を掬う。

ひゅんつと宙を飛んだ水は真直ぐ草人形に着地しそれを湿らせた。
これにより草人形もチャムの制御下におかれることになる。

勝手に動き回る人形を目にしてパトは少し眉を顰めた。

「まさかチャム、その人形動かしてコジロを襲う気じゃないよね？」

動く草、などコジロからしたら超常現象だ。実際に動くのだから
見間違いという逃げ道もなくなる。

そんなことをすれば逆にカリスが質問攻めに遭って、終ついには妖精
であることがバレてしまうのではないかと危惧したパトの問いだっ
た。

「正々堂々とはしてるかもしれないけど、自分の首を絞めそう……
ほんとにやるの？」

「まだまだ頭使えてないなパト。お前の人形は？」

「こんなのでいいなら出来てるよ」

パトは両手を前に突き出した。

その上に乗っている人形を見てチャムは一瞬言葉を失う。

「…… “こんなの”、って」

あれだけの短時間で作られた人形はすつと伸びた手足にしつかり五本ずつの指がついていた。

顔部には眼として赤い実が二つ、右手にはついでに作ってみたという精巧な作りの剣までくつついている。

チャムがその人形を手にした時、地に立っていた自らの人形は、ぼふ、と重力の働く方向に倒れた。

* * *

午後の日差しは相変わらずの強さである。

「よし、こんなものか」

「おおー。合体胴長人形^{どうなが}」

「少しでも大きくしたかったんだ。見た目は悪いけど……」

パト制作の人形にチャム制作の人形を繋げ、上からぐるぐると草を巻いて出来上がった完成型は当然の如く胴が異常に長い。

チャムによればそれは重要でないらしい。

「コジロもカリスも当分動きそうにないよ。日陰が気持ちいいんだろね」

「じゃあ攻撃開始だ」

そう言つて、先ほどと同じように水に湿った人形はチャムのコントロールによって勝手に歩き出す。

コジロとカリスのいる位置の真正面、そして目に入らないほどの位置で立ち止まると逆さまになった。

「え？ ひっくり返っちゃったよ？ なんて？」

「ひっくり返らないようにだよ」

「……言ってる意味がまったく分からないんだけど」

「見れば分かる」

チャムはあの非常用の水を能力で全て掬い上げ、低空飛行で人形とコジロたちの間に見つからないよう移動させた。

そして水は地面に落ちるが、土が水分を吸収してしまうより早く、チャムの能力が発動する。

水分が瞬時に凍りついた。

「危機と恐怖、それが次のテーマだ」

* * *

庭で寛いでいるコジロを見つけ、その隣にカリスは座り込んだ。朝方よりずいぶん気温が上がっていたが日陰はとても涼しかった。

「ここは天国かな」

前方に視線を置いていたコジロが静かに呟く。

「天国がこんな場所なら……死ぬのも悪くない」

カリスは顔を上げて端正な横顔を見た。言葉とは裏腹に穏やかな表情がそこにはある。

だがカリスの心はなぜか、得体の知れない漠然とした不安に包まれていく。

初めて目覚めた時にも、コジロは同じように問うたのだ。
天国か、と。

「……コジロは、生きているわ。今もちゃんと、生きてる」

「……どうかな。自分じゃよく分からないんだ。……でも、ここでこれから、ずっとこうしていられるなら、事実を知り得なくてもいいんじゃないかと思ってる……」

微かに細められた瞳がどこか、遠く、見知らぬ場所を映しているようにカリスには思えた。

閉じ込められてしまった記憶が必死に出口を探すかのように、彼を無意識にそこへ導いているのかもしれない。

(忘れようとした記憶は、本当は)

(本当は、忘れてはいけなかった……?)

ふと、そんな言葉が胸に浮かんだ。

コジロの瞳の中にはさみしさがある、と言ってしまったなら、それは自ら記憶を封じる行為と矛盾してしまいかねない。

しかしそうした不安定な心情も結局はコジロ自身なのだ。全てが。

「コジロは生きているし、私も生きている。今見えているこの草も、あの木も、風も、水も、みんな生きてるわ。だからコジロも、生きて今この時、この場所にいるのよ。天国だと思っくらい素敵な場所に、あなたは今生きているの」

コジロの、色素の薄い瞳が真直ぐカリスを捉えていた。

無言で向かう視線に込められる感情がどこへ属するのか読み取れずに、カリスもまた、無言で返すのが精一杯の反応になる。

瞳と同じ色素の薄い、癖のない髪がさらりと流れた。

そうして逸らされた視線が、今度は明らかに、景色を通り越したどこかをそこへ映している。

「……何を忘れてしまったんだろう、僕は」

自問のようにして零れた言葉はそれまでのどこか淡々とした声音とは違っていた。

心の奥の方から滲んだ、コジロの感情だった。

「夢を、見るんだ。いつも同じ夢を、何度も、何度も……だけど目

覚めたら消えてしまっている。誰かがいたはずなのに顔も声も思
い出せない」

「……………何も？」

「何も。ただ、暗闇以外は、何も……………」

細く空気に溶けるようにして言葉が途切れた。

一瞬、カリスの目にコジロがひどく疲れているように映るが、す
ぐに緩められた表情によってそれは錯覚の域を出ないままになる。

「ごめん、こんな話しても退屈だよな。つまりは夢見が悪いつてだ
けのことなんだ。今言ったこと、忘れてくれる？」

カリスを振り返り、不自然にならない程度の明るさを伴わせて、
コジロはそう告げる。

(違つ)

胸に気持ちの悪いものが拡がって行った。

コジロの苦笑が追い討ちをかけるようにさらにカリスの胸を締め
付ける。

(コジロは嘘を吐いている。無理して、笑っている。私は何をして
るの？ コジロにそんなこと言わせたらダメなのに！)

暗闇なのはきつと、コジロの心だ。チャムの言う記憶を失くす辛
さというものを、今になって漸く想像できたような気がした。

「……………コジロ、私」

「…つん？」

出来る限りのことを、してあげるべきなのだ。記憶の奪還のために、どんな手を使っても。

チャムの言うことはやはり正しい。それが一番コジロのためになる。

自分のちっぽけな感情など、彼の苦痛と同じ秤はかりにかけることすらきつと出来ない。

「思い出せるわ、いつか。私もそのためなら何だってする。でも無理だけはしないで。辛いなら辛いつて言つて。何でもいいから覚えていること話してね？ もちろん、言いたくないことは言わなくていいけど……話した方が早く思い出せるような気がするから、だから……」

最後は上手く言葉に出来なかったが、言いたい事は伝わっただろうか。

コジロは頭上を見上げた。

木々の隙間からは優しい青と眩しい光が交互にのぞいていた。

「……本当に、ここの森はいい。とても心が落ち着く。こんな自然の中に、僕も住んでいたのかもしれない」

「……そう、ね。うん、きつとそう。コジロの住んでいたところも自然が生きている場所なのよ」

「今みたいにごうして座つて、ぼーっとして過ごしていたのかも。それなら最高の暮らしだ」

頭上を見上げたままコジロが笑う。

その視線を追って上を見上げたカリスの目に、きらり、と、精霊の羽が陽光に反射して煌めいくのが見えた。

「ねえコジロ、知ってる？ 自然は人の心にとっても敏感なの。優し

い心をした者には笑いかけてくれるのよ。歌を歌ってくれるのよ。ここ森をいいと感じられるのは、コジロが優しい心をしているから、森も心を開いているの」

コジロはその言葉を黙って聞いていたが、暫くして言う。

「……不思議だな、君は。どうしてそんなことが分かる？」

はつとして、カリスはコジロを振り返った。自ら妖精であることを暴露してしまう発言だったかと瞬時に青褪める。

が、目の前にある表情はとても柔らかく、眩暈を覚えそうなほど綺麗な微笑みが浮かべられていた。

顔が火照るのを感じながらもそこから目を逸らせない。

「あ、あの、い、今のは、その、何となく、そう感じたというか、あつても、言ったことは嘘ではなくて、ほんとうで、ええーと、なんて言ったら、いいか……っ」

「ありがとう。カリスミアが言うと、本当にそんな気がしてくるから不思議だ。考えていることがどれも小さなものに思えてくるな。君は、もしかしたら森の妖精かな？」

「ええっ！!!」

必要以上に大声で叫んでしまい慌てて両手で口を塞ぐ。心臓の鼓動がコジロの耳にも届きそうなほど高鳴っていた。

(やっぱりばれてるっ!?!)

涙目になったカリスに、「いや、やっぱり違う」と付け足し、相変わらずの綺麗な微笑みを添えて、コジロは言った。

「カリスミアはきつと、羽のない天使だ」
「……………」

呼吸を忘れて意識が遠のいた。
何も言葉に出来ない。

(コジロと居ると、み、身がもたない)

さらりと、まるで水が流れ落ちるように、自然に、言葉が紡がれるから。

チャムの憎まれ口に慣れてしまっているカリスには刺激が強すぎるのだ。

躊躇いのない魅惑的な微笑と甘美な言葉。

心が、体が、見る見るうちに溶けていきそうだった。

「ん？ 何だろう、あれ……………何かが動いている」
「え？」

遠方を眺めやりながらコジロが言う。
指し示される方向へカリスも目を凝らす、よく分からない。

「どこ？ よく見えな」
「あ、ほら。真直ぐ、視線を伸ばしたところ……………まただ。何だろう？ 動物？」

「ん……………やっぱり見えないわ。野うさぎかしら？」
「野うさぎ？ にはしては少し大きいような」

首を傾げ二人が同時に身を乗り出した時だった。

「幻想」 発動「

ぐおおっ、と奇妙な形をした半透明のヒトのようなものが、木々と並ぶように一気に伸び上がった。

VII・交錯6

風がほぼ止んでいた。パトが能力を使ったからだ。チャムに言われるまま、風の流れを制御した。

「うわああすごいや！ 人形がお化けになるなんて」

口を開けたまま凝視する先には、巨大な草人形の像があった。

チャムの行動から分かるのはそれが光の異常屈折現象によって起こる蜃気楼であるということだけ。

草人形をひっくり返したことや大気中の逆転層を作ること、そして風の流れを止めることなど確かにどれも理に適ってはいる。

だが、純粹に自然現象と言ってしまうには不自然な点も多い。

“幻想” と呼んでいるからにはチャムが何かしら手を加えて操っているのは間違いなさそうだった。

“幻想” から視線を移動させたパトは、この化物と対峙するコジロとカリスを見た。

驚愕のあまり動けなくなっているカリスを背にコジロが立ちはだかっている。

緊張と恐怖が混ざり合った厳しい顔つきだった。

「何なんだこれは……!!」

口許で咳かれたものがパトの耳に届く。

ゆっくりとだが確実に前進してくる巨大な幻に圧倒されている。

「気付くか気付かないか、ぎりぎりの賭けみたいなものだけど、とりあえずはちゃんとテーマに沿えてるみたいだよ。これで何か思い出すかな？」

「さあな」

極めて簡潔に、低調に、それ以上返しよのない返答を寄越され、パトの頭の中に愚問という二文字が浮かぶ。

つまらない奴だなどという不満を抱かない程度には慣れてしまっているから腹は立たない。

「コジロツ……に、逃げて……ッ逃げてッ……私が、なんとかッ……」

カリスの声だ。震えている。

立ち上がることも出来ない自身の状況を把握しているとは思えない発言だった。

当然コジロもそれを聞き流す。

目の前の化物を見据えた。

「コジロツ……私にも、あれが何だか、分からないの……逃げた方が、いいッ……」

カリスの涙声を背中で聞きながら化物の手に握られている剣を映した。

俄に、コジロの瞳の色が変わった。

「……あれが何であっても僕だけ逃げるといっわけにはいかないさ。君が逃げられる態勢になるまで時間を稼ぐことなら簡単だ。それに……あの眠たくなる動き、楽しめそうにない」

「コ、ジロ？」

高々と剣を振り上げる巨大な化物を凝視したまま、彼は少し笑ったようだった。

表情が見えたのではない。
纏う^{まと} “雰囲気” が、変化した。

「コジロ……？」

名を呼んでみる。

漠然とした、直感的でしかない疑心を確かめたくて。
そこにいるのが本当にコジロなのか、どうかを。

「お前」

低く抑えられた声にはっとする。

それは間違いなくコジロから発せられたものだ。

しかし振り返らない背中ではまるで知らない他人のように、ぎこちなく、冷ややかにカリスの瞳に映る。

すぐには反応できなかった。

「目を閉じている」

「え？」

掠れた声で、カリスは聞き返す。

コジロは今もまた “笑って” いた。

「血の一滴も見慣れていないお嬢様は目を閉じている。久々の相手は派手にやると決めてるんだ。つまり相手は無視する主義だが、邪魔になればお前でも容赦はしない」

「ッ」

声の出ないカリスの、その返答を待つ素振りさえ見せないまま、
コジロの左手足が後方へ移動する。

同時に左腰前へ動いた右手が左手と共に何かを握った。

が、そこにあるべきはずの“何か”が存在しないことに、コジロの身体はすぐに気付いたようだ。

数瞬の間があき、前方に張り付いていた視線が両手のある位置へと動かされた。

視覚でもって現実を確かめるように……。

それきり、言葉も動作も何一つ無くなる。

暫くしてゆつくりと、両手は自然な位置に戻されるが、その掌は固く握られていた。

微かに震えているように見えるのもカリスの気のせいではない。

「あれ？ 化物消えちゃったよ？ あんなに頑張って人形作ったのにもう止めるんだ。いつもなら元は必ず取るっていう方針のチャムが、珍しい……おれには分からなかったけど、もしかしてすでに目的果たしてたりする？ まさかもう記憶戻ったの？」

「……さあな」

「……………」

返答の返り方なら慣れていから何ら問題ない、と感じていた今までの自分を恨みそうになりながら、吐き出したくなる本音を喉元でとどめた。

だがパトにも目の前に起こった異変の重要さは容易に理解できる。そしてそれが「なぜ」という問いに対する答えだということも。

「コジロ、こつち！」

カリスの声がした。

いつの間にか立ち上がり、呆然と立ち尽くすコジロの腕を引いて、二人は森の中に消える。

「……剣を構える動きだった」

瞳に映る情報とは一致しない言葉をチャムが吐いた。
パトは一瞬反応が遅れるが、すぐに察して首肯する。

「手馴れた感じだったね。小さい頃から訓練してたのかな？」

「おそらく。記憶のない人間が無意識に取った行動だ、身に染み付いていると考えるべきだ。危険に面して即対応できるあの冷静さも尋常じゃない。きつと、環境がそうさせてる」

「……戦争」

口にするのも恐ろしい単語がぼつり、呟かれる。

押し黙った二人の表情には明らかな緊張の色が浮かんでいた。

その恐ろしさを、知らない妖精はいない。

体験した祖先からの言い伝えばかりではあるが、戦争と聞いて慄おのき怯おびえない者はいなかった。

妖精には、なぜ同族で殺し合うのかが理解出来ない。

その先にあるのが一体何なのか、考えていることが全く分からない。
い。

だから、人間はそういう恐ろしい生き物だと結論付けた。

一切関わらないと誓った。

【フェアリーランド】はこうして平和に存在してきたのだ。

たった一人の“戦争屋”のために、カリスを異端分子にするわけにはいかない。

「排除だ それしかない」

「うん。異議はないよ。でも……ちょっと気になるんだよね」

「余計な感情なら捨てる。悪い結果しか生まない」

「分かっている。カリスのためならコジロに対する感情の割合は当然

ゼロだよ。そうじゃなくて。気になるんだ、精霊たちが……」

真顔でパトがそう言った。

時々、きらり、きらりと陽帝サンの光を反射する精霊の羽。

宙を舞う姿がどこか複雑な感情を持て余しているようにパトの目には映っていた。

VII・交錯6（後書き）

半年以上ぶりの更新になってしまいました（汗）

これから時間があれば更新したいと思います。

もしかしたら読んで下さっている方へ。ほんとにすみません。

VII・交錯7

もう何度も繰り返してきた僕の我儘は、きつといつまでも続くのだと勝手に思い込んでいた。

なにものにも囚われぬ、人並みの自由を手に入れることさえ、一生あり得ないのだと思っていた。

「私は何も望みません。あなたのためでも、両親のためでも、周囲の人間のためでもない。私自身のためにここにいます。ただそれだけです」

無感情にきみはそう告げた。

主であるはずの僕に向かって、初対面で、宣言した。

自由でいたい、と、そう言ったのだ。

「ふうん」

興味深かった。

現実には自由などどこにもないのに、口先で強がるのはみっともないことだ。

言ってみたとところで一体何が出来る？ 何が変わる？

自分を騙し続けることに何の意味がある？

無駄な行為をなぜ止めない？

「疲れるよ。あんだといると」

ある時、僕は思わず呟く。

きみへ直接には声を向かわせず、窓から見える荒野をずっと瞳に映しながら。

「苦痛だ」

存在そのものが。

続けた言葉をきみも確かに聞いたはずだった。

少しの静寂のあと、硬質な靴音が響き、僕から遠ざかる。

息を吐いて僕は振り返った。

誰もいなくなつた空間に安堵を得ようとした。いつものように。

僕の我儘で周囲の人間を翻弄ほんろうできる事実だけが、僕に与えられた

唯一の“自由” だったから。

でも、初めて僕はそれを奪われた。

きみは、そこにいた。

「……出て行かないのか？」

「なぜでしょうか？」

「……泣かないのか？」

「必要がありません」

「……愛想を尽かしたと、人権を侵害されたと、泣いて、喚わめいて、すぐにここを辞めていくんだ。……中には物を投げつけてくる奴もいたぞ。ナイフを突きつけてくる奴もな」

「仰っている意味が全く分かりません」

「変わってるな」

「……あなたと会話が成立するほどには、まともな思考回路を維持していると思えますが」

「……ああ、そうか。迂闊うかつだった」

荒野からの乾いた風が入り込み、きみの瞳に映る僕の髪が流れるのを見た。

「僕との会話を基準にする奴は、まともじゃない」

風できみの髪が揺れる様を、きつときみも僕の瞳の中に見ていた。沈黙のあと、きみは少しだけ肩をすくめてみせる。

「……どちらにしろ私には関係のないことです。誰かのために一喜一憂するほど可愛い作りにはなっていないようなので」

「それは“嘘”だろう」

「あなたがここを辞めると仰るならそうします。私の意思で、そうします」

必要以上にきっぱりと言い放つ。

どんな状況下であっても自分は自由なのだと、強がることを忘れなかった。

「させないさ。せめて、如何にあんたの環境が不自由なのか、知らしめるまではね」

「……」

きみは何も答ええない。

ただ真直ぐ僕を見ている。

だがこの時、僕にはそれまで分からなかったものが、手に取るように分かるような気がしていた。

きみと僕はあまりにも似ているのだと、漸く気付いたのだ。

押し殺された感情が、棘をもつ時の痛みや、哀しみも。

心の奥の奥の一番深い場所に抱える、表現のしようのない、どす黒い部分も。

自由でありたいと、渴望して止まない感情があることも。
なにもかもが。
愛しいほどに。

(理解できたと思っていただけだ……必要だと、思っていたのは、僕
だけだったのか?)

きみを。

同じだから、この手で縛っておかなくても側にいてくれると。
同じように、きみも……。

「ごめんなさい」
「オ」

黒いうねりの中に消えた記憶。きみの声。

あの謝罪は何のためだったのか。
伝える必要のあるものだったのか。

あの時のきみの言葉は完全に僕に理解されることを拒んだ。
これまでにない意思を伴って。

(思い出したくない)

苦しいのは嫌だ。

あれが何を意味するのか理解などしたくない。
忘れてしまえばいい。

永遠に、きみのことも、僕のことも。

(忘れさせてくれ、全て……全て……)

もう二度と、苦しまないために。

VII・交錯 8

目を開けたコジロのすぐ真上にカリスの寝顔があった。
大木に身を預けるようにして眠っている彼女の膝の上に、コジロの頭は乗っている。

「……カリスマリア？」

囁くように呼びかけると、すぐに綺麗な瞳がコジロの姿を捉えた。

「ん……起きたのね。あんまりぐっすり眠ってるから、私もつられちゃった」

「いつのまに僕……」

「ここに着いて、倒れるように眠ったのよ。よほど疲れてるんだと思っ、そのまま……」

「そう……。へんな夢のせいで、ずっと眠れていなかったんだ。でも、そうか、眠ったんだな。……君のおかげかもしれない」
「え？」

口許で微笑して、コジロは瞼を閉じた。

絡み合って伸びる枝葉からのぞく夕焼けが、二人を所々オレンジ色に染める。

「そろそろ陽が落ちるから、暗くなる前に帰った方がいいわね」

日中あれほど上昇していた気温も夜の訪れと共に急激に低下していく。

風邪を引いてはいけないし、と、ひとり言のようにカリスは付け加える。

「そうだね」

相変わらず目を閉じたまま、コジロも相槌を打つ。

当然の如くその言葉に見合う動作を期待したカリスだったが、コジロは起き上がるどころかぴくりとも動かない。

当惑して、一度、コジロ、と呼んでみるが、

「うん」

返事をしたきり、また無言になった。

「……あの……」

意図が掴めないままとりあえず声を絞り出すが、どう続けて良いのか分からない。

結局また、そのまま沈黙するしかなくなる。

陽は加速するようにどんどん高度を下げ、夕焼けを反射した葉が燃えるような赤色に身を染め始めた。

カリスはしばらくじっとそのきれいな景色に見惚れる。

そうして辺りが夜の闇にすり替わろうとする頃。

突然、何の前触れもなくコジロが起き上がった。

驚くカリスの目の前で、コジロはうーんと両腕を伸ばす。

そして振り返り、さわやかな笑顔をカリスに向けた。

「ごめん。もう帰ろうか」

「え、あ、はいっ」

先に立ち上がったコジロがカリスに手を差し伸べた。

迷わずその手を取り、同じように立ち上がったカリスは礼を口に

する。

同時に、笑顔を浮かべているコジロの目がまた少しだけ細まった。

「さ、行くっ」

「あ……」

コジロが繋いだままのカリスの手を前方に促し、二人はゆっくりと、元来た道を歩き出す。

その動作はあまりに自然で、カリスに戸惑う暇さえ与えなかった。歩きながら少しずつ、“手を繋いでいる”という重大な事実を脳が認識し、脈拍の上がる鼓動を落ち着かせることですぐにカリスの頭はいっぱいになる。

「冷え込んできたな。寒くない？」

「うん……大丈夫」

寒さどころか汗が滲みそうなほど、繋がれた手を中心に火照っているのだ。

この緊張に気づかれないか、さらに鼓動は速くなるばかりだ。家まではあつという間だった。

いつもなら少々遠く感じられるアレクサンドレからの道のりも、この時ばかりは一瞬のうちに通り過ぎてしまった気がした。

パトとチャムによってすでに準備は整っていたものの、帰り着いて半時ほど経ってから夕食を取る。

胸の鼓動が治まらない内は、あの二人と顔を合わすのは不味いと考えたからだ。

とりわけ勘の働くチャムにコジロとの急接近がバレたりなどしたら、コジロの命さえ危ないかもしれない。

案の定、カリスは食事中、その背中にパトとチャムのこれでもか、という不穏な視線を感じていたが、どうやら眠れて元気を取り戻し

たらしいコジロの饒舌さが、それらを忘れさせてくれるほど楽しい一時を作り出してくれた。

ひとしきり笑い合って、食事を終え、カリスがいいと言うのも聞かずさらにコジロは片付けを手伝った。

そこまで広くもない厨房で二人は肩を並べ、分担し合って食器を洗う。

その間もコジロはずっと饒舌で、時々カリスをからかい笑わせた。この頃にはカリスの中にあつた緊張は完全に消え失せ、心地よさを感じるまでになっていた。

片付けも終わってしまうと、二人はハーブティを片手にまた談笑する。

楽しい笑い声は夜が更けるまで途切れなかった。

「もうこんなに遅いのね。寝なくちゃ。コジロ、今夜は眠れそう？」

椅子から立ち上がり、カリスが微笑む。

「そうだな。いい夢を見れるかもしれない」

カリスの動作を目で追い、少し見上げる格好で答える。

二人の柔らかい笑みがぶつかった。

「なら良かった。……じゃあ……おやすみなさい」

「……おやすみ」

じつと、コジロの切れ長の瞳がカリスを見詰めていた。

会話はきれいに締め括られたはずであるのに、視線は未だ強くカリスに絡み付いている。

言葉に出来ない空白の時間ときが流れていく。

「カリスミリア」

「は」

ぐっ、と、返事をするより早く、コジロの右手がカリスの腕を掴んだ。

心臓が機能停止に陥りそうなほどカリスは驚愕し、そのまま凍り付いてしまう。

躊躇いなく向けられるその瞳に吸い込まれていきそうになった。

どれくらい時が過ぎたのか、カリスにとっては長く、息の詰まるような沈黙の後、何か言いたげにコジロの瞳が揺れた。

しかしそれは最後まで音にならなかった。

微笑が浮かべられ、カリスの腕は自由になる。

「ごめん。なんでもない。……おやすみ、カリスミリア」

「……お、おや、すみ、なさい……」

完全な棒読みで繰り返し、両手足を同時に動かすようになるほど不自然な動きで回れ右をする。

そこからはどうやって部屋まで歩いたのかきちんと覚えていない。気付けばベッドの上だった。

「はぁ……」

うつ伏せに寝転がり、細く長く息を吐いた。

走り続ける鼓動も治まりそうにない。

「カリス？」

暗がりからふわりとパトが姿を現した。

VII・交錯9

「どうしたの？ 気分でも悪いの？」

カリスを覗き込み、心配そうに声を掛ける。

「パト、わたし……死んじゃうかもしれない……」

「……あのさ……そういうセリフはもっとこう……なんというか……まあ、普通は笑顔で言わないものだよね？」

呆れ顔で零すパトの言葉に、幸せそうな表情のカリスが笑った。暗がりの中でも紅潮した頬が見て取れるようだった。

コジロとの間に何があつたのかは知らないが、パトの心を不安で埋め尽くしてしまうには十分過ぎる反応である。

幸いなのはこの場にチャムが居ないこと 少し前にふらりと姿を消したきり、まだ帰って来ていない。

居合わせていたら間違いなく言い合いになっていた。

カリスは悪くない。それは分かっている。

出来るなら心のままに、コジロと一緒に居させてやりたいと思
う。

こんなにも幸せそうにカリスが笑うなら、妖精だろうと人間だろ
うと、関係ないとすら思えてくるのだ。

「なんでかな……」

「え？」

カリスの視線の高さに合わせられた瞳が潤んでいた。

掠れる声が、静まった空間に滑り落ちる。

「おれには分からない……なんで……」

吐き出しかけた思いはまた、喉元で押し止められる。

これまで疑問にさえ思わなかった、それは妖精の“常識”。

（妖精と人間は仲良くできないのかな。なんでおれたち人間を嫌ってんのかな。戦争はいやだ。けど、人間は……？）

ぐらり、と、心が傾く。

常識を常識と思えなくなりそんな自分に吐き気を覚えた。

眞実は、どこにある？

「パト……」

戸惑うカリスの呼び掛けにふと我に返ると。

そうして迷う事を詰責しているかのような虚ろな瞳にパトの心はどきりと脈打つ。

動揺を見透かされまいと瞬時に笑顔を作った。

「なんでもない。今日は疲れたから、おれももう寝るね」

そそくさと身を翻し去ろうとするパトをカリスが呼び止めた。

再度視線を戻し首を傾げる。

「あのね、一つだけ、聞いてもいい？」

「うん、何？」

「実は今日、とても恐ろしい怪物が庭にいたの……」

「っ！！」

一瞬にして緊張が走った。

(まさかバレちゃった!?)

冷や汗まで滲んでくる。

明かりが点いていなくて良かったと咄嗟とつに思った。

「ええと……か、怪物って、いったい……」

「パトは見えていないかもしれないけど、やっぱりそれに心当たりはないわよね。ゆらゆらしてて、大きくて、お化けみたいだったの。すごく怖かった」

「っだ、だいじょうぶだよ……昼間から出るお化けなんてあんまりいないし、きつと……きつと、自然現象、何かじゃない……?」

「自然現象?」

「うん!」

「……って……どんな?」

「あー……あっ、ほら、目の錯覚! 難しいこと分かんないけど以前チャムが言ってたんだ。えーと、光や空気や、うーんと、気温のびつみよくな関係で? 見えないものが見えたりもするんだって。うんうん、それじゃないのかなあ!? うん、それだ! 間違いない!」

一気にまくし立てた所為せいか、カリスの反応をすぐには得られなかった。じつとパトを見詰めている。

強引に結論付けたのは不味かったかと、焦りで表情が固くなつていくのを感じた。

(ていうかそもそもあれはおれじゃなくてチャムがやったことなの

に何でおれがこんな目に遭ってるわけ!? でなんでこういう時に限っていないんだよ馬鹿チャム~~~~ツ!! あああこのままじゃバレルよ、もうもたないよ、でもバレたらカリスとチャムの両方から責められるよ! どうするっおれ!?)

滝のような冷や汗が流れる中、チャムほど功名な言いくるめの術を持ち合わせていないパトはこの緊張感に耐え切れず、“白状”という二文字に手を伸ばしかけた。

しかしそれを掴むよりも早く小さな吐息が耳に届く。

はっとして見遣る先には、安堵の表情を浮かべているカリスがいた。

「なあんだ自然現象かあ。それならもう心配いらないわね」

「……………自然現象ばんざーい……………」

「え?」

「ううん、なんでもない。ひとりごと。あははっ」

きよとんとするカリスを横目にカラ笑いして、パトは内心、もう二度とチャムの策には乗るものと密かに決意するのだった。

「もう寝ようカリス。いい夢を見れますように」

「ん。おやすみなさい」

「おやすみ」

パトがカリスの額に軽く口付け、ふわりと自室へ戻って行く。暗闇に消える姿を見送って、カリスも目を閉じる。

本当にいい夢が見れそうだと布団に顔を埋めた。

VII・交錯10

それからかなりの時間が過ぎ去る。

静かな月夜だった。

窓から差し込む月明かりを浴びたカリスはすやすやと眠っている。

はずなのだが。

突如、ぱちり、と大きな瞳が見開かれた。

「全ッ然眠れない……!!」

声を落として呟き、身を起こす。

そのまま何となく窓枠の形に切り取られた月光を見詰めていたが、あまりの輝きに背後の窓を振り返ってそれを見上げた。

「キング月王……とてもきれい……」

魅入るように少し欠けた白銀の円まのを見詰め、そうしていながらまた、睡眠を妨害している張本人を思い起こす。

(コジロ、ちゃんと眠れたかしら……怖い夢見てないかな……)

いったん目を閉じるとすぐにコジロの顔が瞼の裏に現れ、カリスに甘い微笑みを向ける。

心地の良い声で笑い、話し、カリスの名を呼ぶ。

脳が記憶するコジロの一挙一動が走馬灯のように脳裏を駆け巡り続ける。

高ぶったままの心は、そうして全く睡眠を寄せ付けなかった。

欠伸あくび一つ漏れない、完璧な不眠状態に陥ってしまったのだ。
こういう時はいくら頑張っても目を閉じていても眠れないということを知っていたので、大きく息を吐き出したカリスは、妖しいほどに皓々とする光に誘われるように家を抜け出した。

夜になるとほとんど闇と化す鬱蒼うつせうとした森のただ中に、カリスの家は建てられている。

意図的ではないが家の上空に枝葉はなく、昏間なら陽光と青空が、夜なら月光と星空が綺麗に見渡せるようになっていた。

扉を出て数歩歩き、振り返って夜空を見上げてみる。

月王キングの姿は屋根に半分隠れて全体像を確認出来ない。

カリスはふと、これまで何度も勃発しては未解決のままになっている。“屋上テラスを作るべきか否か”の論争に思い至った。

勿論、反対するのはあの口の回る水妖精である。

相手が相手なだけに、カリスの惨敗はいつも戦う前から決定してしまっているのではあるが、しかし今、この情景を目前にして、あれはやはり断固として主張し続けるべきだと確信していた。

よく考えてみればチャムの反対理由はいつも同じだ。

カリスやパトに理解する隙を与えないよう故意に小難しい言葉を羅列する。

しかし冷静になって言葉の一つ一つを紐解いてみれば何のことはない。

つまりは危険だからと、そう言っているだけなのである。

（チャムもこんな風に夜空を見上げることはないのかしら？ これを見ていてあの反対ぶりなんだったらどうしようもないけど……今度、パトと作戦を練って連れ出して、夜空の下で話し合おうかな？）

言葉だけでは勝ち目のないカリスの、最後にして最高の武器となりそうである。

それでも苦戦は免れないだろうが全てはその先に待つ絶景のためだ。

(もしも、これがコジロだったら、きつと反対しないんだろうなあ)

いつの間にかカリスの意識はチャムからコジロへと切り替わり、こんな景色と一緒に見れたら……と、しばし一人妄想に浸る。

月明かりだけが照らす夜空の下、静まり返る空間には自分とコジロの二人だけ。

並んで座り、満天の星空を見上げ、楽しく会話を ……

と、そこでカリスは少々困惑する。

一体どんな会話をしたらいいのか？

そもそも自然な言葉が出てくるのかそれさえ危うい。

二人きりの時間を想像しただけで眩暈めまいがしそうになった。

“カリスミリア”

ぐつと、カリスの腕を掴んでそう呟いたコジロの姿が急に脳裏に蘇った。

真直ぐ向けられた瞳の中には、確かに何らかの意思があった。

そしてコジロはそれを言葉にしようとしていた。

あの時、告げられず、飲み込まれてしまったものは一体何であったのか……。

「はっ。何を考えてるのかリスミリア！ そんなことあるわけがないのにつ！ ……はああ。 ……私、どうしちゃったのかしら……」

しつこく居続ける妄想を掻き消し、視線を上空から前方へ移動させると、黒々と生い茂る森が目映る。

しかしそこに、どういふ偶然の連鎖か、枝葉の隙を縫うように――筋の光が恰も道標あたかみちしるべの如く森の奥へと伸びている。

（あの方向は……川辺）

凝視するカリスの視界の中で、断続的に何かきらりきらりと煌いた。

（精霊たち？ どうしたのかしら）

胸騒ぎのするまま森へ足を踏み入れ、月光を辿って奥へと進む。程無くして森が開け、目の前に現れたのは予想通り、精霊の多く棲むあの川辺だった。

水面に降り注ぐ光の中を、精霊は惑うように飛び交っている。

「……いったい何があったの？ 何をそんなに怯えて」

「やめる つー！」

突如、静寂を突き破るかの如く尖叫が木霊した。

はつとして視線を巡らせ声の主を探すが、光と闇の光度差の所為でまともに視力が働かない。

姿は見えなくとも、カリスにはその声がコジロのものだとすぐに判った。

無意識に込み上げかけた 「何故こんな真夜中に、こんな場所へ」というような疑問は、痛々しい声を前にして意味を失う。

ただ一心に思ったのは、助けなければ、ということ。

あの嵐の夜に、彼を見つけたあの時と同じように。理由のつけがたい直感として。

「やめ、てくれっ……ううっ……！」

苦痛に満ちた呻き声とともに、暗闇から現れた人影をカリスの目が捉える。

両手で自らの身体を抱き、俯きながら前進するコジロの足取りは、ふらついてはいるものの真直ぐ川辺に向かっている。

「僕はそんなこと望んでいない……僕の意思じゃ、ない……っ……やめろ……やめろ、やめろ……っ！」

水を目の前にして突然コジロは地に崩折れた。

「コジロッ……！」

全てを見届けるよりも早くカリスは駆け出していた。

膝を折り、頭を地に付け蹲すくるその身体は、肉眼でも認識できるほどに震えている。

自身を抱いだく指が腕に食い込んでいるのを、涙が滲みそうになりながら見詰めた。

「ううっ……ううう……っ……ぐう……っ」

「コジロ、どうしたの？ 苦しいの？ コジロ」

必死に問い掛けるが、返るのは荒々しい呼吸音だけ。声が聞こえていないのだろうか。

カリスは片手を伸ばし、震える身体にそっと触れる。

「っ……！」

刹那、びくりとコジロの身体が大きく揺れた。

今初めて自分以外の存在に気が付いたかのような、それは驚愕だったのだろう。彼の身体は決してカリスの手を拒まなかった。

背を撫でる穏やかな律動リズムに同調するように、暫くして震えは徐々に小さくなり、指に込められた力も緩んでいく。

その様子を瞳めにし、カリスがほっと息を吐いた時。さらり、と一束、コジロの髪が流れた。

視線を移したカリスの目と、髪の間隙から覗いたコジロの虚ろな目とが合わさる。

「……カ……リ……ス……」

掠れ声でコジロが名を呟いた。
「微かに、語尾が上ずった気がして、カリスは一つこくりと頷いてみせる。」

「大分落ち着いたわね……もう苦しくない……？」
「……なんで、ここ……」

会話が噛み合っていない。
カリスは苦笑を浮かべる。

「なんだか眠れなくて、外に出てみたら月の光が」
「カリス……？」
「え？ 何、よく聞こえない……」

言いつつ、さらに身を屈めて顔を近づけた所へ、すっと、しなやかな腕が伸びカリスの腕を掴んだ。
連続動作でゆっくりと身体を起こしたコジロは、カリスの腕を掴んでいた手ともう片方の手とを、同時にその背に回すと、まるで倒れ掛かるようにその肩へ顔を埋めた。

突然のことに一言も発せないカリスは、まず何が起きているのか必死で理解しようとした。

しかし、コジロの体温と重みが思考の邪魔をする。

「ッ……コ、ッ……コ、コジ、ロッ……あの……あの……」
「ごめん」

そう、謝罪が呟かれるのを耳にするのと同時に、またコジロが震えていることにカリスは気付いた。

そうして、カリスを抱いている両腕の力も、また少し増す。

「じゅめん……少しだけ……だから……」

ゆっくり、絞り出すようにして発された声は、硝子ガラスのような脆さを帯びていた。

抑圧された不安と巨大な恐怖が見え隠れする。

これは自分の知っているコジロだろうか、と、そんな疑念さえ生じさせるほど、コジロの声は弱弱しかったのだ。

触れ合う身体から伝わる震えがカリスの心までも揺るがせ、悲しくさせる。

そしてこのまま痛みを共有し、自分が泣く事でコジロが楽になればたらどんなにいいか、そう願わずにはいられない。

カリスは、零れそうになる涙を必死で堪えていた。

今自分は泣くべきではない。

そう思った。

(苦しいのはコジロ。泣きたいのもコジロ)

ふいに、カリスは自らの両手をコジロの震える背に回した。それこそ祈りを込めるように、ぎゅっと抱きしめる。

何が彼をここまで追い詰めるのか、コジロ自身の口から語られる以外にそれを知る術はない。

しかし肝心の事実を知り得るであろう記憶は、コジロの中に眠ったまま。

(……記憶を、取り戻すしかない)

意識の中からは排除出来ても、心と身体は忘れてなどいない。

眠りを邪魔するほどに、こうして苦しませるほどにそれはきつと強烈な出来事として、永遠に消えることはない。

(忘れたかった。覚えているのが辛すぎて、忘れたかった。全部、何もかもを)

ふと、胸に浮かんだ独白は一体誰のものだったのか。

急激に込み上げる感情が運ぶ涙を、強く唇を噛むことで再度押し止める。

その時、腕の中のコジロの震えが増す。

「……………オ……………」

空気を吐き出すように零れた咳きは、胸を切り裂きそうなほど悲しく不安に満ちている。

(泣かない)

(本当のコジロを取り戻すまで、絶対に)

それは生まれて初めてカリスが立てた、“誓い” だった。

VII・交錯12(前書き)

2010/7/16:本文を書き足しました。

嫌な気分の方は決まってここへ来る。

一族の生命の源である、水のあるところ。

たとえばそれは桶に溜まった雨水でも、コップに納まる一杯の水でも良い。癒しの方法は様々だが、水と共に在ることあで自然と心は安らぐのだ。

彼の場合、ストレスを溜めがちな性格上、そうした水溜まり程度の規模では十分な癒しは得られずにいた。

もっと圧倒的な、うなるような激流を欲する。全てを強引に奪い去ってくれる、巨大で冷ややかな荒波が、彼には一番の薬になった。

皓々と輝く月王キングの姿が大海原にくつきりと映り込む、爽やかな月夜。

風は遠慮がちにそよと波間を抜けて行くだけで、今宵の海は気味が悪いほどの穏やかさを見せていた。

(……静かすぎる)

宙で静止したまま、黒く佇たたずむ海面に視線を置いていたチャムは、表現のし難い衝動がじわじわ身体を突き動かそうとするのを察知して眉根を寄せる。

これ以上ストレスをうやむやに出来なくなっている。今の気分には“優しさ”とか“穏やかさ”というものは火に油を流し込むことに相当した。

“きれいごと”など見たくも聞きたくもない。
全て壊れてしまえばいい。

(滅茶苦茶に　この手で)

ぎゅっと両手を握り締めた、その時。

ドンツ、と海中で何かが破裂したかのような爆発音と共に、巨大な水柱が天を突いた。

轟音を響かせ、それはまるで意思を持つかのようにひたすら天を目指す。

かと思うと、突如百八十度方向を変え、急降下を始めた。

重力分速度を増し、唸りを上げ元なる海へと融合を果たす、その瞬前。

黒い水柱は着水とほぼ同時にチャムを呑み込んだ。

水柱に勝るとも劣らない高く跳ね上がった水しぶきが、衝撃の凄まじさを物語る。

チャムの心との共鳴^{シンクロ}。

水は彼の意のまま。

決して彼を傷付けない。

光のない真つ暗な海中を、チャムはただ穏やかに漂っていく。まるで自身も水の一部と化すように、微動だにせず、静かに、身をまかせる。

チャム……

……おかえり……

……チャム……

(ごめん。静かにしててくれないか)

心に届く声に、そう心で呟いて返す。

すると、さっと潮が引くように、声は遠のき、また静寂に包まれた。

(悪いな。精霊たち。……っ！)

ぐっ、と、足を掴まれたような感覚にチャムは眉を顰めた。

……………けて……………た、すけ、て……………

(……………僕から離れる！)

カチ、という音と共に、掴まれたような感覚と声は消える。彼自身が排除したのだ。

チャムは視線を動かし、月明かりでゆらゆらと揺れる海面を見上げる。

そして、くるりと身を翻すと海底へと潜り込んでいった。

海面近くは、精霊以外にも多くの声が彷徨っている。海に思いを遺していった、人間たちの“思念”だ。

波が穏やかな夜は異常に騒がしくなる。

だからチャムは、決まってより静かな海底を目指す。

だが、海底には、数こそ少ないが排除するのに時間のかかる、強い思念が存在することも確かだ。運が悪ければ捉まる、それを覚悟で潜らなければならなかった。

どれくらい降りたのか、海面を振り返るとそこにはもう光などなかった。

限りなく海底に近い位置でチャムは動きを止める。

ほつと息を吐き、目を閉じた。

静寂がその身を包み、極上の癒しを与えてくれる。

チャムは最近の出来事を思ってみる。いらいらの原因は一体、何だったか？

カリスが見合いを始めて数ヶ月。成功しそうな気配は全くない。本人は当然、とても辛そうだ。しかし、傍で見ているチャムにとってもパトにとっても、それは同じように辛いことだった。

(うまくいかないから、いらいらするんだ。見合いが、うまくいかないから……)

きっとそうに違いない。

いや、それ以外に何かがある？

(コジロ)

どきん、と、心臓が大きく脈を打つ。

あの、カリスが拾った人間の男。

本名は知らない。コジロという名はカリスが付けたのだ。

コジロがやって来てから何か少しずつ狂い始めている。

何か取り返しのつかない事になるような、そんな予感がチャムの頭を離れない。

“人間” という凶悪な種族と、やはりどうあっても関わるべきではなかったのだ。

（あの時……あの嵐の日、カリスを止められなかったのは、僕だ）
カリスの、何かに取り憑かれたような態度と、パトの真剣な眼差しに、ノーと言えなかった。
隙が出来てしまった。

（一連の災いはこの僕が招いたんだ……終わりにするのも、僕であるべきだ）

カリスのためを思うなら、少しでも早くに越したことはない。

「コジロを、こ　　っ!？」

ごぼっ、と、水泡が浮く程の衝撃が、突如チャムを襲った。

周りの水流だけが明らかにおかしい。
ぐるりとチャムを取り囲むように渦を巻いている。まるでチャムを引きずり込もうとしているかのようだ。

（っ　やめる!）

カチ、と、排除を試みてもびくともしない。強大な思念の塊だった。

「くそっ!」

思わず声にして舌打ちをする。

……………い……………

(僕から離れるー！)

再度、力チ、っと力を発動してみるが、やはり結果は同じだった。どつやら運悪く、捉まってしまった。

……………い……………い……………

(い？ 何だ？ たすける、じゃない？)

もがきながらチャムは首を捻^{ひね}る。大概の思念は救済を求める声か、恨み言のほず。

この声は一体、何を言っているのだろうか？

……………い……………い……………

思念は益々膨らみ、絡みつく。

これまで遭遇した中で、これほどまでに強い思念は初めてだった。

(まずい……………とられ　　っ！！)

頭の中を、ドンツ、と鈍い衝撃が襲った。

思念に進入を許してしまった。

というより、強引に押し入れられたという表現の方が正しい。

どうなってしまうのか、経験のないチャムには皆目見当もつかない。聞いた話では一生囚われたままになるのだそうだ。

(カ、リス……パト)

水流が、チャムを完全に呑み込んでいった。

* * *

……い……

……な、さい……

「ごめんなさい」

「オ」

荒れ狂う黒い波に飲み込まれていく、あれは

(まさか この思念)

「イルバート。私をゆるして」

(それが奴の、本当の名前……?)

……かなしい……

ほんとうは……ほんとうは

そして今、眼前に見ているものが真実だというなら。

(ここへ、そいつを呼んでやる。一緒にいたいなら、海の底へでも連れて行けばいい)

思念はざわめき、そして、歓喜に舞い上がる。

チャムの言葉を受け止めて、それは又、海へと還って行った。

(……連れて行けばいい。どこへでも)

取り戻した静寂の中、チャムは確信に満ちた瞳で海面方向を仰ぎ見る。

(二度とカリスの手の届かない所へ)

海の青とほぼ同化していた髪が、ゆらり、揺れた。

V I I I ・記憶 1

森の中の湖から帰って来たコジロとカリスは、二人、同じ部屋の中で眠った。

そばにいて欲しいと、コジロが言ったのだ。

カリスはこくと頷くと、コジロの手をぎゅっと握り締めて、先にベッドへ横たわったコジロをベッド脇から笑顔で見詰めた。

コジロは少し考えるような素振りで見つめていたが、どうやらカリスの態度は真剣そのものだと分かり、思わず笑みを零していた。突然笑ったコジロにカリスが驚いたように目を丸くする。

暫く笑い続けるコジロにカリスが問った。

「どうしたの、急に」

「いや、こうしていると、寝かしつけられてる子どもみたいだな、と
思ってる」

「うん……私、コジロが眠れるまでこうしてるから。ちゃんと眠れるように」

穢^{けが}れの無い、純粋な瞳が細められる。

コジロはカリスに対して、不思議なほど安らぎを感じていた。それこそ “子ども” に帰ってしまふかのような、カリスは何かを超越した存在のようにコジロには思えた。

(天使か……妖精か)

本当にそうだったものがあるなら、それはきっと、彼女のような存在なのだろう。

「ありがとう、カリスミリア」

眩くように言い、コジロは目を閉じた。
今日も眠れないことは分かっている。
目を閉じてしまうと現れる、得体の知れない恐怖と不安。

「おやすみなさい、コジロ……」

どんなに優しく、大きな安らぎがそこにあっても。
やはり完全には消し去れなかった。

体は何よりも眠りを欲しているが、それを掴もうとすると暗闇が邪魔をする。

その度にコジロは、必死にカリスの手の温もりを探した。

“現実” という、光を。

（ “ お前は、罪深き人間だ。幾度もその両手を血に染めてきた。お前の意思で、欲望のままに、殺戮を” ）

（ …… っち、がう……それは僕じゃない……僕の意味じゃないんだ……もう、やめてくれ……！ ）

（ “ お前自身さ。お前が作り出したもう一人のお前だ。必要だから作った。自分を守るために” ）

（ 必要なわけがないっ……！ いらない、そんなもの！ ）

（ “ 本当にいらぬのは、どっちか？ お前はもう分かっている筈だ。お前は二度と、血戦の欲望から逃れられないのさ” ）

「 っ……！ 」

はっと、勢いよく目を開く。

冷や汗が額いっぱいに噴出し、続けて体を起こした際に、幾筋も輪郭をなぞるように流れていく。

乱れた呼吸のまま、手で汗を拭おうとして、ふと気付いた。自分の手を強く握っているのは、カリスの手。彼女はすやすやと眠っている。

（ああ、そうだった）

一瞬でも記憶が混乱した、ということは、自分は少し眠っていたのだろう。

月明かりの位置がそれほど移動していないところを見ると、十五分程度だろうか。

夢を見る程の浅い眠りではある。だが、最近の寝付きの悪さを考えると、カリスという存在が纏う安心感は、相当大きかったと言えた。

（まただ……同じ夢）

繰り返し、何者かが耳元で囁く。

まるで自分が眠るのを待って、この体に乗っ取る機会を窺っているような、そんな恐怖がコジロを眠りから遠ざけている。

眠るのが、怖いのだ。

意識を途切れさせることが。

「ん……コ、ジロオ……」

「……カリス？」

起こしてしまったかと呼びかけてみるが、返答はなかった。

（寝言か……）

約束通り、しっかりと繋がれたままの手に視線を落とし、コジロは一度、きゅっと強く握り返す。

そこにあるのは、あまり力を入れ過ぎると簡単に壊れてしまいそうな、女の子の手。

(こんな小さな手に守らせてしまってるんだな、今の僕は……)

記憶を失い、訳の分からないものにただ苦しみ続ける今の自分は、助けられ、与えられるだけの、情けない人間だった。

命さえ危険なところを救われたのは幸福なことでもあり、同時に、このままではいけないということも、コジロは漸く^{まいつ}気づき始めていた。

自分は何かから逃げようとしている。

漠然と、そう思う。

(逃げていては駄目なんだ。立ち向かっていくべきだ……それは、分かっている！)

目を向けようとすると、心は千切れそうなほどに悲鳴を上げる。

その激痛に耐え得る自信が、自分にはない。

どんな恐ろしい現実が待っているのか、想像することさえ拒んでいるのだ。

知ってしまったら自分は、この先生きていけるのかどうか。

「……は」

思わず、嘲笑が漏れた。

馬鹿なことを、と、ぼつり零す。

(生きていけるかだって? ……この期に及んでも、僕は)

本当に、絶望の淵に立たされた人間は、その殆どがちらりとでも
“死” という、ある種逃げの選択肢が頭を過ぎるものだ、と、
仮定するなら、今の自分は単に淵から遙か遠い位置で、まだ見ぬ絶
望の谷に恐れ戦おのいでいるだけではないのかと、コジロは思う。

遠ければまだ幾つも回避の術があるのに、周りを見えなくしてしまっているのは他の何者でも、何事でもない。
自分自身。

「うーん……コジロオ……」

カリスがまた、うわ言の様にコジロの名を呼んだ。

その表情が突如、ふにやりと緩む。

「だあいすき」

「」

一体、どんな夢を見ているのか、ということは、どうでもいい事
だった。

その眩きがどんな意味を持っていても関係ない。

鼓動の早まりを覚えながら、コジロは確かに、純粹な喜びが湧き
上がっている事を実感する。

あれ程までに苦しかった思いが、薄らいでいくような気さえた。

(……僕がどんな人間でも、カリスなら)

何も変わらずに居てくれるのではないだろうか。

コジロはそつと、繋いでいた手を解き、カリスに体を寄せる。
そして上向いている方の頬へ優しく唇を押しやった。
そうして再度開かれた瞳に光が宿る。

(夜が明けたらあそこへ行こう。逃げるのはもう終わりだ)

コジロはカリスを見詰めた。

相変わらずすやすやと、あどけない表情で眠っている。

「……大丈夫だ」

眉を寄せ、不意に零れた咳きが、いつまでもコジロの頭の中を廻っていた。

V I I I ・ 記憶 2

朝、目覚めたら、ベッドの中だった。
慌てて、ぐるりと部屋を見渡すが、コジロはいない。

「どこへ……」

小鳥のさえずりや空気のおい、そして朝の光どれもが、まだ明けて間もないのだとカリスに伝える。

だから、いるはずなのだ、普通なら。

疲労と寝不足で、死んだように眠っていていいはずなのだ。

(コジロの身に、何か)

カリスの脳裏に、昨夜の苦悩に表情を歪めるコジロの姿が蘇る。
ひどく苦しそうで、見ているこちらが涙を堪えるのに必死になったほどである。そんなことがあったばかりなのに、不安にならないでいられる訳がない。

カリスはベッドを跳ね起き、部屋を出た。

階段を降り切った所で、朝食の準備をしていたのか、エプロン姿の帕特と出くわす。

「おはようカリス。寝不足？　すごい顔して」

「コジロがいなくなったの……！」

「　　んと……ごめん、話が見えないんだけど……」

「起きたらいなくなってたの！　コジロは今、すっごく悩んでて、苦しくて、だから何もなかったら今はまだ寝てるはずなの！」

「カリス、落ち着いて？　コーヒ―淹れようか？」

コジロからその名を聞いて以来、誰もがコーヒーをコーヒーと呼ぶようになっていた。

そしてそれに少なからず鎮静作用があることも、これまでの経験から学習済みだった。

コーヒー豆を砕いたものを入れた容器に手を伸ばしながら、パトはコジロの顔を思い浮かべる。

コジロも子どもではない。

辛いことを抱えているなら尚更、眠りが浅くなって、早朝から出かけてみたくなっても何らおかしくはないと思うのだが。

しかし、そんな発想など浮かびもしないのか、カリスの青ざめた顔が大きく横に振られる。

「そんなの飲んでる場合じゃないわ！ コジロに何かあったら

っ

「うーん。これは一つの可能性なんだけどね。一人で散歩に行ってるだけかもしれない、とは思わない？」

「ぜんっぜん思わない！！」

「あそ……」

思い込んでいる時のカリスに何を言っても無駄である。

どうしたものかと息を吐いた。

こんな時、チャムならもっと巧く言いくるめられるのに、と思いついて、ふと、視線を周囲に巡らせる。

「……そういえば、チャムもいない」

蚊の鳴くような小さな呟きを、カリスは聞き逃さなかった。

「まさか、チャムがコジロを……っ！？」

「偶然だよ」

「うっん、チャムはコジロをどうにかするつもりなのよ、だからこんな朝早くを狙って　！」

「いくら鬼チャムでも、おれたちは妖精だよ？　どんな酷いことするっていうの？」

「でも、しないって言い切れる？　現に、今、二人は同時にいないのよ？」

「だから偶然だって　」

「じゃあいい！！」

唐突に、声を張り上げて、カリスはパトを睨みつけた。

パトの笑顔が一瞬にして凍り付く。

「カリス……」

さすがに困惑して、次の言葉が見つからないでいると、カリスの声が震えた。

「何か、あつてからじゃ遅いのっ……！　コジロも、チャムも、ずつと変だから、不安でどうしようもなくてっ……！　っごめんなさい……」

いつもなら、大粒の涙と共に、もっと感情的に、マイナス方向へと急降下していくところだ。

しかし、その合図である涙の一粒も、そこにはない。別の意味で、パトは返す言葉を失くす。

（あり得ない、んだけど）

カリスの中で何が起きているのかは分からない。

けれど、はっきりしているのは、“何が”　カリスをそうさせ

るのか。

「……コジロのこと、そんなに心配？」

やっと、出てきた言葉がそれだった。

自分でも驚くほどに、優しい声音で語りかけていた。

「コジロのこと、本気で好きなんだね？」

一体どんな反応をするだろうかと興味湧くが、すぐにその考えは打ち消される。

カリスはほんの少しの躊躇ためらいも見せなかった。

ゆっくりと、首肯する。

「……考えるだけで、胸が苦しくなるの。ただ、コジロを助けたいだけよ」

「助けていただけ、ね」

カリスの気持ちは、もしかしたら……という、曖昧なままにやり過ぎたかったのが本音である。

妖精が人間に恋をする。それは禁忌なのだから。

（でも……コジロが、カリスを変えようとしてる。これは悪いことなんだろうか？）

コジロを拾ってからこれまでの日々、さまざまなこと一喜一憂するカリスを見てきた。

人間と接することでどんな副作用が生じるのか、恐ろしくもあった。

しかし、その人間と時間を共にしていたカリスは、この切羽詰っ

た状況において、泣いていない。

あの、マイナス思考にかけては筋金入りの、カリスが、だ。パトの中で、ずっと、否定も肯定も出来ない矛盾していた気持ち
が、初めて肯定へと傾く。

禁忌へと。

「……成長したね、カリス。強くなった」

「そう、かな……」

「泣かなくなった」

「それは……」

俄かに言い淀み、言葉を切る。
にわ

言おうか言うまいか迷っていた瞳は、ぐるっと辺りを一周した
だけで、元の位置に戻される。

「……一番泣きたいのはコジロなんだって、気付いたの。私が泣い
てちゃ、助けることなんて出来ないから」

「そうだね。うん、分かったよ。コジロを捜しに行こう」

「……一緒に行ってくれるの？」

「もちろん」

若葉を思わせる、さわやかなグリーンカラーのエプロンがひらりと揺れ、パトから椅子の背凭れへと抛り所を移す。

「さ、行くよ」

頼もしく向けられた瞳に、カリスは大きく頷いた。

V I I I ・記憶3

真つ先に向かったのはアレクサンドレの所だった。

以前、ここでコジロが穏やかに眠っていたのを思い出したからだ。

「アレクさん！　ここにコジロが来なかった！？　コジロ　ほら、私と一緒にここへ来た人間の男の人よ」

両手の長さの何十倍もあるうかという太い幹にしがみつぎ、必死に訴える。

混沌とする心情へ呼応するように、大きく広げた枝葉がギシギシと揺れた。

空は快晴。

薄く延びている雲も徐々に風に流され、ここ数日で、最も暑さを感じる一日になることを予感させる。

そんな初夏の日差しは日陰に入るとずい分和らぐ。

この時期の湿度は不快に感じる程高くないのだが、カリスの額にはすでに大粒の汗が噴き出していた。

動く度に流れる汗など全く意に介さない様子で、祈る様にアレクサンドレの幹へ額を押し当てた。

「アレクさん、お願い……！　あの人は　コジロは、私の大切な人なの。どうしても助けてあげたい。何でもいい、あなたの知っていることを教えて……！」

もしも、ここへコジロが来ているなら、アレクサンドレは彼を記憶している筈である。

一番新しいコジロの姿を見せてくれる、カリスはそう思った。

「!?」

一瞬、見慣れぬ表情のビジョンが現れ、咄嗟に体を離す。

「何、今の……」

「? 大丈夫?」

並々ならぬ様子にパトが心配げな顔を寄越した。

だが、問いかけには答えず、少々蒼くなつた顔を横に振り、

「コジロ、だつたのかな、今の人……」

呟く様に言った。

「どういうこと? 別の人の顔が見えたわけ?」

「ううん。……やっぱり、コジロだつたと思う……でも」

カリスは一度、右手で左腕をさすり、視線を落とす。

「すごく恐ろしい目をしてた……。コジロだなんてとても思えないくらい冷たい目……」

「……もしかして、それ……。コジロの記憶なんじゃないかな?」

「き、おく……?」

これが? まさか! ……一体、なぜここに?

さまざまな思いが交錯した瞳を真つ直ぐパトに向けたまま、カリスは発する言葉を見つけれなかった。

どういつことなのか見当もつかない。

「ここでコジロは眠つたんだよね? その時じゃないかな。きっと

過去の夢を見たんだよ。今は忘れてしまっている、真実を、ね」
「……じゃあ、えっと……」

だから、どういうことなのか？
整理し切れぬことで焦りばかりが募る。
再度、押し黙ってしまった。

「落ち着いて。大丈夫だから」

逆に現状も、すべきことも全て了解しているかのような冷静な口調でパトが言う。

そのまま、まずカリスに深呼吸をさせた。

「一番大事なのは、自分を見失わないことだよ、カリス。コジロを助けたんだよね？ だったら、どんなことにも目を背けちゃダメだ」

「……うん」

カリスには、コジロの抱える闇がどれ程のものなのか想像すら出ない。

パトに頷いてみせたものの、こんな状態で、生半可な気持ちで、しっかりと見届けられるのか自信がなかった。

一瞬、見えたのは、恐ろしい表情をした男。

今にも射殺されてしまいそうな、危険な目をした男。

あれは本当に、コジロだったのだろうか？ 信じたくはない。

争いの絶えない、“人間” という未知の種族の言わば黒い心中を覗くという行為は、少なくともカリスにとって恐怖でしかない。もしかすると、知らなければ良かったと後悔するような場面も、見ることになるかもしれないのだ。

「パト……私、どうしたら……やっぱり怖い……」

今の正直な気持ちだった。

カリスもれっきとした妖精である。

幼少から刷り込まれてきた凶悪な人間のイメージが、ここへ来てどんどんと肥大化している。

元々、負へ傾くことに関しては天性の才能を持ち合わせているのだから、募る不安はパトにも容易に想像出来た。

「人間の心なんて、やっぱり、覗くものじゃないんじゃないかしら……。でも、コジロは……ああ、分かんなくなってきた……！」

「ストップ！ そこまで！」

「え？」

口元に、パトの小さな掌　もとい、正しい妖精サイズの掌
が突き出され、カリスは面食らう。

「カリスさ、おれのことどういう風に見えるか分からないけど、
これでも色々悩むことあるんだ。ああでもない、こうでもない、じ
ゃあ答えは一体どれ？　っていう風にね。けど、結局最後には悩む
のを止めてる。何で分かる？」
「……………」

無言で首が横に振られた。

それを見届けて、パトは少しだけ表情を緩める。

「悩み続けても答えは見つからないって気付くからさ。悩むこと自
体を無駄だとはおれは思わない。ずっとそのまま頭の中で悩み続け
ることが無意味なんだ。だからカリス、まずは考える方向を変えて
みよう？　そうすればきっと、やらなきゃいけないことが見えてく

るよ」

「……パト……」

カリスが伏し目がちに呟いた。

まだ完全に不安は拭い去れない様だった。

パトは静かに息を吐き出す。

偶然にも、同じような状況を思い出していた。つい昨日のことだ。コジロに何らかの衝撃を与えて記憶を取り戻そうと、チャムが草人形を操ってコジロを脅か^{おど}そうとしたあの時。

パトは、一番傷付けてはならない人へ害の及んだことに、激しく自己嫌悪を感じていた。

もうこの作戦から離脱したいと投げ遣りなことを吐いていた。

もともとカリスのために行った作戦で、逆にカリスを傷付けた。

おまけにそれがバレて、カリスに酷く怒られてしまった。だから、これ以上嫌われたくないという気持ちも強かった。

そんなパトに、チャムはぶっきらぼうにこう言ったのだ。

「カリスに嫌われないことを考えるより、何がカリスにとって一番いいかを考えるだろう、いつものお前なら。へこんでる暇なんてないぞ」

そう、カリスとは初めから意見の食い違う方法だったが、どんなにカリスから非難されようとそれを信じてやっていたのだ。

チャムはきつといつでももそれを見失わない。

だからああやってブレずに、強くいられるのだ。

パトはあの時のやり取りを思い出し、自然と笑いが込み上げた。

急に笑い出すパトを不思議な顔で見詰めるのはカリスだ。

「ど、どうしたの？」

「あっ、ごめんごめん。ちょっと思い出しちゃって……おれも、同

じことチャムに言われたなあつてさー」

「チャムに？」

「うん。何を信じて行動するのか、それが答えだ、って、そういう趣旨の言葉。……カリスは、何を信じる？」

「……何を、信じる……？」

薄いブラウンの瞳が揺れた。

信じるもの。

コジロを助けるために、自分は何を信じるのか？

「私は……」

一つしかないではないか。

現在の^{いま}コジロを信じる。それだけ。

「分かったわ、パト。私は私を信じて、前を向いて行けばいいのね」

コジロを信じて行動する、そう決めた自分を信じる。

思った途端、心が軽くなった気がした。

「なんだ、こんな、簡単なことだったなんて……拍子抜けね」

「だよ。おれもチャムに言われて気付いた。今の気持ちを忘れなければ、もう迷うことはないよ。さあ、カリス」

「うん」

カリスは首肯して、アレクサンドレを振り返る。

相変わらず勇壮な姿で佇^{たたず}む彼は、二人を誘^{いそ}うかのように空を覆^おう

緑をざわめかせた。

風が、サアッと全てを撫^なでて行く。

「 コジロはここに来てる。記憶を、取り戻してるかもしれない」
「……うん」

声色の変化と共に空気が張り詰める。

風がパトに教えたのだろう。微かな残り香。

カリスは再度、アレクサンドレの幹へ手を触れ、額を当てた。

「！」

コジロの記憶が、映像として頭の中に流れ込む。

唇を引き結ぶカリスを横目に、パトもコジロの世界へ入り込んだ。

「！」

一瞬にして、何故カリスがあれ程まで戸惑いを見せたのか、納得した。

目の前にあるのは、あの、優しく、紳士的なコジロからは想像も出来ない、凄惨な情景だったのだ。

V I I I ・記憶 4

一番記憶に古いのは、どこまでも続く深緑の大地を、自分の背丈よりも遥か高い位置で眺めたあの景色。

「これが我が国だ、息子よ。どうだ、良い眺めだろう?」

「うん! スツゴくきれいだよ! 父さんもつと高あーくして!」

「何だ、お前はちつとも景色を見ておらん?」

「そんなコトないよ、ちゃんと見てるよ! でも、もあつと高いトコで見たいだけ! ねえいいでしょ?」

「しようがない、ホオラ! 高い、高い!」

「キヤーツ! すごい! 高あーい! キレーイ!」

父は肩車から更に自慢の両腕で僕を担ぎ上げ、拳句にぐるぐると容赦のない旋回を始めた。

まだ幼かった僕には、ただそれが楽しくて仕方がなかったが、下手をすれば父が僕を振り落としかねないと見てとったのが、周囲の人間がやけに慌てふためいていたのを覚えている。

半ば強制的にこの遊びを終了させられた後、父と僕は改めて丘の上からの絶景に時間を費やした。

「父さん、あれ何? 動物がいる」

「おお、野生の馬だな。あれには中々出会えぬ。ついておるぞ」

「しかも親子だね。大きいのと、小さいの。あ! トリドリ鳥トリドリだ! きれーい」

「動物は好きか?」

「うん! 大好き!」

丘の上からの景色は見晴らしが良く、国土の七割を占める森も、

位置を変えれば全てが見渡せた。

父の意向で自然環境を第一とするこの国は、物質的には決して豊かとは言い難かったが、人々はこの大自然同様、大らかで、笑顔の絶えない、幸福な日々を過ごしていた。

僕は他の国を知らない。だから、これが当たり前前の生活だと思っていた。

「ここから僕の学校が見えるよ！ ほら、あそこ」

「本当だな。学校はどうだ？ 楽しいか？」

「うん、楽しいけど、勉強はちよつとつまんない」

「んん？ 勉強が嫌いなのか？」

「んん、あんまり……。僕、運動の時間がいちばん好き」

「はあ。困ったやつだ。勉強も大事な人生勉強だ。嫌いだからと言って簡単に諦めるなよ。第一、世の中には、学校に行きたくても、勉強したくても出来ない子だっているのだ。その点、お前は幸せだぞ」

「なんで、学校に行けないの？」

「さまざまな理由でな。貧しかったり、体が不自由だったり、行きたくても行けない子は、たくさんいる」

「ふーん……。そっか。わかった」

父の言っていることを、本当の意味で理解していたかは今となっては怪しい。

ただ、いつだって父の言葉は、何故か僕の心に直に届いた。どこまでも尊敬する父親だったのだ。

それから僕は、町並みを見渡しながら、あそこは誰々の家で、こっちは誰々の家、とかいうのを延々父に話し続けた。父は飽きもせず、こやかに相槌を打ってくれていた。

そうして話に一段落着いた時、僕の両肩に父の大きくて厚い手が、ぼん、と置かれる。

「息子よ。今見ているこの町並みと美しい自然、よくその目に焼き付けておけ。俺はこの国を誇りに思い、心から愛し、護つて来た。それはこれからも変わらぬ。全力を尽くして護る覚悟だ。だからお前にも、それを分かかって欲しい。次にこの国を護るのは、イルバト、お前だ」

「……僕が、護るの？」

「そうだ。お前の大好きな、動物も、森も、学校も、友達も、全てお前が護るのだ。いいな？」

「……うん……！」

いつになく、父のその言葉に含まれる重圧を感じ取ったのかもしれない。

僕は、しっかりと頷いていた。

「よし！ それでこそ俺の息子だ！ どれ、高い高いしてやろう！」

「うんっ！ キャーツ！ アハハハハッ」

「国王！！ そんな高速で王子を振り回してはいけません っ！」

「構わん！」

「キャーツ！ 八八ハッ！」

ふと見せた父の真剣な表情と言葉は、今でも鮮明に覚えている。だが、よく考えればどこか曖昧で、幼い子どもに向けて言う科白では到底ない。

何故僕が護らなければいけないのか、後継者を匂わせるキーワードの一つもそこにはなかったのだ。

僕の返事は実感に基づいた意志表示ではなかった。ただ単に、そうすることで父が喜んでくれると分かっていたからかもしれない。しかし、この時父が託したかった思いを、僕は後に痛感すること

になる。

父の言った“覚悟”という言葉が、別の意味での決意だった
と思ひ知るのだ。

V I I I ・ 記憶 5

翌日から、父は城を留守にした。

一国の主ともなれば、長期での不在は珍しいことではない。

だが、城内の何やら異様な緊迫感と高揚感が、僕たち幼い兄弟の不安をも駆り立てていた。

何かが起きている。

しかも、とてつもなく、不吉な何かが。

「父さん、だいじょうぶかな」

「！」

城の最上階、周囲をぐるりと見渡せる見張り台の一角に、一つ下の弟と並んで座っていた時だ。

突如、弟がぼつり、呟いた。

「心配だな、父さんのこと……」

「……何のコト？ 大丈夫って、何で心配する必要があるの？」

「だって……ヘンだよ。みんな」

「も、もともと、ヘンじゃないか……ハハ」

「ちがう。そうじゃない。なんていうか……気持ちわるい」

「……気のせいだよ。父さんは大丈夫だし、何も変わらない。いつもと一緒に……！」

「……………」

弟はまだ何か言いたそうに眉間に皺を寄せていた。だが、暗に僕がそれを許さなかった。

まともに話せば何かが崩れる。

僕は弟以上にそんな恐怖感でいっぱいだったのだ。

気持ち悪い、と表現されたそれは、悪い予感に他ならない。
そしてその予感は、父がにかけて一週間目、最悪の事態としての
中した。

「てっ 敵襲ーッ！！ 敵襲ーッ！！」

緊急事態を知らせる鐘音が鳴り響き、夜明け前の城は騒然となつ
た。

およそ戦などとは無縁だったこの地に育ち、のどか長閑な自然と戯れる
日々^{へきれき}にいた僕たち兄弟にとって、それは晴天の霹靂^{へきれき}だった。
何が起きたのか、全く分からなかった。

「イル！ リク！ こっちへ！ 早く！」

母が、着の身着のまま、蒼白な顔で駆け寄り、僕たちの腕を掴ん
だ。
傍には、引きずられるような格好で、寝ぼけ眼まかの三番目の弟がい
た。

母は僕たち三人を部屋の隅に座り込ませ、息を押し殺す。

「ウッ………！」

「母さん！ 大丈夫!？」

「シッ！ 大きな声を出さないで。母さんなら大丈夫よ………」
「でも………」

母はこの時、四番目の弟を身籠^{みしも}っていた。

お腹はすでに大きく、無理の出来ない身体で走ってここへ来たの

だろう。

大丈夫と言いつつ、みるみる内に顔色は真っ白になり、お腹を押さえて呻き出した。

「ウ、ウウウツ　　！！」

「母さん！！　どうしたの！？　苦しいの！？」

「死んじゃヤダ！！　わあああーんっ」

あまりの恐ろしさに僕はパニックになった。

泣き出した次男のリクフェルドにつられるようにして、三男のオージンも火が点いた様に泣き出した。

「な、いて、は、だめ、よ……！！」

すでに僕も泣きそうになっていた。

だが、小さくも力強い母の声に、僕は我に返る。

「か、あさ、ん、だいじょ、ぶ……！！」

苦しげな表情が歪み、母は無理に笑おうとして、失敗したような微妙な表情になっていた。

だが、僕にはそれで十分だった。

『　お前が、護るのだ　』

蘇る、父の言葉。

「ウン！　わかった！」

僕は第二人を泣き止ませ、言った。

「リク！ お前はここで母さんとジンをまもるんだ！ 僕はジイちゃん呼んでくるから！」

「！」

言い終わるが早いか、僕は部屋を飛び出した。

そのときの廊下の様子は、無我夢中だったからよく覚えていない。ただ広く長い廊下を必死に走り、ふと、窓の外を覗いた。

そこには城中の衛兵たちが武装して集まり、城門を取り囲んでいた。

何が起きようとしているのか。

僕は足を止め、釘付けになった。

ぞくり、と冷たいものが背筋を流れ、気が付けばがたがたと震えが止まらなくなっていた。

その時だ。

「イルバート！ こんなところで何をしておる！？」

「ッ！」

聞き慣れた声の主は、城医である、通称ジイちゃんだった。

普段は愛嬌のある皺しわくちやの顔が、その時は厳しく張り詰めたものになっていた。

「ジ、イチャ……っ母さんが……母さんが、たいへんなんだ……っ！ すっごく苦しそうなんだ……ったすけて……っ！」

「分かっておる。嫌な予感がしてな、わしも王妃の部屋に向かう途中なんじゃ。お前の部屋か？」

「ん……ッ！ ウンッ！……ウンッ！」

「泣くな。お前はエライ。よく一人でわしを捜しに来たな。母さん

は大丈夫だ。さあ、急ごう！」
「ひつく……っ……ウンツ……！」

信頼できる大人の存在が、僕の緊張の糸を切ったのだろう。とめどなく涙が溢れた。

部屋に戻ってみると、母は大量に出血しており、予想以上に危機的状況だったが、ジイちゃんと一緒に駆けつけた助手と共に、冷静に、てきぱきと処置を施していった。

僕が意外だったのは、弟たちだ。

母のこんな姿を目の前にしても、歯をくいしばって涙を堪え、僕たちの到着を待っていた。

僕は慌てて涙を拭った。

自分が泣いていては駄目だと、咄嗟に思った。

「兄ちゃん」
「！」

目が合った途端、リクフェルドとオージンが、がしつと僕にしがみ付いてきた。

その身体はぶるぶると震えていた。

「リクも、ジンも、えらかったね……。お前たちがまもってくれたから、母さんはもうだいじょうぶだよ……。！」

「うえ……。っわああああん！」

二人は泣きに泣いた。

本当は怖くて、心細くて、仕方がなかったに違いない。

今度は止めることはせず、ただ二人をしっかりと抱きとめていた。

「お前たちは、僕がまもってやる……。！」

大好きな人たちを、自分の手で護る。

この時僕は、父の言葉を胸に、そう固く誓った。

危険な状態だった母は、ジイちゃんの的確な処置のおかげで一命を取り留めた。

そして同時に、新しい命も無事誕生した。

敵襲騒ぎはいつの間にか沈静化し、城の中もほぼ無傷だった。

一体何がどうしたのか、敵襲とは何だったのか、訳の分からないまま聞かされた最悪の事態は、父の失踪だった。

敵国による監禁の後、失踪したとだけ、伝えられた。

父が生きているのか死んでいるのか、それすら知る術はなかった。

事実はどうあれ、それ以降、柱を失った僕の国は、近隣諸国のかっこうの標的になった。

もともと大きな武力を備えていなかったため、間もなく、流血に染まり続ける戦場となり、あれ程までに父が護って来た美しい大地は、いつしか草の根も生えぬ荒野へと変わり果てていた。

こうして、穏やかな生活は一変し、僕たちは殺し合いを日課とする日々を生きることになったのだ。

V I I I ・記憶 6

あれはいつ頃だったか。

もう十数年もさまざまな国と戦って、僕たちの国も立派な軍事国家に変貌を遂げていた、ある日。

父を陥れた宿敵国と激しくやり合った。

「敵は国王の仇！ 一切の手加減はいらない！」

「オオオオオオオツ！！」

大人たちの中にあつて、少しも引けをとらぬ程までに上達した剣術の腕を買われ、僕は自ら最前列の隊を指揮し、数々の勝利に貢献した。

その原動力となっていたのは、ただただ憎悪の念である。

大好きな父を奪い、大好きな人たちの笑顔と平穩を奪った、あの国への。

「許さない！ 絶対に……逃がすものか！！」

憎い

憎い！！

否応なく込み上げる怒りにまかせ、無我夢中で敵を薙いだ。

本当に容赦はしなかった。

大将を取らねば父の消息は何一つ分からないままになるのだ。

(目前の敵は一人残らず斬らねばならない！)

「ウァアアアアアッ！ 父の、仇！！」

この時からだ。

戦いの途中で、意識が途切れるようになったのは。

「…………ハッ！ ここは！？」

目が覚めると、必ず自室にいる。

時にはベッドに寝転がっていたこともあった。
しかも、

「……………んだ、コレッ……………！！」

両手には誰とも知れぬ血液がこびり付き、全身に返り血を浴びた
ままの状態で、目を覚ます。

それは毎回尋常でない血の量なのだ。
いつものように防衛目的の戦をしていたのが、まるで殺戮を行っ
た後のような、あり得ぬ姿がそこにはあった。

そんな自分を初めて鏡で見た時には、見慣れていた筈の血液を見
て、思いつきり吐いてしまった。

意識のない間は、当然記憶もされない。

僕には謎だけが残った。

なぜ意識を失うのか。そして意識を失っている間、自分は何をしているのか。

こんな事が続くようになり、僕は周囲に探りを入れ始めた。

誰かが、何かを知っていると思ったからだ。

だが、周囲の者はただ一様に首を横に振るだけで答えてはくれなかった。

何かを知っている素振りが見え隠れするのに、とても歯痒かった。

真実を知りたい。

僕は一体何をしている？

僕に何が起きているのだ？

確かに僕を追い詰めていたこの奇怪な出来事の答えは、ほどなく、衝撃的な事実でもって伝えられた。

それは、ある何気ない日常。

新たに宣戦布告してきた敵国との開戦を前に、作戦会議と称して自らの小隊を召集した時だ。

僕は開始時間を確認すると点呼をとらせた。

そこに、欠員がいた。

「全員集合致しました」

「待て。一人足りないな。新入りのロンはどうした？」

「！」

一瞬にして場の空気が凍り付いた。

誰もが視線をばらばらに、押し黙る。

「どうした？ なぜ黙る？」

「……い、いえ。全員、集合しております」
「お前……いや、お前たち全員か。無断で欠席したロンを庇^{かば}ってるのか？ 理由次第では許そう。僕もそこまで鬼じゃない。ただ、敵が目の前に迫っている今、もっと気を引き締めていかなければ」
「……ンタが……」
「ん？ 何か言ったか？」
「ッ もう、我慢の限界だ!!」
「！」

一人の新人りが立ち上がった。

思い切りつり上がった眼は、真っ直ぐ僕を射抜いていた。

「こんなの変だ！ なんで皆本当の事を黙ってるんだ！ あいつは

……ロンはっ……!!」

「おい、止めろっ！ それ以上言うな！」

「止めない！ あいつは、死んだんだ！」

「!!……ちょっと、待て。そんなはずはない……この隊から犠牲者は一人も出ていないはずだ。一体どういうことだ……？」

「それはこっちの科^{せりふ}白だ！ ロンは……ロンは……っ」

「誰かそいつを止めろ！」

「っあんたに殺されたんだからな!!」

「!？」

「馬鹿めっ!! イルバート、ありゃあいつの戯^{たわ}言^{ごん}だ。昨晚^{きのう}の宴会^{わんかい}で飲み過ぎたんだ」

気にするな、とフォローしたのは、副隊長だった。

彼は僕よりもずっと年上で、普段から僕を名前で呼んでいた。

だが、隊員の前で、“隊長”と呼ばなかったのは、この時が初めてだった。

仲間に口を塞がれた告発者を見詰め、僕は震える両手をぎゅっと

握る。

「昨日の酒が、今も残ってるだって？ それこそ戯言だな、副隊長」
「……………」

部屋の明かりが、接触悪そうに二、三度点滅する。

これで、漸く分かった気がした。

戦場で意識を失った後の自分が、どんなに罪深いことをしているかに。

「手を、解いてやれ」

「でも……………」

「解いてやれ」

「……………は、はい……………」

ぷはっ、と、勢いよく呼吸をし、新入りは喉元を手で押さえた。
そのまま苦しそうに嗚咽おえつを漏らし始める。

「っっ…………っっ…………っく……………！ ロンは！ っっ……………隊長を尊
敬してるって！ っく……………いつも言ってたのに！！ ……っ何でな
んですか！！ 何で！！」
「……………」

「ひっく…………っっ……………俺には分かんないですよ……………何であ
いっ……………ひっく……………っ殺されなきゃいけないんだっ……………！！ あ
ああ……………！！」

僕は、一言も、返す言葉が見つからなかった。

僕がロンを 隊員を殺した？

その事実さえ、まだ受け止められずにいた。

当然だ。

自分にはその記憶の一欠けらもありはしないのだ。
全てがこいつらの演技じゃないのか、とすら思えていた。
だがそれは僕の勝手な希望に過ぎない。
これは紛れもない現実なのだ。

僕の代わりに副隊長が全員を解散させた後。

彼は僕の肩を優しく掴み、言った。

「……口止めしてたのは、俺だ」

「！ 何で……」

「あいつらは皆、お前を信じたがってる。あの新人りだってそうだ……だからこそその告発だったんだろうよ。だから、本当に、気にしないでいい」

「……そんなこと……出来るわけじゃないじゃないか。僕がロンを殺したなんて……！ 頭の中がぐちゃぐちゃだ」

「……。お前、人が変わっちゃまうんだ、戦場で。敵も味方も、見境なく斬っていく。ロンは確かに異常なほどお前に憧れてたからな。その時も必死にお前の後を追ってたんだ。そこで、お前は奴を殺^やちまった」

「……っ 違う……僕がそんなこと……ありえない！ 僕じゃない！」

「ああ……あれはお前じゃない。お前だけど、別人みてえだった」
「……っ」

それ以上、何を聞いても、僕には慰めにしか聞こえなかった。

副隊長が、皆が、僕を庇ってくれていたのだ。

しかし現実はずっと残酷だった。

僕がロンを殺した。それは事実。

その衝撃と怒りは全て自責の念へと転じていった。

それ以来、僕は部屋に閉じこもり、戦場へ足を踏み入れることは一切なくなった。

剣を握らなくなった僕は、ただの役立たずでしかない。間もなく、隊長の職務を剥奪された。

部屋の中という狭い空間を自分の生きるスペースとし、人との関わりもほぼ絶った。

何もかもに嫌気がさしていた。

仲間を殺したというのに裁かれない自分は、跡継ぎだから？
理不尽な思いがまた自暴自棄に走らせる。

一体なんなのだ。

自分は何のために生きている？

自由になりたい

いつしか、僕は本当に、“別人” になってしまっていた。

V I I I ・ 記憶 7

引きこもりがちになった僕に、周囲の人間は全く寄り付かなくな
った。

心は冷え切り、正常な思考は働くことを止め、全てを終わらせて
しまいたい衝動が突き上げてくることすら無くなった。

あの頃の僕は、完全に “無” の中に居た。

「あの……失礼、します……」

ギィ、と、ドアの開く音に続いて、か細い女の声が耳に届く。

「イルバート様……お、お食事の、お時間でございます……」

女はドアの前から一步も動かず、震える声を必死に発声する。

僕も窓際から外を見詰める姿勢のまま、振り返りもしなかった。

「あの……ネルソン様が……一緒に、と……」

「き、今日は……どうしても、と、ネルソン様が言っただけ

……その……」

女は紡ぐ言葉を忘れたように黙した。

僕もひたすら無言を貫く。

ただ、ただ、面倒くさかった。

ネルソンというのは、国王である父の右腕であり、僕たち兄弟の
リーダー的世話役でもあった。

父の信頼は相当なもので、それを間近に見ていた僕も自然と尊敬の念を持って接するようになっていた。

だが、それも昔の話だ。

「イルバート様……どうか、皆さんと一緒に……　　ッ！　す、すみませんっ！　お許し下さい！」

「……………」

いきなり直角に腰を折り、必死に謝罪を述べる姿を、僕は瞳に映した。

顔だけを捻り、女を見た。ただそれだけの動作に対して、異常なまでの反応。

女は完全に僕を恐れている。

「ネ、ネ、ネルソン様のつ……申し付けなのでございますっ……！」

お、お許し、ください、い」

「……嫌だ」

「！　そ、そ、そっ……………」

「勘違いするな。アンタのことなんてどうでもいい。今はネルソンに対してだ」

「　　ッ……………はい」

女の身体が目に見えるほどに震えている。

(いらいらする)

僕はゆっくりとした動作で身体を女の方へ向けると、そのまま一歩を踏み出す。

硬質な靴の音が徐々に女へ近付き、目の前で停止した。

間を置かず、僕は女の左肩を掴んで力いっぱい押し上げると、そ

の背中を扉に勢いよく貼り付けた。

「っ……！」

「……消えてくれる？ 目障りだ」

「」

すでに血の気の引ききった白い顔の横で、僕は両開きのドアの片方を開ける。

「出て行け」

言うのと同時に女をそこへ押しやり、涙目になっている女の目の前で扉を閉めた。

その後のことは、何も知らない。

気が付けばその女は辞めていた。

こうして、何もかもに苛立つ日々を持って余っていた僕に、あの出会いが訪れる。

世話係としての新しい女を、ネルソンはすぐに連れて来た。

何か狙いでもあるのだろうか。僕にとってはひたすら無意味なことでしかなかった。

女は一人で部屋までやって来て、僕と対峙した。

そこにどれだけの怯えが潜んでいるか測ろうと瞳を覗いた瞬間に、僕自身が意表を突かれた。

女は、無表情だった。

すぐにはどんな感情でいるのか読み取れないほどに。

「私は」

突如、無音の空間にこだました声は、はっきりと僕の耳に届く。大きくも、小さくもない声量。

「私は何も望みません。あなたのためでも、両親のためでも、周囲の人間のためでもない。私自身のためにここにいます。ただそれだけです」

無感情に女は言い放った。

これから仕えようとする主に向かって、初対面で、宣言した。

自分は誰の命令を受けることも、何かに拘束されているわけでもない。自分の意思で動く、自由の身であると。

感情の見えない声色に上手く隠された真の意味を、僕はなぜかすぐに読み取っていた。

じわり、不思議な感覚が胸に広がる。

「ふうん」

興味深かった。

現実にはそんな自由などどこにもないのに、口先だけで強がるのはみっともないことだ。

宣言してみたところで何が変わるわけでもない。

(無駄なこと)

そのうち現実を 不自由さを痛感するだろうと当然のように思った。

そして泣いて、悔しがって、絶望する。

自分と同じように。

だが、それから一ヶ月経っても、三月が経っても女は何も変わらなかった。

相変わらず無感情に、ロボットのようになり、淡々と自らのやるべきことをやった。

「疲れるよ。あんたといると」

ある時、僕は思わず呟く。

女が平然とこの不自由な環境に身を置ける事実が腹立たしかった。僕が自由に出来る筈の女が、逆に僕を不自由に行っている気さえした。

僕と同じ苦しみに苛まれてこそ正しいのに　なぜ。

「苦痛だ。存在そのものが。抹殺してしまいたいくらい鬱陶しい」

女に背を向けたまま、僕はとうとう口火を切った。

これが終焉の合図。

どんな反応を寄越すのか、楽しみですらあった。

しかし反応は思ったよりも呆気ない。

少しの静寂のあと、硬質な靴音が扉の方へ移動した。

無感情なその女に、相応しいと言えはその通りの行為かもしれないと妙に納得して、彼女が部屋を出て行く直前のタイミングを狙い振り返った。

いつものように、数秒後には無人となる、その空間に安堵を求めた。

「……………」

「……………何でしょうか？」

これまで、僕の我儘で、たくさんの人間を翻弄してきた。

それだけが、僕に残された唯一の“自由”だったからだ。

そうやって僕は、僕自身の存在価値を、存在の意義を、そこに見

出し、頼っていた。

そしてそれは永遠に続くのだと信じて疑わなかった。

でも、初めて僕はそれを奪われた。

彼女はそこに “居た” 。

「……出て行かないのか？」

「なぜでしょうか？」

「……泣かないのか？」

「必要がありません」

「……愛想を尽かした、人権を侵害された……泣いて、喚いて、すぐにここを辞めていくんだ。……中には物を投げつけてくる奴もいた。ナイフを向けてくる奴も」

「仰っている意味が分かりません」

「変わってるな」

「……あなたと会話が成立するほどには、まともだと思いますが」

「ああ、そうか」

荒野からの乾いた風が、彼女の髪を揺らす様を瞳に映した。

「僕と（ん）の（な）会話を基準にする奴は、まともじゃない」

彼女はじつと僕の方を見ていたが、しばらくして少しだけ肩をすくめてみせる。

「……どちらにしる私には関係のないことです。誰かのために一喜一憂するほど可愛い作りにはなっていないようなので」

「それは “嘘” だろう」

「あなたが、ここを辞めると仰るなら、そうします。いつでも、私の意思で、そうします」

必要以上にきつぱりと言い放つ。

どんな状況下であっても自分は自由なのだと、強がることを忘れない。

「させないさ。せめて、如何にあんたの環境が不自由なのか、知らしめるまではね」

「……………」

彼女は何も答えない。

ただ真直ぐ僕を見ていた。

だがこの時、僕にはそれまで分からなかったものが、手に取るように分かるような気がしていた。

彼女と僕はあまりにも似ているのだと、漸く気付いたのだ。

押し殺された感情が棘とげをもつ時の痛みや、哀しみを。

心の奥の奥の一番深い場所に抱える、表現のしようのない、どす黒い部分も。

自由になりたいと、渴望して止まない感情があることも。

なにもかもが、愛しいほどに。

何があつてここへやって来たのかは分からない。これまでも、どのように侍女が選ばれているのか僕は何一つ知らないのだ。

けれど、もうそんなことはどうでも良かった。

不思議と込み上げる高揚感がじわじわと僕を飲み込んで行くのが分かった。

「……………アンタのなまえ、訊いてなかった」

「お教えするほどの名でもございません。……………その内、去る身ですので」

「誰が許すと？」

不遜な態度で、僕は言う。

「辞めさせない」

静寂に包まれた空間に、思いの外響き渡っていく。

「辞めさせない」

「……………」

繰り返した僕の口元へ視線を寄せ、思案深げに黙っていた彼女の瞳が、ついと僕に向かう軌道から外された。

「……………オーロラ、です。私の名前は、オーロラ」

告げられた名は、珍しく何らかの感情を含む声色に震えたようだった。

ふ、と知らず笑んで、僕はその名を繰り返す。

「オーロラ」

二人が愛し合うのに時間はかからなかった。

同じ思いを共有し、慰め合い、励まし合う　僕にとってこの現

実の中、初めて得た癒しだった。

ずっと寂しさを抱えていた。理解者が欲しかった。誰かの温もりが欲しかった。

そういうことを、ただ素直に打ち明けられるという安堵感を、僕は、胸の詰まるような懐かしさと共に享受した。

何もなくてもいい。きみさえ、居てくれれば。

……………失った“幸せ”を、取り戻してくれたオーロラさえいれ

ば、それで良かったのだ。

ネルソンはどうやら、後継者としての僕の行く末を非常に案じていたらしい。

初めこそ皆と一緒に食事をしようだの、少し外へ出て散歩してみないかだのと、僕から言わせれば安易な方法で切り開こうと努力していたようだ。

だが、終に^{ついに}しびれを切らしたのか、彼は荒っぽい手段に踏み切った。

ネルソンの“魔の手”が、とうとう彼女に及んだのだ。

オーロラの態度の変化。故意に僕を避けるような素振り。

意味の分からない状況に僕は遠慮なく怒りをぶつけるが、それでも彼女は頑なに口を閉ざした。

それら全てがネルソンの仕業だと確信したのは、二人が密かに話しているのを偶然見かけたからだ。

オーロラと二人になった時、僕は「どうということだ？」と詰りめ寄った。

「……どう、と、言われましても」

「そんなしゃべり方をするな！」

「……そんなに、大きな声出さないで」

諫めるような口調でオーロラは返した。

自分の子ども染みた発言を認識しながら、僕は一言の謝罪も口に出来なかった。

今ならば明らかにおかしいと分かる彼女の落ち着き払った態度を、疑う余裕すらなかった。

全て、僕の落ち度だ。

「理由を、教えてくれ」

どんな表情でそう呟いたからだっただのか、オーロラは束の間、瞳に迷いを滲ませた、ように見えた。
が、すぐにそれは消え去る。

「理由などありません」

「嘘はいらない。本当のことを教えてくれ」

「……嘘なんか、吐いていません」

「オーロラ」

一瞬、空気が張り詰めた。
彼女の表情も、凍りつく。

「僕を裏切るな」

「」

あの、嫌な感覚が全身を支配していくのを感じた。
これ以上感情を逆立てるのは危険だと何かが警告を発する。
どくどくと鼓動が波打ち始め、ぎゅっと瞳を固く閉じた、刹那。

「ごめんなさい、イル。……本当のことを話すわ。だから、落ち着いて……」

いつもの、愛おしい声が、本当に僕の心を落ち着かせた。

今“あれ”が顔を出せば、とんでもないことになる。彼女も察したのかもしれない。

僕の中にある狂気を、オーロラもよく知っている。

「わざと僕を避けているだろう？ ……ネルソンと一体何を話して

いた？」

「……あなたに冷たくするよう、言われたわ。あなたから離れてくれないかと頭を下げられたの。あのネルソン様に」

「ネルソン 勝手なことを！」

「でも、承知したのは私。それが、正しいと思ったから」

「そんな必要はない！ 僕自身のことだ、正しいか正しくないかなんて僕が決める！」

「……そうね。あなたは間違っていない。きっと私の方が間違っている。そう思ったから、私は私で決めたの。私自身が正しいと思う道を」

「何を言ってるのか分からない」

「そう……でも、これだけは知っておいて欲しい。皆あなたを見捨ててなどいないって。また以前のようなあなたに戻って欲しいって、願っていること」

きりり、と、締め付けられるように胸が痛んだ。

それはもう僕には取り戻せないものだったからだ。だから、オー

ロラという奇跡を、僕は絶対に失えなかった。

どんなに正当な理由がそこにあっても。

「僕には、何も必要ない。君だけいればいい」

彼女の瞳を見据え、言う。

これが僕の全てだった。

オーロラもまた、僕を見詰めている。

この先の展開がどう動くかなんて想像すら出来ていなかったが、このあと耳にした言葉は、意外なものだった。

不覚にも僕は聞き返す。

同じ言葉を、君は繰り返した。

「二人で逃げるのもいいかもしれない、と言ったの。どこか遠く、見知らぬ土地へ」

こうして、僕らは夜明けを待たずに城を抜け出し、港に向かった。戦乱の世にあつて城も街も警備は物々しいはずだが、一つとして引つかかることはなく、天が味方しているのではないかと疑いたくなるほどだった。

港には大勢の人がいた。しかし、朝一番の船だからか、乗船客はとても少なかった。

乗り込んで程なく、船は帆に風を受けゆつくりと出港した。

どこへ向かうのか当てはなかったが、陸が遠ざかるにつれ、どこかほっとしたような、不思議な気持ちになった。

どうせなら一番遠く、最後の港で船を下りるのがいいかもしれない、そんなことを呟くと、オーロラも静かに頷いた。

それからどれくらい日が経ったのか、そろそろどこかに寄港してもいいはずではないかと首を傾げたくなるほどの昼夜を越えた頃。

運命の日は、突然訪れた。

朝から僕は一人で甲板に立ち、海を眺めていた。雲行きは怪しく、波も高い。嵐を予感させた。

寒くはなかったが僕は身震いをし、船内に戻ろうと振り向くと、真後ろにオーロラがいた。

少なからず驚いて、いたのか、と微笑んで言う。

「姿が見当たらなかったから、一人で海を見てた。どこに行つてたんだ？」

言葉のついでに出たような問いかけだった。答えなど必要として

いない。

だが、オーロラは虚ろな瞳で僕を見詰めたまま、微動だにしないのだ。

様子のおかしさに気付いて、僕は彼女に手を伸ばした。

「どうした？ 顔色が悪いし……震えてるじゃないか。風邪でも引いたんじゃない？」

「イルバート……っ」

急に、オーロラがしがみついて来た。

がたがたと、普通ではない身体の震え。

心配になってぎゅっと彼女を抱きしめた。こんなオーロラを見ることさえも初めてだった。

「オーロラ、一体何があった？」

震えが、ぴたりと止まった。

そして、ゆっくりと、彼女は身体を離す。

背中に回っていた両腕が、するりと抜け、改めて僕の腕を掴んだ時。

「ごめんなさい」

「オ」

どんっ、という、カいっばい突き押される衝撃があったかと思うと、次の瞬間、僕は宙に舞った。

そして、あっという間にオーロラの姿は小さくなり、僕は、嵐の前のあの黒く暗い海へ吸い込まれて行った。

一体何が起きたのか、考える間もなく、意識は途絶えていた。

それでも僕の心が、身体が、理解した。

全てのことは、仕組まれていたのだと。

僕は最愛の女ひとから、最悪の結末を、叩き付けられたのだ。

決して消えることのない痛みと苦しみまで、この身に刻みつけて

？・深海の遺言1（前書き）

2011/3/20書き直しました。

？・深海の遺言1

大きな不安が全てを支配し尽くしてしまうよりも早く、カリスは瞳を上げた。

目に飛び込んできたのは緑。そして光。

「カリス」

「……大丈夫……」

「なら、良かった……」

それっきり、無言になる。

湧き上がる感情がどこに帰すればいいのか迷うように、二人の心の中は混沌としていた。

これまで妖精だけの平和な空間で、妖精のみと関わり生きてきた二人にとって想像を絶する世界。

それは永遠に、心に消えぬ爪痕を残してしまうと、この時点で二人はよく理解した。

客観者でありながらこれ程までの衝撃を受けたのだ。

背負うに耐え切れなかった痛みとは、きつと想像を絶する。

（ “忘れてしまった記憶は、ほんとは、忘れてはいけなかった” ？ ）

かつて、コジロを見ていてふと浮かんだ言葉である。

記憶を取り戻すことがコジロの救いになると信じて疑わなかった。だが今、それが本当に正しかったのか、分からなくなっている。

「……忘れた方がいいことだってあるって……知らなかったの」

妖精には思いもつかない、人間の心の闇。暗く、深く、そしてあまりにも醜い。

「忘れることでコジロは生きようとしたのに」
「カリス……」

白くきれいな両手が小刻みに震えている。
血の気の引ききった青白い顔を、すが縋る様にアレクサンドレへと押し付けて。

「……………」

パトは数秒自らの両の掌を見詰めていた。
やがてそれを強く握り締める。

そしてカリスの肩へ飛び、寄り添った。いつものように。

「パト」

「うん」

「コジロを探さなくちゃ……早く」

「……………」
「においては あっち」

パトが能力を使い、方向を特定する。

「海岸だ」

刹那。

どおんつと、巨大な衝撃音が轟いた。

カリスの立つ大地は揺れ、空気が振動する。

パトが反射的に能力でカリスを保護すると、嫌でも感じる強烈な

“個”の気配にきつく眉を寄せた。
パートナーの放つ、それは妖精にあるまじき殺気にも似ている。

「来いってこと？」

「帕特！　　これ、チャムの仕業ね？　　ッ」

「待って！」

「！」

駆け出そうとしたカリスの行く手を風が遮った。

そのままカリスを包み、風は渦を巻き始める。

「海へ向かうならこっちの方が早い」

カリスを取り込んだ風の渦は、パトの言葉を掻き消すように空高く跳ね上がって行った。

海岸では、自然現象ではあり得ない事が起きていた。

海水がまるで意思を持つようにうねり、形成された“手”で

コジロを掴み上げている。

崖の上に膝をついたカリスは苦痛に歪むコジロの顔を見る。

「やめてチャム！　コジロを離して！」

「無駄だよカリス。言っても分からない」

そう言うと、突然矢のような強風が“手”を襲った。

手首の辺りを勢いよく貫き、“手”はただの海水へと姿を戻

す。

コジロを置き去りにして飛散する水を見て、空中で静止していたチャムは軽く舌打ちをした。

その隙に強風が落下していくコジロを掬い去ろうとするが、それは成功しなかった。

海水が跳ね上がり再度コジロを “ 手中 ” に収める。

「……そっちがその気なら、遠慮しないから」

眩きが漏れるのと同時に風がうねり出した。

人間の目には捉えられぬ速さで数百という強風の矢がチャムを襲う。

それを浴びれば生身の身体など跡形も残らないだろう。

しかし、突き上がった大波が矢を受け止める。

“ 手 ” とは別の海水がチャムの前に壁を作っていた。

どおおっと衝突し、空間を揺らした。

衝撃で海水が雨のように飛沫しぶきを散らす。

数秒の間、カリスは豪雨に遭ったようにならず濡れになるが目を閉じてやり過ごし、すぐに前方へ視線を戻した。

無言で対峙する二人を凝視し、カリスは唇を噛み締める。

そこへ、水泡がいきなりパトを襲い丸ごと飲み込んだ。

一瞬の出来事。

「そこにいる」

パトを捕らえた水泡は空中を漂う。

身動きが取れないのか自らの意思なのか、パトは動かない。

「もうやめてチャム!!! お願い っ」

力の限りカリスは叫んだ。

だが、その声を掻き消すほどの轟音が響いたかと思うと、コジロはあっと言う間に海へ飲み込まれてしまった。

チャムの姿もそこにはない。

「な、んで」

不意に訪れた静寂。

あまりに空しく、残酷。

チャムはこのままコジロを消してしまうつもりなのだ。

「なんで……っ分からないよチャム……っ！」

ぼた、ぼた、と、水滴が手の甲へ滴った。

全身を濡らす海水ではない。

冷えた身体に現実を叩き込むような熱をおびていた。

そのまま、震える両手にくず折れるようにして顔を伏せる。

津波のように押し寄せてくるさまざまな感情に耐えようと強く目を閉じて、広がるのは絶望だけだった。

もう成す術はない。

すべて終わってしまった。

(救えなかった　コジロを　救えなかった！！)

頭の中が、真っ白になっていく。

(…………… “……………” ……………)

「　　つ……」

何かが聞こえた、そんな気がした。

カリスは瞳だけを開き、注意深く意識を集中させる。

(…… “……………” ……)

また。

耳で、というより、頭の中に直接届くような音の波動。カリスは涙を拭いながら身体を起こし周囲を見渡す。しかし、音の発信源は特定出来なかった。

(空耳……?)

(…… “イ、ル” ……)

「空耳じゃない　どこから」

(…… “イルバート” ……)

(…… “あなたを、失えない” ……)

「　　」

突如、どくんつと心臓が跳ね、カリスは妙な感覚に陥る。

先ほど被った海水が纏わり付き、何かが自分の中に入ってくる。

そんな気持ちの悪い感覚だった。

抵抗する術もないまま、カリスの意識はそこへ引きずり込まれて行った。

ほんの数瞬で目の前に見慣れぬ世界が広がる 異世界 人間

の暮らす空間。

しかし、カリスはそれを見たことがあった。

アレクサンドレの中に記録されていたのと同じ景色なのだ。

(これも……コジロの記憶……?)

何が何だか分からぬまま、カリスはその景色に引き込まれていった。

？・深海の遺言2

巨木は海への通過点に位置していたからか、それが僕を呼んだのかはよく分らない。

気づけばその場所で、全てを思い出していた。

足は自然と海岸へ向かった。

ずっと恐れていた水……そして海。

最愛のものを失ったのはこの海だった。

(オーロラ……君なのか？ なぜ？)

海の中にいるのに少しも苦しくはない。

引き込まれる瞬間に何か膜のようなものが僕を包んだ気がしたが、その所為だろうか。

(っ　　なんだ　　！？)

突如、水流が全身に纏わり付いたかと思うと、それが僕に話しかける。

その声に、聞き覚えがあった。

しかしそれはあり得ない。

あつてはならない。

(　　オー……口、ラ……！？)

僕は夢を見ているのかもしれない。

始まりも終わりもない、混沌とした悪夢を。

(イルバート。ごめんなさい……私が、あなたを、海へ突き落とし

た)

(……………)

いつしか目の前に、僕の生まれ育った国の、しかし荒れ果てた大地が広がっている。

戦況はいつでもぎりぎりだった。

国王を欠いて、今にも途切れそうな糸に皆が必死にしがみ付いているような、そんな状況で繋いできた弱小国の命。

姿こそ変わってしまったものの、まだそこにある大地が、全てを物語っている。

ぎりぎりの勝負に耐え忍んできた苦勞と、意地を体现して。

「オーロラ、話がある」

「ネルソン様」

体格の良い、五十歳前後の男に呼び止められ、オーロラは振り返った。

二人は周囲を気にするようにして物陰へ移動する。

「イルバート様のことだが」

「……………」

「君はどう思う？」

真意を掴みかね、無言で眉を顰めた。
ネルソンがすぐに言葉を足す。

「今のままでは良くない、ということは君にも分かっているだろう？
イルバート様は第一王位継承者、この国にとっても特別な方だ」
「承知しております」

「私はあの方に戦場へ戻って頂きたいのだ。戦えなければ陣頭指揮
を執って頂くのも良い。」

次期国王というお立場とあの類稀な才能を見す見す潰してしまう
わけにはいかない。

イルバート様はこの国の未来を背負っておられる。そのためにも、
あの方に必要なのは何か、

それを考えて欲しいのだ」

「……私には、関係のないことです」

「オーロラ」

投げ遣りな言葉と見て取ったネルソンは、真剣さを訴えるように
抑えたトーンで諫める。

オーロラは誰にも気付かれないほど小さく息を吐いた。

「あの方の将来のために、必要なものが何かなんて私には分かりま
せん。ただ、必要のないものなら、

一つだけ心当たりがあります」

揺るがない瞳を見据え、ネルソンも静かに頷いた。

（あなたの国がどうなろうと、私には関係なかった。そんなものど
うでも良かった。

けれど……私の存在があなたの未来を邪魔している、そう思った

から……

あなたから離れる決意をした。よそよそしく、振舞った。すべてはあなたのために)

(でも、失敗した。僕が納得出来なかったから)

(……そうじゃない。悪いのは私。全部、私)

そうだ。

その通りだ。

二人で逃げようと最初に言ったのは君だった。

それなのにあっさり僕を裏切った。

この海に、僕を消したんだ。

またある時、ネルソンがオーロラを呼び止めた。

「上手くいつてはいないだろうと思ってね」

「……ネルソン様が言い出されたことでは？」

二人は廊下の隅へと移動する。

「逆効果、と言いたいかね？ ……荒れてるな。

動揺、と言うべきか……イルバート様も、君も」

「オーロラ。君には世話係を辞めてもらおう」

「驚かないか。流石だな、君は」

ネルソンは苦笑する。

しかしそれは一瞬のことで、表情はすぐに引き締まった。

「どうか、この通りだ」

「！」

ネルソンは、深々と頭を下げていた。さすがのオーロラにも予想外だった。

「君はよくやってくれた。だが、我が国はイルバート様を失えないのだ。

永遠とは言わない。ただししばらくの間、離れて欲しい。

君にはそれなりの謝礼と誠意を持って対応する」

「……頭を、挙げて下さい」

オーロラはそっと呟いた。

「では、承知してくれるか？」

「船を、出して頂けるなら」

「勿論だ。……国へ帰るのだな？」

「……はい」

取引が完了した、まさにその時。

「オーロラ？」

「！」

イルバートだった。

ネルソンといるのを怪しく思ったのか、表情が見る見る内に険しくなる。

ネルソンがイルバートの一礼し足早に立ち去ると、二人には気ま
ずさだけが残った。

「……どういうことだ？」

オーロラは答えない。

二人はイルバートの部屋へ場所を移し、そこで、イルバートの怒
りが爆発した。

恋人に裏切られ、殺された。

結果的に一命を取り留めてはいるものの、その事実は変わらない。
自分の知らない所のやり取りを明かされたところで痛みは増すば
かりだ。

むしろ知らない方がいい。

(そんなことより、君はどうして どうして “海” にいる?)

血の気が引いていくのを感じた。

堪らなくなつて僕はぐつと奥歯を噛み締める。

考えられる理由は一つしかない。

(イル……あなたを失えない……だから私は、こつするしかなか
つた)

僕には彼女が泣いているように思えた。

決して人前で感情を見せない、あの彼女が。

？・深海の遺言3

ネルソンに頼んだ船と、乗り込んだ船とは何の関係もないはずだった。

いつ、どこで、どうやって、イルバートに見つからないようその船で出港するのか、

彼とは何一つ打ち合わせていなかったからだ。

逃亡という行為によって裏切った相手は、イルバートではなくネルソンだった。

それがオーロラの答え。

しかし、初めから何もかもがおかしかった。

明らかかな異変に気付いた時には、全てが終わろうとしていた。

あの運命の日の朝、オーロラは船内を歩いていて偶然会話を耳にした。

一般客風の男二人の立ち話。

「嵐になるな。いい頃合だぜ」

何となく身を潜め、盗み聞きをする。

「言われた通り、どこだか分からねえくらい遠くの海だ、少なくとも死体はあがらねえ。」

「ここまで来りゃあの方も満足だろうよ」

「イルバート様じゃ恨みはねえが命令じゃ仕方ねえ。あの女もろともここで死んでもらうぜ」

「！！」

男の手には剣が握られていた。

そこにある紋章は、イルバートの国の物。

「ただ、イルバート様は手強いからな。正面切っていけばこっちが殺られちまう」

「隙を狙うしかない。あの女を使うか？」

「っ！！」

「誰だ！？」

オーロラは間一髪、無事にその場を離れることに成功した。だが、身体の震えが止まらなかった。

今見聞きしたことが本当なら、早く彼に知らせなければいけない。

(畏だったの？ でも、この船は城の物じゃないはず……一体誰が、どうして)

「……ッ！」

恐怖と驚愕とで覚束なくなった足を必死に前へ押し進めた。

早く、早く、早く、早く　　っ！！

視点の合わない視界に、愛しい姿が飛び込んで来る。

甲板に立っているのはイルバートである。

「イ」

名前を呼びかけて、止めた。

(彼が……殺される？)

自分が一緒にいたら、確実に足手まといになるだろう。

刺客はもつと大勢いるのかもしれないし、目の前のイルバートは丸腰だ。

このままでは二人とも殺されてしまうのではないか。

そんな絶望的な結末が、瞬時に脳裏を過ぎっていく。

「わ、びっくりした。いたのか」

イルバートが振り向き、驚きと共に微笑を浮かべる。

「姿が見当たらなかったから、一人で海を見てた。どこに行ってたんだ？」

言葉が耳に入らなかった。

ただ虚ろな目で、呆然と立ち尽くすしかなかった。

危険が迫っていることを、早く、伝えたいのに……

「どうした？ 顔色が悪いし……震えてるじゃないか。風邪でも引

いたんじゃない」

「イルバート……っ」

がたがたと震える身体をイルバートへ押し付けた。
イルバートの腕が力強く受け止める。

「オーロラ、一体何があった？」

「いた！ あの女だ！」

「!!!」

震えが、ぴたりと止まった。

頭の中は真っ白だった。

あの声にイルバートは気付いていない。

もう間に合わない。

何もかもが終わる

その時、海へ向かうオーロラの瞳に何かが映った。
深い霧の隙間から覗いた陸地と

(あれは)

イルバートの背中に回していた両腕をすりと抜き去り、正面から腕を掴んだ。

そして。

「ごめんなさい」

「オ」

どんつ、と、力いっぱいイルバートの身体を海へと突き落とした。
あつという間に愛しい人は黒く暗い海へと吸い込まれて行った。

「っ……ごめんなさい　っお願いだから、生きて　！」

「おいおい、あんた、あの男をここから落としたんだろ？」

この荒波で助かると思ったのか？」

あの二人の男だった。

手には紋章付きの剣が握られている。

「……誰の差し金？　この船も、全部、畏だったのね」

「乗っちまったが最後、後の祭りってな」

笑みを浮かべ、男はオーロラににじみ寄った。

オーロラもまた一歩、後ずさる。

「誰があなたたちに命じたの？　城の者？　それとも敵国に買収された？」

「それを知ってどうする？ あんたもここで死ぬんだぜ？」

「……っ！」

「強い強いイルバート様とやるってんで楽しみにしてたのに、拍子抜けだ。」

「女一人殺すだけじゃつまんねえよなあ？ どう穴埋めしてくれるんだ？」

身体が甲板のへりにぶつかつた。

と同時に両手を二人の男に掴み挙げられる。

「手を、放しなさい！！！」

「いいねえ。威勢の良い女は嫌いじゃない」

男二人は、握っていた剣を床へ放る。

「あんたはどこか高貴な匂いがするな。イルバート様にも似合いの相手だと思っぜ。」

是非、一緒になってくれよ」

「あ」

オーロラの身体が軽々と空中に持ち上がった。

卑しい男たちの顔が二つ、オーロラを見上げたまま恐ろしく歪むのを見た。

「あの世でな！！！」

「っ！！！」

掴まれていた腕が自由になったかと思うと、身体は急降下していった。

暗く、冷たい海へ。

それが、さいごだった。

やはり、夢なのかもしれない。

どこからが始まりで、どこまでいけば終わるのか、果ての無い悪夢。

ここで声を上げれば目覚められるんだろうか？

喉が干切れるほど叫んでみたら、幸せだった頃へ戻れるんだろうか？

目の前の懐かしい景色は消え、闇ばかりがそこにあった。

僕も、オーロラも落ちて行った、ここは深い深い海の底だ。

(オーロラ……ッオーロラ　ッ)

胸に広がる表現の仕様の無い痛みが、全ては現実なのだと僕に知らしめる。

どこまでも護られてばかりの自分を断罪するかのように。

(何も分かっていないのは僕なんだ　　オーロラは最後まで僕を庇^{かば}ってくれた

　　僕は何もしていない、何も！)

オーロラが海に突き落としてくれていなかったら、今頃。

(確実に死んでいた。　　それでも僕は構わなかった。でも、そういうことじゃない。

オーロラの言いたいことはそういうことじゃない)

纏わりついていた水流が、徐々に緩やかになっていく。
オーロラの気配も、声も、薄れていく。

(イル……生キテテ、良カッタ……本当ニ良カッタ……
皆アナタヲ必要トシテイル……世界ガ、アナタヲ、失エナイ)

(オーロラ　ごめん……君を護れなかった)

(生キテ……ソレデイイ……イルバート……生キテ……)

また一段と声が遠のく。

そつと手を伸ばしてみても、もうそこに何も感じることは出来なくなっていた。

僕は目を閉じ、身体を海に委ねる。

微動だにせず、あらゆる想いを抱きながら……。

そのままずっと、ずっと。

? ・エビローグ1

両足で立てばちょうど胸あたりに海面がくる、そんな浅瀬から一つ水泡が浮かび上がった。

かと思つと、弾けるように音もなく消失する。

水泡の中と外との感覚の違いを束の間確かめて、コジロはゆっくり浜へ歩いた。

「っコジロー!!」

カリスは反射的に叫んでいた。

心臓は高鳴り、意識せずとも向かう場所が定まる。

岩場から浜へ降りるのに一番安全なのはいったん森へ入って回り込むことだ。

しかし、それでは遅い。

普段なら誘われても断る危険な岩場を、あちこち擦り剥くのも厭わず這い降りていく。

最後の一枚岩を飛んで着地するが、砂に足を取られて体勢を崩した。

「コジロ……っ」

数メートル先に、力なく仰向いて寝転がっている姿を目にし、カリスは不安定な砂地を駆けて行った。

彼の傍で立ち止まり、跪く。

「……カリスミリア？」

「!っ……」

不意を突かれて言葉に詰まる。
コジロはきゅっと口端を上げ、瞳を開けた。

「……海の中で、君の声を聞いた……そう、ちょうど、
そんな顔してるんじゃないかっていう声」

「！ だって……死んじゃったって思ったもの……っ！
泣かないって、決めたのに」

不安と、驚愕と、安堵がごちゃまぜになったような顔に、
ぼろぼろと涙が零れる。

しゃくりあげそうになったところへ、すっとコジロの腕が伸び、
片方の頬を拭った。

「……ごめん……って言うのも、ヘンかもしれないけど……
僕も、カリスマリアにはずっと笑ってて欲しかったのにな」

瞳がきれいに細まった。

そのまま視線は遠くの空を見詰める。

「涙ばかり見てきた気がする。全部、僕のせいだ」

「そんなこと……」

「僕はね、カリス。本当の名前をイルバートって言うんだ。

そいつはとても臆病で、傲慢で、情けない。それに……

狂気を持つてる。自分でも制御コントロールできない危険なものだ。

それで僕は……大切な仲間を殺してしまった……この手で
「

掌を上空にかざし、言葉を切る。

心なしか、表情は寂しげだ。

「責めたよ、自分を。でもどうしようもなく、怒りの感情だけが

募って、

気付いたらダメになってた。行き場を失って墮ちる所まで墮ち切
って、

そしてあの日、大切な人も守れないまま、僕は、死んだんだ」

大海原に飲み込まれば、奇跡が起きない限り生きることとはでき
ない。

あの嵐の日。

その奇跡が、起きた。

「何もかも忘れて、君にコジロっていう名前まで貰って、
こうして生きている。生まれ変わったみたいだね」

「コジロ あ、えっと、イルバート……」

カリスが言い直した時、コジロが振り向く。

「イルバートは死んだよ」

「え？」

「あいつはもういない。僕は、コジロだ」

強い意志でもってそう言い切った。

カリスは戸惑いを隠せず無言でいると、コジロの頬が緩む。

「……せつかく君が名付けてくれたんだ。僕も気に入ってる」

「う、うん……じゃあ、コジロ」

コジロは満足気に笑うと身体を起こした。

思ったよりも元気な様子で、カリスはほっと息を吐く。

「……コジロ、私、その……どうしてだか分からないんだけど、

急に見えたの……あなたの、過去。オーロラさんのことも……」

数瞬の沈黙。

「あの、たぶん、何かの偶然で見えちゃったんだと思うんだけど、その、黙ってるのも、気持ち悪いかなって思ったから……」

「……声が聞こえたのは偶然じゃなかったみたいだね。」

大丈夫。そうじゃないかって思ってた」

「ご……ごめん、なさい」

「謝ることじゃない。……僕のこと、軽蔑する？」

「！ そんなの、するわけない！ コジロはコジロだし、

そのコジロはイルバートだけどイルバートもコジロだからっ」

「?? 何か複雑だな」

「えっ、そうかな？ 私にはすごく簡単なことなんだけど、

えーと、だから、つまり……今のコジロが私には全てってこと！」

真剣な顔で、カリスが言った。

コジロが静止したので幾分自分の発言に不安を覚えたが、後悔はしていない。

「ほんとだよ！」

勢い余ってダメ押しまでしておく。

じつとカリスの様子を観察していたコジロは、その必死さがツボに入ったらしく、

噴出して笑った。

顔を真っ赤にしているカリスの横で、ひとしきり笑ったあと、

「……ありがとう」

にこやかに、そう告げた。
しばしの沈黙。

「カリス」

「コジロ……」

言葉にならない空気が二人を包んだ。

「はいはいはい、いいところお邪魔しますよー」
「！！！」

能天気な声が二人の世界を打ち壊した。
目の前に、宙に浮かぶ小さい人の姿が二つ。

「え」

「きゃー！ きゃーっ！ きゃーっ！」

目を丸くするコジロをよそに、カリスは事の重大性を認識して、
必死に誤魔化そうと両手をぶんぶん振り回す。

いったい何を考えているのか。

二人の事はコジロには勿論秘密であり、バレていないはずなのだ。
それをあろうことが禁忌を犯し、自ら正体をさらすなど、
まったく理解出来ない。

「むむむ虫！？ 地球外生物！？ 目の錯覚！？

どっかに飛んでけーっ！」

「虫はひどいよカリスー」

「きゃーっ！ あああ変わった鳴き声！

コジロ、に、逃げまじよう！！！」

「無駄です。その人間は僕らの存在をとうに知ってる」

「チャ、チャム あっ！」

思わず零れた失言にカリスは絶望を覚える。
恐る恐るコジロを覗くと、チャムの言葉を裏付けるかのような、
比較的落ち着いた表情がそこにあった。

「コジロ……これは、その」

「……海に引き込まれる時に彼がいたんだ。

そうか、水中で呼吸が出来たのも、君が？」

「……………」

「“そういうこと” って言ってます。

ぶっちゃけちゃうと、彼は水の妖精だから海は意のまま」

「それは余計だ」

「いいじゃん。バレバレなんだし」

「うう」

申いたのはカリスである。

明らかに胃でも痛み出したような渋い顔を浮かべる彼女を横切り、
パトがにこにこことコジロへ向かった。

「おれはパト。こっちの無愛想なのがチャム。

ずっと陰から見ただからおれたちはコジロのことよく知ってる」

「じゃあ自己紹介は必要ないかな。よろしく、パト、チャム」

「よろしくー。ほら、チャムも」

「……人間と仲良くする義理はない」

「チャムっ」

カリスが一番に声をあげる。

いつものことだった。

しれっとそっぽを向くチャムのフォロー役は、いつもパトなのだ。

「ごめんコジロ。妖精の評価を下げるようなことしないでって、
常々言いきかせてるんだけど、この通り。」

「口が悪いだけで害はないから許してやってね」

「いや、僕の方こそ礼を」

「パト」

唐突に、チャムが言葉を挟む。

言いかけた科白を飲み込んだコジロを素通りし、パトへと鋭い視線を投げた。

「僕がいつ評価を下げるようなことをした？」

むしろ人間と仲良くやる方が妖精界では評価を下げる。

バレたらここにすらいられなくなるんだ。

あんたも、それを承知しておくといい」

最後の言葉はコジロに向けられていた。

その言葉の奥に込められたメッセージに、コジロはハツとする。

「もしかして……カリス、君も……妖精なのか？」

「へ？ あれ？ 気付いてなかったの？」

おれたちだけが妖精だと思ってた？」

「いや……逆だ。カリスミアは妖精じゃないかってずっと思ってた。」

でも君たちの方が妖精だと言うから、じゃあカリスは人間なんだと」

「ああ、そういう理屈ね。まあそうだよな。サイズが違うから」
「ううう……」

サイズ、という単語に徐々に反応したのはカリス自身だった。

最近のごたごたで忘れそうになっていた、いわゆる根本的な問題。
コジロという人間のサイズと暮らす内に消えたと思っていた劣等コンプレ
感ツクスが、
まだその存在をアピールすべく顔を出しそうになる。

「コジロ……あの、私……こんなに大きな体してる、んだけど……
妖精なの……うん」

色んな事実にもコジロがどんな反応をするのか、直視するには勇気がいった。

それでも意を決し、そつと瞳を上げると。
相変わらずの微笑みとぶつかり、それが全ての答えを示していた。

「人間界に伝わる妖精のイメージは、美しく、お互いが助け合い、
笑い声の絶えない平和な生活をしてるって、人間の憧れの対象な
んだ。

実際、こうして出会ってみて、どれもこれもイメージ通りだった。

特に、カリスマリア」

「わ、私？」

「うん。その美しさもさることながら……人間と同じサイズなもの、
僕らにとってはイメージ通りだから」

「ほんと？」

「ああ」

コジロとしては、この話を持ち出したのは、もしかしたらカリス
が、

体のサイズを気にしていることへのフォローだったのかもしれない。

現にカリスは戸惑い一つも喜びを滲ませている。

一方で、チャムは浮かない顔をしている。

パトが能力で話しかけた。

「どうしたの？」

「別に」

「だーから。別に、って言う時。」

本当は何かあるって言う顔してるの、君は」

「……確信じゃないから発言を避ける。それだけだ」

「わっかんないかなあ。これだけ一緒にいるんだよおれたち。もっと信頼してくれてもいいと思うけど。」

「……ずっと片思いするの、疲れるんだよ？」

「……………」

信頼は、していない訳ではない。

チャムは少しだけ、吐息する。

「コジロの言ったイメージ。 “妖精は人間と同じサイズ”

それが気になってる」

「うーん……人間の勝手な妄想ってやつじゃないの？」

ほら、人魚だって魚じゃなくて基本人間サイズだし」

「人魚は……実際にそれを見た人間がいるんだ……」

見間違いだとしても、だ」

「……………あれ？ え？ ちょっと待って……………そゆこと？」

「可能性の話だ。しかも……………限りなくゼロに近い。」

「言っただけ無駄な話なんだ」

「ううーん……………」

珍しく考え込むパトを横目に、チャムは頭を振る。

自らは思考を止め、もっと現実的なものへと発想を切り替える。

目の前でいちゃつく いや、じゃれあう もとい、

楽しげに会話する二人を、さて、どうしたものか。

「こいつは……いつまでここにいる気だろう？」

「邪悪な目つきになってるよチャム。ここにいる気って、ここにいるしかないからいる、それだけだと思うけど」

「どうしたいかだ、要は。このままここに居座る気なら、どんな手を使ってでも人間界に戻してやる」

「まあ、生かして逃がすっていう選択肢を選んでくれただけ、丸くなったよね。もろ手を挙げてさんせい」

「やっていいなら、遠慮はしないが」

「是非遠慮して。……ていうかさー、たぶん、コジロ、帰る気にいると思うんだよね。前と少し雰囲気が違う。単なる予感だけ」

「当たるだろ、お前は」

「だから、おれたちが考えなきゃいけないの、カリスの方がも……」

「もしも、コジロが帰ると言ったら、

カリスはどんな風になってしまうのだろうか。

「コジロの横で最高の笑顔を見せるカリスを見詰めながら、明らかに心は重く沈んでいくのを感じていた。」

？・エピソード2

朝からの曇り空に、けたたましい鐘の音が響き渡る。

敵襲、交戦、攻撃……あらゆる危険を知らせる鐘を聞くのは、この一週間ですでに十数度。

正確に数えることすら億劫になるほど戦況は激化している。追い討ちをかけるように不可解な出来事も後を絶たない。

国王の失踪に続き、第一王位継承者まで消えたのだ。

同時にその世話役も居なくなつたことが噂として広まり、今や国中が浮き足立っていた。

広がる王室への不信感。

この国は内部崩壊の危機に直面している。

敗戦が早いかわ滅が先か、そう言っても過言ではない。

「場所は？」

国のほぼ中心に位置する城の最上階にて、彼は言った。

今は住民の指定居住区となっている外壁付近までは見渡せる、ここは言わば見張り台である。

吹き抜けの構造のせいかいつでも風が強めに抜けて行った。

「第三地区司令部管内N2地点です。第一地区W2拠点と連携、緊急戦中」

遠くを望みながら兵士の一人が眼前の事実を伝える。

スムーズな連携を図るために狼煙の種類は数十に及ぶ。

小国がこれまで持ちこたえてくれたのも、

通常多くを伝達出来ないと言われる狼煙の欠点を克服できうる、豊富な資源を最大限利用出来たためだ。

天候に左右されるといふ欠点を残しつつも、これにより複数の内容を高速に伝達するのを可能にしている。それらを瞬時に、しかも的確に判断するには長年の経験と個人技術が必要だった。

「ラグロプ中継塔より、敵勢数百、指示を求むと」

兵士の再三の情報にも、彼は一切反応しない。それは珍しいことである。

“無反応” は彼の場合、満足を意味している。

「ネルソンは街へ？」

「は。所用、と」

「緊急事態だ。僕が指示を出す。

第三地区N1と第一地区W1から援軍を派遣せよと応答。城からも数人向かわせる」

「では、リクフェルド様が？」

「僕は残る。行くのはレインスだ」

その場にいた数人の兵士が少々色めき立った。

応答用の狼煙を準備していた兵士の一人が、にやにやとリクフェルドへ視線を向ける。

「オージン様がまた怒り狂うんじゃないですか？

ただでさえ出兵制限されて、この頃はずっと機嫌が悪い」

「あいつは冷静さに欠ける。我慢というものを知らない。むしろ足手まといだ」

「厳しいんすねえ、ご兄弟には」

「……………」

強く、風が吹いた。

純粋な金色の髪フロンドが流れ、リクフェルドは束の間幻を見る。

柵と柵の間から手足を突き出して座り、無垢な笑顔を湛え寄り添う、

幼い子ども二人の姿。

“リク お前たちは僕が護つてやるからな！”

そう言ったのは、幼き頃の兄。

彼は言葉通り、危険を顧みず常に自ら先頭に立ち、兄弟達を護り続けた。

体の弱い母を支え、執政にも協力した。

だが、ある日突然、彼は変貌した。

そして完全に消えた。

偶然目撃したというある兵士の報告では、

あの世話役と共に海に身を投げたのだと言つ。

「リク？」

兵士が呼んだ。

ふと我に返り、声の主を確かめて目を細める。

「……気安く呼ぶな、“一兵士”。口より手を動かせ。

自分を追い込むのがそんなに好きなら、あとで無理難題を出してやるよ」

「いえケツコウです。“リクフェルドさま”」

まもなく、指示通りの合図が送られた。

見張り台もにわか^{せわ}に忙しくなると、一気に緊張の糸が張り詰める。もうそこに一切の私語は無くなった。

昼間でも日の当たらない薄暗い路地の一角で、ケープに全身を包んだ男が一人立ち止まる。

辺りをちらりと目視し、目の前の木製扉を静かに押し開け中に入っ
って行った。

「私です。ヴェンテモーム殿」

暗闇に声が響き、人影が動く。

「お待ちしておりました。さあ早速、ご相談致しましょう」

その時、けたたましい鐘の音が鳴った。

どうやら侵攻が始まったようだ。

ケープの男はヴェンテモームに無言の視線を送る。

「ご安心を。これも作戦の内です。今我が国が本気で攻め入れれば、あなたの国はひとたまりもないでしょうからね。それでは意味がない」

「心配など。すべて順調ですよ。邪魔者が排除された今、

あとはじっくり傀儡王かいらいを作り上げれば良いのだから。

……ヴィンテモーム殿のお力添えがある限り失敗などあり得ない。そうでしょう?」

「もちろん。こんなに面白いゲームは他にありませんから。とことん楽しみますよ。ふふっ」

外では鐘音が鳴り続けている。

それに同調するように、人々の喧騒が大きくなっているようだった。

本気の侵攻ではないにしろ、誰も殺さないという保障ではない。

悲鳴にも近い喧騒を聞きながら、ケープの男は心の中で、逃げる逃げる……

と、連呼するが、その口元には笑みが浮かべられている。

感傷などない。

これはリアルなゲームなのだから。

「それにしても、ひとつ予想外だったのは “イルバート王子” です」

「は?」

「才能、人望、容姿、品格 どれをとっても素晴らしい。

あの方を手中に出来たらと思うとぞくぞくしたものです」

「……私には分かり兼ねます。結局、自滅した。

それだけの人間だったということですよ」

「ふふっ。相当嫌っておいでだ。まあいいでしょう。

アクシデントもゲームの醍醐味です。

そろそろ、本題にまいりましょうか」

「ええ」

ヴィンテモームの雰囲気が変わったのを察知し、男はするりと頭からケープを取り去った。

? ・エピソード3

「妖精は他にどんなことができるの?」

ふと真顔に戻ったコジロが尋ねた。

「答えにくい質問するね。」

「そもそもおれらに出来て人間に出来ないことが何なのか、分からないよ。」

「……それもそうか。なるほど、面白いな。」

目線の問題である。

異文化コミュニケーションなどと口で言うのは簡単でも、実際には複雑なものだ。

如何に相手の目線に立てるか、それには柔軟な心を必要とする。

実はコジロは、生まれてこの方、

異国の地というものを知らずに育った。

今いる場所がどこなのか理解してはいないが、人生で初めての異国滞在だ。

だから、何気なく口にした問い自体が通じない、という体験にも新鮮味を感じている。

「僕たち人間に出来ることはきつと君たちよりずい分限られてる。

空は飛べないし、水や風を操ったりも出来ない。」

「不便だよ、空も飛べないなんて。

人間も妖精くらい小さくなれば飛べるんじゃない?

カリスは妖精だけど、大きすぎて飛べないんだ。ね?」

「……気にしてるのに。」

「わあうっ、ごめん！」

パトはほぼ反射的に宥^{なだ}めにかかっていた。
この流れは危険だと、長年の経験が警鐘を鳴らす。
だが。

「いいわ、本当の事だもの。

出来ることなら私も自分で飛んでみたい」

「……あれ？」

「僕もだよカリス。空を飛べたら気持ちいいだろうね。

人間にその可能性があるとしたら、技術の進歩以外にないな。
夢のような話だけだ」

コジロの話はそつちのけで、

カリスを凝視していたパトは首を傾げた。

いつもなら起こり得る面倒が完全にスルーして行ったのだ。
すごい、と言うより、落ち着かない。

「僕の勝手な解釈だけど、妖精は皆、
水や風を使って色んな事が出来る、のかな？」

コジロが言う。

これにはカリスが反応した。

「ちょっと違うかな……」

どう説明したらいいのか分からないけど、
チャムは水の妖精だから水の能力、
パトは風の妖精だから風の能力が使えるの。

あ、でも、全員能力が使えるのかって言えばそうでもなくて、

【大地の契約】 っていうのが」

「カリス。それは言わない方がいい
って、チャムの視線が言ってる」

少し離れた場所で三人を見守るチャムから、
なるほど、並々ならぬ気配が送られて来ていた。

確かに饒舌になり過ぎたと、カリス自身反省する。

「えーと……ごめんなさい。これ以上は言えないの。
けっこう、その、複雑で……」

「いや、ごめん。」

そんなに言いにくい事だとは知らなくて、僕の方こそ軽率だった。
どうやってここから海へ出ようか考えてたら……

もしかして君たちの能力を借りれば、

何か手立てがあるんじゃないかと思っつてつい」

一瞬にして、その場の空気が固まった。

こんな風に、突然別れの訪れを突きつけられるとは予想外だった。

パトは、雰囲気が変わったと感じた原因は、

この決意の固さだったのかとある意味納得しつつ、

コジロから視線をずらしてカリスを覗き見る。

案の定、彼女は凍り付いていた。

ここからの展開はパトにも、きつとチャムにも、未知の領域だ。

妙な緊張感を覚えた。

「この辺り船は通るかな……」

船さえ通りかかれば何とかかなりそうなんだけど」

沖を見詰めてコジロが呟く。

腕組みをして佇むチャムの、深い青色の瞳が冷たく細められる。

「人間界に帰るといふ決定は当然のことだ。

ここに残るといふ選択肢は人間には存在しない。

どついう経緯いきさつであるうと妖精にとつて人間は排除の対象だ。

その大前提の上であんたの帰郷を手伝うと言っている。

僕の“条件”を拒否する権利はあんたにはない」

「……そうだな。

それぞれに、それぞれの“ルール”がある。

分かった。受け入れるよ。条件つて？」

「……………」

チャムが一呼吸置いた。

数秒現れた沈黙の間に、打ち寄せる波の音がはつきりと耳に届く。

「条件は、二つ。

他の人間に、ここでのことを一切口外しない。

もし、ここへ人間の害が及んだ時は、

これが守られなかったと認識する。

そつなれば容赦はしない」

「ああ、約束する。で、もう一つは？」

「完全に危険因子を取り除きたいのが僕の本音だ。

この数日の記憶を全て消してやりたいところだが、

残念ながらそれは出来ない。だから、取り引きだ。

二度と、ここへは来ない、と」

「……………」

単に、流れ着いただけの場所を、

例えば様々な地図、資料を用いたとしても

特定するのは容易ではない。

況してコジロはあの日、目の前にあつた船に乗り、
東西南北どちらへ向けて走っているのかさえ無関心なまま、
ただ船に揺られ続けた。

その事をチャムも知らない筈はない。

一つ目の条件だけで、フェアリーランドへの脅威を排除するという
目的が十分に達成されるのは明白で、二つ目を敢えて口にした真意
は、

もっと私的で感情的なものだ。

二度とカリスに近付くな。

チャムはそう言いたいのだ。

(どづいつことだろう?)

二人のやり取りを聞いていたパトは腑に落ちない。

【守護者】 として当然の忠告と言えなくもないが、

一つ目の条件で事足りるなら蛇足なのは、と思つたのだ。

正直、パトはそこまで “カリスに” 厳しくなれないでいる。

コジロという時のカリスの笑顔を見てしまった今、自分なら、
別れという結果は同じでももっと違う言い方で、方法で、
現実をオブラートに包んで対応するだろう。

パトが甘いからなのか、それともチャムが厳しすぎるのか、
判断するのは難しかった。

ゆえに、チャムがそれほどまで徹底しようとする理由が
どこに起因するのか、じっくりくる結論は見つからない。

ただ、小さく芽生えかけた一つの可能性を除いて。

「……分かった」

沈黙を破り発された一言は、同時にその顔から笑みを消していた。それきり、コジロは思案するように海へ視線をやり、黙り込む。

「これで取引は完了した。明日船を見つけ次第案内してやる」

引いては寄せる波の音がまた、静けさの中に響き渡った。

逆らう事の出来ない、どこか自然の摂理にも似た巨大な潮流が、確実に全てを飲み込んで行く。

その渦中にいながらカリスはただ一人、口を、心を閉ざすことしか出来ないでいた。

？・エピソード4

それから暫く、船はやって来なかった。

四人の心情はそれぞれに複雑だったが、比較的平穩に日々は過ぎて行った。

中でもカリスとコジロの二人は、顔を合わせていてもどこかぎこちなく、

微妙な関係が続いており、カリスに至っては故意に接触を避ける素振りさえ見せる。

明らかにコジロの方が戸惑っていた。

「やーっぱり、ここにいた」

「パト」

川辺に寝そべっているカリスを見つけ、呆れた風に声をかけた。

のどか
長閑な昼下がりに。

心地よい天候にも関わらず、カリスの周りだけ空気が淀んでいる。精霊も近寄れない程の負のオーラで満たされている。

パトは溜息を吐き、カリスの傍に座り込んだ。

「精霊たちが心配してるよ。気付いてるでしょ」

「うん……ごめんね」

「おれに謝られても困るけど……アレクサンドレの所にはコジロが？」

「……落ち着くみたい。毎日通ってる」

「本当にそれが理由？ だから、カリスは行かないんだ？」

「そんなに落ち込んで、本当は一番あそこへ行きたいくせに」

「……………」

カリスは答えない。

視線はずっと、湖面に向けられている。

ここにいても、どんな癒しも受けられないことは重々承知のはずだが、

これは意地なのか、それとも、もっと深慮を重ねた上の行動なのか。

陽帝サンの光に反応して精霊の羽がまばらに煌く。

カリスの心情に同調しているかのようだ。

「……もう一週間も、船は通らない。でもそろそろだと思っただ。

たぶん、明日」

「……………」

たぶん明日、などと、適当な見解だと思ってしまう所だが、

肝心な時に彼ら 【守護者】 がこの様に言うのは確かな裏付けがあるからだ。

きつと遠くまで調査しに行ったか、能力で船の位置を特定したに違いない。

パトはそれを伝えに来たのだ。

本当に、別れが迫っていることを。

「話をしておいでよ。おれは止めないから」

優しくもあり、悲しくもある言葉の響きに、カリスは胸を締め付けられる。

もうずっと、心の整理がつかないままだった。

自分の気持ち、コジロの気持ち、パトとチャム二人の気持ち、

そしてもっと多くの人たちの気持ち……。

考えれば考えるほど答えは遠のいていく。

自分は一体、どうしたらいいのか。

いや、どうしたらいいかというのは分かり切っている。
だから、こんなにも悩んでいるのだ。
どうにも出来ない事だからこそ、こんなにも苦しんでいる。

「……コジロに、何を、どうやって伝えたらいいか、分からないの……
言うべきことと、言うてはいけないことと、どうやって区別した
らいいのか……」

考えたてたりますます訳が分からなくなってくるの」「
「なんだ、そんなこと」

パトは苦笑する。

「もともと難しいこと考えるの苦手なんだから、訳が分からなくな
るのは当然だよ。」

「ごちゃごちゃ考えるんじゃないよ、素直な気持ちを伝えたらいい
んだよ。」

「……後悔しないように」
「……」

後悔しない。

その言葉は、思いのほかカリスの心に強く響き渡った。

大木の根元に、背を預け座り込んでいるのはコジロである。カリスと一緒に訪れてから、大好きな場所になっている。ここへ来て大木に触れていると、とても落ち着く。まるで母に抱かれる子のような感覚にもなる。かつて故郷にも、ここに負けぬほど大きな森があった。懐かしさも手伝って、こんなにも癒されるのかもしれない。

「怒らせてしまったのかな。どう思う、アレクサンドレ？」

問いかけると、不思議にも答えが返ってくる。ぎしぎしと枝葉が軋み、コジロは苦笑した。

「嫌われてはいないさ、きつと……複雑なんだ。それはよく分かってるつもりだ」

自らに言い聞かせるように、コジロは呟く。チャムとあの約束を交わしてから、というよりあの日から、カリスの態度が変化した。

何かを遠慮しているのか、よそよそしい。以前にも経験があるせいでもどうしても敏感に反応してしまっている。

オーロラの時にも裏があって、それに気付かず傷つけてしまった。失敗は二度と繰り返したくない。

「女の子は難しいね。僕はまだまだ未熟だな。どうしたらいいか分からない」

ここに毎日通っているのは、好きな場所だから、という訳ではない。

カリスが来るのではないかと期待して、ここに来ている。
カリスを、待っているのだ。

「……自分の気持ちも、よく分からないんだ。カリスのことを考えると、

もっと知りたいと思うし、一緒にいたいと思うし、

どうしようもなく惹かれてるのは確かだ。でも、この気持ちが何か、

はつきりしない。確信が持てない。それに 「

いったん、言葉を切った。

ふっ、と息を吐いて、コジロは遠くを眺めやる。

(それに、オーロラのこともある……。彼女はもういない。
でも、そう簡単に忘れられない。忘れてはいけない)

カリスへの気持ちがあつきりしないのも、それが一番の原因だろう。

当然と言えば当然である。

コジロの中で何も決着はついていない。

ただ、そうした悲しみや苦しみを和らげてくれる存在がカリスだ
というのも事実だ。

彼女といると、全て受け入れられ、赦ゆるされるような気持ちになる。
救われるような気持ちになる。

だが、それを全力で求めてしまっただけはいけないような気がするの
だ。

このタイミングでは駄目なような気がするのだ。

もう、与えられるだけの、救われるだけの人間であってはならない。
い。

「僕の進むべき道は、これで正しいと思ってる。
どうにもならない事を受け入れる強さも、僕には必要だ」

コジロはアレクサンドレに耳を澄ます。
葉がざわめき、独白を肯定しているように彼には思えた。

「ありがとう、アレクサンドレ。……でも、やっぱり、別れは辛いな。」

もう少しここで待ってみるよ……」

心地よい風に吹かれながらコジロは上空を見上げる。
重なる緑が風に揺れ、きらきらと零れる陽光に目を細めた。

カリスは川辺から戻り、自室にいた。
姿見の前で体を横に向ける。

亜麻色の髪に付けられた赤いリボン。
手でそつと触れてみる。

カリスが十歳の時、チャムにひどく怒られた事があった。
このリボンを、はさみで切ってしまったからだ。

「何してるんですか！ 駄目です！」

「きゃあ！ 何するのよー！」

いつもどこでどう見張られているのか、
すぐにチャムに見つかりはさみを取り上げられた。
カリスはむくれてチャムを睨む。
それに負けないくらい真剣な表情で、チャムは声を荒げた。

「馬鹿なことを！ 分かっているはずですよ、それが如何に大切な
ものか！」

何でこんなことしたんです？」

「だって、これがあると違うリボンをつけられないもん！
だからもういらぬの！」

不思議なりボンだった。

外すことは出来ても体から離すことが出来ないのだ。

例えば、お風呂に入る時、リボンを外してもそれを洋服と一緒に
置いておく、

ということが出来ないため、手首に巻きつけたりしている。
物心ついた時にはもう自分と共にあった。

ただ最近、違うものを身に着けてみたいと思うようになり、
この赤いリボンが邪魔になった。

不思議なりボンが果たしてはさみで切り刻めるのか、
好奇心の向くままに試してみたのだが、成功はしなかった。
チャムは溜息を吐いて、カリスの手からリボンを奪い取る。

カリス以外にチャムとパトだけは、そのリボンを手にすることが
出来た。

「ヘンな気を起こさないで下さい。違うリボンを付けたいなら、
このリボンは手首に巻くとか、首に巻くとか、
どこでもいいから持っていたらいいんです。ほら、後ろを向いて」

言われるままチャムを背にすると、亜麻色の髪にリボンが復活する。

いつもやっているので手馴れたものだ。

「このリボンはあるあなたのもう一つの【命】なんです。

妖精なら誰もが持つ、【守護精霊】です。

体から離れないのはあなたを護ってくれているから。

これを失えばどうなるか」

「それは知ってる。“じゅみょうがはんぶん”でしょ？」

「そうです。知っているなら尚更、こんな馬鹿な行為は二度としないで下さい」

「でも、おかしいと思うの」

「何がですか？」

首を傾げたカリスにチャムが聞き返す。

「だって、どうやっても体から離れないんだからリボンを失うわけないし、

それなら“じゅみょうがはんぶん”にだってならないはずよ？」

「……それは」

珍しくチャムが言い淀んだ。

カリスにしては鋭い突っ込みだった。

チャムはしばし考え、慎重に言葉を選ぶ。

「知らなくてもいいことですけど、その疑問に答えなければ、

あなたはまた同じ事をするでしょうね。だから、教えておきます。繰り返しますが、本当に知らなくてもいいことですからね？」

「うん、分かったから、教えて！」

カリスは振り向き、目を輝かせる。
チャムは重い口を開いた。

「われわれ妖精には 【二つの命】 があります。鼓動している命と、

【守護精霊】 です。後者は色んな形で存在していて、カリスはリボン、

僕はピアス、パトはペンダント、という風に、さまざまです」「え？ でも、チャムとパト、そんなのないよね？」

「もともとありました。けれど、【大地の契約】 によってあなたの 【守護者】 になった際、【守護精霊】 が一族の能力に変化しました。

だから形がなくなっただんです」

「ふうん……何か、すごいのね」

「まあ、それくらいの感想で十分です。

そして、普通の妖精はあなたのように形として

【守護精霊】 を持っているわけですが、先ほど言ったように、

【大地の契約】 によって存在の仕方が変わるので。その最たるものが、

【転送】 の契約、です」「てんそう……?」

「簡単に言えば、【守護精霊】 を別の者に渡すことが出来るんです。

理由はさまざまでしょう。例えば、愛する者を護りたい、とか、命がいくつも欲しいとき、とかね」

「命がいくつも欲しいときなんて、ある?」

「単なるたとえです。とにかく、そうして【転送】 を行うと、転送された相手に【守護精霊】 がつくことになります。

もしもカリスが【転送】 の契約を行ったとしたら、その時、はじめてリボンはなくなるのです。それと同時に、“寿命が半

分” になる、
ということですよ。

それに、【結婚】の時に、精霊も生まれなくなるんですよ。
どうですか？ 分かりましたか？」

カリスは暫く、呆けたように無言でいた。
チャムが再度名を呼ぶと、ふっと吐息する。

「何だかよくわかんないなあ……。
でも、精霊が生まれないのはイヤ。あれを見るのがわたしの夢なの。」

だから、てんそう、わたしには関係ないかな」

「まあそういうことです。このリボンの大切さ、よく分かりましたね？」

「はい。ごめんなさい。もうしないわ」

「分かってもらえたなら、いいです」

少しだけ笑みを見せたチャムの顔が安堵に満ちていたことを、
カリスは今、はつきりと思い出す。

鏡に映るリボンを見詰め、きゅっと唇を引き結んだ。

？・エピソード5

パトの言った通り、翌日、人間の船が近海に現れた。
チャムが潮の流れをコントロールし、船は訳もなく立ち往生する。
見る限り商船のようだった。

突然の事態に船上の人間たちはうろつろつと甲板を行き来し始める。

そんな様子を上空から静かに見詰めていたチャムは、
コジロとカリスを呼びに行つて暫くは戻つて来ないはずのパトが、
急に視界に進入してきたことに少なからず驚く。
明らかに疑わしい目をパトに向けた。

「何でこんなに早く戻つて来たんだ、つて言いたい目？」

先手を取つてパトが言う。

チャムは表情を変えない。

「早い遅いは関係ない。あの二人から目を離すなと言つたはずだが？」

パトは少しだけ肩をすくめてみせた。

「言うべきことは言ったよ。コジロ、船までは泳いで行くつてさ。
遭難者を装う方が怪しまれないからつて」

「そんな事は聞いてない。論点が違う」

「分かつてる。でも、ちゃんと一人で帰るみたいだし、
最後くらい二人に時間をあげてもいいと思つたんだ。
実際、雰囲気は他者を寄せ付けられない感じだしね」

パトは苦笑する。

野暮な行為だとも言いたげだ。

「……………」

「なんだよチャムー。無言になられると怖いんだけどっ」

「別に。言い訳は分かったが、それが裏目に出ないといいけどな」

「ハイハイ。相変わらず冷たいねえ」

ふてくされたように呟いたパトは、

船上でてんやわんやの人間を観察しながら二人の到着を待った。

二人に船の発見が伝えられたのはほんの数分前。

コジロは一人で庭にいて、飛んできたパトから詳細を伝えられた。

小さな商船であること、チャムの能力で水上に留まっているが、

人間にとつての異常事態はそんなに長く続けられないこと、

(つまり急いでくれということ)、などである。

様々なことに折り合いが付くと、パトがふと、

カリスは、と尋ねた。

コジロは苦笑して首を横に振る。

今日も朝から部屋に閉じこもりっきりで顔を見ていない。

コジロとパトは連れ立ってカリスの部屋の前まで訪れた。パトに促され、コジロがドアをノックする。返事はない。

「カリスミリア。船が見つかった。チャムが留めてくれてる。だから、急いで行かなければいけない」

コジロはいったん、言葉を切る。ドアに額を当て、瞳を閉じた。

「……本当に、何て言ったらいいか分からないけど……君に出会えて良かった。本当に、ありがとう」

コジロの様子を隣で見ていたパトは、思わず能力を発動してドアをこじ開けたい衝動に駆られた。これでいいのカリス、と、今にも叫びたい気持ちだ。だが、それもすぐに杞憂に終わる。

カチャ、と音がしたかと思うとドアが開き、カリスが現れた。

「……もう、会ってこないかと思った」

微笑むコジロの声がなぜか寂しさに溢れていた。カリスは首を横に振る。

「ううん。ごめんなさい。ちょっと、考え事してただけなの」

ドアをぐつと開き、コジロを部屋の中へと促す。

パトは、一瞬カリスと目が合った。

「……おれ、先行ってるよ。時間はあまりないからね？」

念を押すことだけは忘れず、二人がドアの向こうに姿を消すのを見送った。

部屋の中では、カリスとコジロが向かい合っている。

カリスが故意にコジロを避けていた所為で、しばらくぶりの面会だった。

まずは何も言葉が出てこない。

時間だけが刻々と過ぎて行った。

「……ほんとうに、帰るの……?」

意外としつかりした口調でそう問いかけたのはカリスである。

コジロは静かに頷いた。

「ここに、ずっと居たい気持ちもある。

環境もいいし、何より君がいる。でも……

僕にはやらなければならぬ事があるから」

「ここでは出来ないこと?」

「うん。帰らなければいけない。故郷に置いてきてしまったんだ。

僕が護るって約束したのに、逃げてしまった。

だからこのままじゃ終われない。

……簡単に赦されないことも分かってる、でも、

もうどんなことがあっても、僕は僕なりに約束を果たす。

そう決めた」

揺るがない決意が瞳に宿っていた。

誰がどの様に言った所で変えられぬ類の、

運命の潮流というやつだ。

コジロはまた一つ、人生の大きな選択をした。

それらを全身にひしひしと感じながら、カリスもぐっと瞳を上げる。

「……海岸でコジロを見つけた時、一瞬で人間だって分かった。人間は恐ろしいって聞いてたから、その場から逃げようと思ったの。」

でも、その時に、今まで感じた事のないような胸騒ぎがして、咄嗟に助けなきゃっていう使命感に変わったわ。

これまでそれがどうしてなのか不思議だったけど、今は分かるような気がするの」

「……………」

コジロは黙ったまま紡がれる言葉を聴いている。

慈しむような感覚で、カリスのひとこと一言に耳を傾けている。

「ヘンな言い方かもしれないけど、コジロには、特別な力があるんじゃないかな。」

……私も、コジロに会って少し変わった気がしてるの。

パトでもチャムでもダメだった、私のネガティブなところ、コジロは簡単に変えてしまった」

「僕は何もしてないよ。僕からすればカリスはずっとカリスだから。変わったと思うなら、それはカリス自身の力だ」

「……そう、かな……………」

「そうさ。それにカリスミリアは人を幸せにする力がある。これは本当」

カリスは頬を赤らめて俯く。

どこまでも優しいコジロの言葉に、

素直になろうとした自身の言葉などあっさり霧散していく気がした。

数日悩んでいたことも、このままでは無駄になってしまつう。

(言わなきゃ)

スカートの裾を両手で握り締め、カリスは顔を上げた。

「っ　好き!!」

「　」

一瞬の間。

カリスは必死だった。

本当は逃げ出したいくらい勇気のある告白。

でも、最後ののだ。

だから彼の瞳から目を逸らさずに、言つう。

「コジロのことが好き!!　大好き!!」

素直な気持ち、後悔しないように。

？・エピソード6

「……………」

コジロは、いつかの夜に、
寝ているカリスの口から零れた無邪気な言葉を思い出す。

（ “コジロお〜……………だあいすき” ）

そのの意味する感情を、
知っていないながら深く考えないようにしていた。
理由は複雑だ。
自分でも自分の気持ちがよく分からない。

「コジロ？」

無反応なことが不安になって、カリスが名前を呼んだ。
コジロは薄く笑みを返す。

「……………ありがとう、カリスミリア……………」

「そうだな……………正直、戸惑ってる」

「！ご、ごめんなさい、私、

コジロの気持ちなんて全然考えてなくて……………」

「あ、いや、違うよ、謝らなくていい。

そうじゃなくて……………だから……………」

「……………」

「……………何て言ったら一番いいのかな……………」

「言葉にするのは難しい」

コジロは数歩歩き、カリスの目の前に立つ。
そして両手を伸ばした。

カリスがコジロの腕の中へすっぽりと収まる。

「っコ、コジロっ……？」

カリスの動揺をよそに、コジロはただ無言で、
しばらくの間そうしていた。

位置的にコジロの心臓部分に耳を寄せる格好のカリスには、
穏やかな鼓動だけが聞こえてくる。

規則正しいリズムと暖かい体温に、
カリスもだんだんと心地良くなっていった。

「こうしてると、安心する」

「え？」

コジロが突然そう言った。

カリスは反射的に顔を上げようとするが、
そうさせない意思を感じさせる腕の力でまた元の位置に収まる。

「……ただこうして触れ合ってるだけで、

全ての不安や恐れ、悲しみが消えていくような気がする。

一人じゃないって、気付かされる。

そしていつの間にか笑顔を取り戻している。

こんな身近で簡単な方法を僕は忘れていた。

思い出させてくれたのは君だよ、カリスミリア。

今度は僕が、こうして皆を安心させてやりたい。
護ってやりたい」

腕の力が緩み、コジロはカリスを解放した。

そして真顔でその瞳を見詰める。

「君といるとほっとする。こんな気持ちは初めてだ。だから僕にも、どういう感情なのか分からなくて……でも、好きかどうかって聞かれたら、もちろん“好き”だ」

微かに、コジロの瞳が揺れたように見えた。

「……うん。分かった」

笑みを浮かべ、カリスは言った。

コジロもそつと息を吐く。

「そろそろ行かないと、チャムに怒られるわ」

「……そうだね」

二人は自然と手を取り合って家を出た。

暫く無言で二人は歩く。

急がなければならないと口では言っても、歩くスピードは徐々に遅くなっていた。

カリスがよく訪れる森の中のある川辺に辿り着いた時、とうとうぴたつと歩みが止まる。

「ねえコジロ。これからあなたの向かう場所は、どんな所？」

「……どんな……？」

唐突な質問に、コジロは首を傾げる。

問いの真意を掴めない。

「どんな、って……具体的にはどういう？」

「人間の世界ってどんな所？」

「ここみたいに自然がたくさんある？」

「ああ、まあ、こんなに澄んだ空気はしていないけど、自然のある所はあるんじゃないかな……。」

「僕の故郷の森は、もうなくなってしまったけど……。」

「それは……どうして？」

「……………」

コジロは言葉を詰まらせた。

平和しか知らない妖精の彼女に、

聞かせられる争いの話などあるはずがない。

「コジロはずっと、護りたいものがあるってそればかり言ってる。

今、人間たちは争っているのね？」

そこにコジロは飛び込もうとしている。

「そうでしょう？」

「……………うん。そうだ」

隠すことはしなかった。

率直に頷いてみせる。

何となく、心の枷が外れていくような不思議な感覚がしていた。

「なぜ争っているのか、僕にもよく分からない。

気付いたら渦中にいた。やらなければやられる。

そんな世界なんだ。

……………君たちからすれば、愚かだと思っただろうね。

僕だってそう思う。みんなそう思ってる」

「じゃあ、何故」

「何故？」

オウム返しに呟き、寂しそうに笑った。

「理由なんて考えるだけ無駄だよ。これが人間だ。」

「こつこつ世界をどうやって生きるか、それが一番重要なんだ。」

「僕は僕の闘いを生き抜くだけさ。」

「……………っ」

カリスは両手をぎゅっと握り締めた。

胸が締め付けられるように痛んだ。

“戦争を繰り返す人間は恐ろしい”

その方程式を超越した何かが、コジロの言葉の中にはある。

「コジロ、約束してね……………？」

「約束？」

「絶対に死なないで」

「！」

「もう会っちゃダメってチャムは言ったけど、

また生きて私に会って約束して？」

「カリス……………！」

ぎゅっと、カリスの片方の手がコジロの手を握り締めた。

「私が、コジロを護ってあげるから」

「え」

反対の手に、いつの間にか握られているのはあの赤いリボンだった。

きつく握ったりリボンを前に突き出す。

カリスはまた思い出していた。

何のきっかけだったかは忘れてしまったが、

【転送】の契約の方法を、パトから聞いたことがある。

『ぜんぜん難しくもなんともないよ。

おれと同じように言ったらいい。

真似してごらん？　いくよ　』

「太陽神トリスの名の下に、

我【転送】の契約せん”」

「ッ！！」

まるで炎のような勢いで、うねる白光が溢れた。

あっという間に二人を包み込む。

気付けばカリスの赤いリボンは消失し、

そこに青白い人の形をした小さな精霊が現れる。

それもまた光に溢れ、炎を纏っているようにも見えた。

『次はもつと簡単！

要は何でもいいんだけど、そうだなあ、

誰かに転送したいなら思いを込めて、

こんな風に言ってみたら？　』

「“この者を護り給え”」

刹那、どおっ、と衝撃が身体を伝い、

二人は咄嗟に目を閉じた。

数秒の後、

衝撃と光が落ち着いたことを察知して目を開けると、何事もなかったかのような平穏がそこにあった。

束の間、呆けたように二人は顔を見合わせる。

「何だったんだ……今の」

「あ、はは……すごい。びっくりした」

「びっくりしたのはこっちだよ。」

「今も妖精の力？ 何をしたの？」

「……言えないの。でも、ほら、これ」

そう言っ指差す先に、

見慣れない指輪リングがあった。

コジロの指に収まっている。

「いつの間に」

「それがあなたを護ってくれるわ。」

「一回くらい死んじやっても大丈夫なはず？」

「何を言ってるんだ？ 全然話が見えない」

「そのままよ。」

その指輪リングがコジロを護ってくれるの。

「本当よ？」

「……。とても信じられないけど、

君がそう言うなら、そうなんだろうな」

少し笑みを覗かせ、コジロは指輪リングを見詰めた。

それでもまだ少し狐につままれたような顔をしてはいるが、その内指輪リングの力が本当だと気付く日がくるだろうと、

カリスはそっと微笑む。

「指輪か……」

コジロはふと何かを思い出したように服のポケットへ手を入れた。取り出したのはこれもまた指輪だった。

「きれいな指輪ね！ これはコジロの？」

「……あえて言うなら、イルバートの物、かな」

含んだ言い方だったが、彼はかつてこう言っていた。イルバートは死んだのだ、と。

要はもう必要のない物ということだろうか。

「捨てようと思ったけど、捨て切れなかった。

でも今の僕が持っていていい物でもない。どうしようか迷っていたんだ。丁度良い。

これ、カリスミアにあげるよ」

「えっ！ だ、だめよ！

こんな素敵な指輪っ、もらえない」

「古い物だよ、小さな傷もいっぱいいついてる。それにカリスも強引にくれたよね？」

悪戯っぽく笑い、故意にその指輪を掲げてみせた。

「うう……そうだけど」

「はは、ごめん。

でも、カリスに持ってってもらいたいんだ。交換ってことなら、どう？」

「……うん。じゃあ」

カリスはコジロの手から、

確かに少々古ぼけた指輪を受け取る。
だが、やはり間近で見ると立派な指輪だった。

「さて。本当に急ごうか。

ずい分時間が経ってしまった」

「っ！！ たいへん！！ チャムに怒られるわ！！」

そうは言いつつも、

二人の顔には笑みが浮かべられている。

それまでの寂しさが嘘のように、心は軽かった。

まるで人間界の一部で伝わる “指輪の交換” という儀式が、
本当により強く絆で結ばれることを象徴するかのようだとは、
この時の二人には想像もつかないことだった。

？ ・エピソード7

「 遅い 」

到着してももの一番にかけられた言葉が、
チャムのそれだった。

恐ろしく低い声音は、

存分にその怒りを表している場合が多いが、

怒りは思ったほど深くはなかったようだ。

それ以上の罵詈雑言は一切なく、

淡々とコジロの乗船を手伝った。

シナリオ通り、

コジロは遭難者として手厚く船に迎え入れられ、
チャムが能力を解除すると船はすぐに動き出した。

その様子の一部始終を、

カリスは海岸沿いの岸壁から見守っていた。

寂しくないと言えば嘘になる。

だが、不思議と悲しくはない。

どの指にもぶかぶかかの指輪を握り締め、

カリスはいつまでもコジロを見送った。

船が見えなくなっても、

船が消えて行った方向をずっと見詰めていた。

そして、

「 また会おうね…… 」

秘密の約束を、そつと呟く。

人間という生き物は厄介であると、
いつかどこかで、妖精たちは必ず耳にする。

厄介な理由は語る者により様々だが、その中で唯一、
共通して挙げられるもの、それが、

時に妖精には理解不能なほど複雑化していく “感情”

だった。

257

もちろん、妖精にも多くの感情が存在する。
泣いたり、笑ったり、怒ったり、妬んだり、
それこそ人間と同じように。

だが、それによって争いを引き起こすことはない。
人間のように複雑化していかない。

だから、戦争などの殺し合いも決して起きない。

そんな発想すら湧かないのが妖精という生き物なのだ。

(どうして人間は、騙し合い、憎しみ合い、殺し合う?)

意味がないのに。

それに気付かず、愚行を繰り返している。

(いったい何のために)

(誰のために)

どんな争いも、戦争も、

人間には明確な目的などないのだと思っていた。

ただ盲目に、お互いを傷付け合っているだけだと思っていた。

身勝手に、我儘に、破壊を好んでやまない獣ばかりなんだと。

そうした人間の評価を、伝統的に、

一方的に伝え聞かされる中で、

それ以外の理由を持った戦いがあるなどどうして知り得ただろうか。

(“ 人間は、危険な生き物であり、

絶対に近付いてはならない……

交わってはならない…… ”)

微かな疑いが生じようとしていた。

あつてはならない事だというのは十分に承知している。

(ほんとうに盲目だったのは、どっちだ……？)

ぞつと、背筋が凍る思いがした。

海で命を落とした人間の、

巨大な思念の渦に飲み込まれたあの日。

それは初めての経験であり、

二度と陥りたくない失敗でもある。

だが、それ以降、幸か不幸か心が乱されているのも事実なのだ。

死した人間たちの、取り残されたどこにもやれない思いに、
隠された真実、勇気、そして優しさ故に戦うことがあるという事
実を、

今回思い知らされる事になるなど。

(……人間、か……)

いくら考えても消化し切れない思いを抱いたまま、
チャムはじっと、空中に佇む。

遙か遠く、コジロという人間を乗せた船が小さくなっていくのを、
いつまでも見詰めていた。

） F i n ）

？・エピソード7（後書き）

2011.8.8 完結。

結構時間がかかってしまいました。無事、終わりました。

ここまで読んで下さった方、本当にどうもありがとうございました。

露露

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6415e/>

カリスマリアの婿探し

2011年8月8日19時22分発行